

# アルカディア・プロ ジェクト

ムササ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

VRが全世界で人々に広く親しまれるようになって少した後、世界でおよそ1000万本の売り上げを記録したゲームがあった。「アルカディア・プロジェクト」と名付けられたこのゲームはVRゲーム全盛期で不動の人気を確立していた。

全身フルダイブ型VRMMO「アルカディア・プロジェクト」受験のために発売から1年間ログイン出来なかった青年。九条蓮也は一年遅れでその世界に脚を踏み入れた。「おめでとうございませす。貴方はアルカディア・プロジェクト1000万人目のプレイヤーです」

「つて、カボチャじゃねえか！」

これは、  
貴方へと贈る物語の物語

# 目次

Chapter 0 チュートリアル

プロローグ 博士の日記 | 1

Chapter 1 名も無き寒村より

愛を込めて

#1 名無しの南瓜 | 6

#2 探求者 | 20

#3 神秘防具 | 30

#4 兎と小鬼と猿と南瓜 | 43

#5 妹Ⅱ 天使の法則 | 54

#6 そして四人は邂逅す | 65

#7 限界村落の村娘 | 80

#8 お兄ちゃんとして | 92

#9 影、相対すは月の獣 | 104

#10 名も無き村へ | 113

#11 遠き日々はまだ | 123

#12 アルカディアのあれこれ

134

#13 遺跡と守人の一族 | 143

#14 灰は灰に、塵は塵に | 第一

項 | 153

#15 灰は灰に、塵は塵に | 第二

項 | 162

#16 灰は灰に、塵は塵に | 第三

項 | 174

#17 灰は灰に、塵は塵に | 第四項

# 23	鳶の宮殿 ver. 2	250	# 33	少女達よ希望を抱け	第三項	357
笑う						
Chapter II	道化は己の夢を嘲					
# 22	会議は踊る	239	# 32	少女達よ希望を抱け	第二項	345
		229				334
# 21	名も無き寒村より愛を込めて	218	# 31	少女達よ希望を抱け	第一項	324
# 20	灰は灰に、塵は塵に	209	# 30	旅路、出会うは		314
	第七項		# 29	ナフタにて		305
# 19	灰は灰に、塵は塵に	197	# 28	遠征準備		294
	第六項		# 27	シエル		283
# 18	灰は灰に、塵は塵に	188	# 26	新しい生活		272
	第五項		# 25	ヒーローズオーダー		261
			# 24	ティティ		

# 3 4 少女達よ希望を抱け 第四項

368

# 3 5 少女達よ希望を抱け 第五項

377

# Chapter 0 チュートリアル

## プロローグ 博士の日記

21 ■■年 5月19日

・私の最期の仕事を、私の痕跡を後世へと遺すためにこの日記を書き始めようと思う。最早、名譽は望まない。ただ、■■■■の明るい未来を望む。

21 ■■年 5月23日

・やはり、不可能だと言うのか。とにかく、人も時間も金も足りない。何もかもが不足している。それでも公に出せない以上、このまま続けていくしかない。

21 ■■年 6月10日

・ようやく、基礎が出来た。ようやく、ようやくこれで第一歩だ。

21 ■■年 6月17日

・くそつ、また失敗した。まだ人の形すらしていないというのに。これではヒトの■■■を持つ■■■を作るなど何年かかることか。

21 ■■年 7月2日

・嬉しいニュースだ。■■■が資金を出してくれるらしい。しかも喜ばしい事にまた新

しい賛同者が増えた！しかも三人もだ！

21 ■■年 7月16日

・それにしても■■■の追手が無いのが不安だ。もう諦めたのか？それだったらどれだけ良いことか。いや、やはり楽観視するのは良くない。アレは人を殺すのに値する価値がある。

21 ■■年 8月4日

・ははっ！ようやくだ！やっとここまで来た！人の形をした生物が現れた！ここがスタートラインだ。ワインを一本開けて、今日は早く寝よう。

21 ■■年 8月18日

・甘かった。やはり自然発生を待つのは失策だったか。しかし、我々が介入しては予期せぬエラーが起きる可能性がある。やはりここは新しいアプローチを考えねば。

21 ■■年 8月30日

・人の形にこだわるのがいけないのか？そういえば、娘の好きな絵本にはヒトとは違う様々な種族がいたな。

21 ■■年 9月15日

・人型にすらならない。もう中は30万年以上経っているのだぞ!?

21 ■■年 9月16日



・昨日は取り乱してしまった。醜態を晒すのは慣れているが、今は良くない。集中して取り組まねば。

21 ■■■年 10月6日

・これは――

(よほど急いで書

いたのか判別不可)

21 ■■■年 10月14日

・ついに、ここまで来た。長い道のりだった。ようやく、一人目だ。ん？名前か、そうだな、お前は■■■だ。これから宜しく頼む。

21 ■■■年 10月15日

・■■■と相談した結果、やはり最初の大枠のプログラミングは我々ですべきだという結論に達した。■■■も最初のプログラミングは私がしたからな。

21 ■■■年 11月1日

・どうやら■■■は私の権利を委譲することで中をある程度弄れるようになっていようだ。これからは私の代わりに■■■に任せようと思う。

21 ■■■年 11月20日

・今日は珍しく来客があった。私の数少ない賛同者の一人であるケビンだ。■■■と三人で楽しく語り合った。

21 ■■年 12月9日

・今日は祝杯だ！■■■■に新しく弟か出来た！彼には■■■■という名前を与えた。姉の仲も良さそうで何よりだ。

21 ■■年 12月25日

・昨日は久しぶりに■■と会った。元気そうで一目見ただけで泣きそうになった。さあ、また頑張ろう。

21 ■■年 1月14日

・最近、身の周りが騒がしい。どうやら■■■の追手が近くまで来ているようだ。しかし、ここを放棄する訳にはいかない。ましてや■■の為だ。防御を固めよう。

21 ■■年 3月4日

・また一人増えた！これで五人目だ！■■■■、■■■■■■■■に続いて短期間で三人も増えてくれたのは本当に喜ばしい事だ。そろそろこの世界も名前を決めなければ。いつでも中では味気ない。

21 ■■年 4月2日

・決めた。この世界はアルカディアと呼ぼう。大陸の名前はオルコス。この計画の名前はアルカディア・プロジェクトだ。ん？そうか、お前たちも気に入ってくれたか。

21 ■■年 5月12日

・どうやらここまでのようだ。外から多くの発砲音がする。アレのデータはアルカディアの中に入れた。ははっ、これを見たい■■■のお前！ざまあみろ!!？精々四苦八苦するがいい！アルカディアでは■■■■■が起きてしまったが、九人がどうにかしてくれるだろう。後のことは頼んだぞ。私の可愛い電脳の子供達よ。全ては伝えた通りだ。私はもう疲れた。もし生まれ変われると言うのなら次はアルカディアで生きてみたい。はっ、散々神を呪った私にそんな資格は無いかな。もし、この日記が世間に出た時の為にこの文を残そう。

英雄よ、挑み給え、そして願わくば

# Chapter 1 名も無き寒村より愛を込めて

## #1 名無しの南瓜

21■▲年 5月12日 その日、世界のゲーム事情は一変した。本当にそれほど  
の衝撃を全世界に与えたのだ。ある一本のゲームの発売によって。

ゲームの名前は「アルカディア・プロジェクト」日本語に直訳すれば理想郷の計画と  
訳されるこのゲームは、繰り返しになるが全世界のゲーム事情を一変させたのだ。

VR技術が本格的に実用化してから100年間。正直言つてまともなゲームは一つ  
も現れなかった。人々が求めていたのは現実と寸分変わらぬリアリティの身と心を震  
わせる冒険活劇なのだ。断じて現実と寸分変わらぬリアリティの教室で受ける教材用  
VRではない。

その100年で世界はVR技術を使い、様々な進歩を遂げた。しかし、フルダイブ型  
のVRMMOはついで現れなかった。だからだろう、人々が諦めかけた時にいきなり現  
れた「アルカディア・プロジェクト」はとてつもない衝撃を与えた。

他とは比べものにならないリアリティ、全く違和感のない五感。そして特筆すべきは  
NPCである。作品レビューやネット掲示板に数多く書き込まれた「本当は異世界なん

じゃないの？」という書き込みが全てを表していた。なにせ、そのNPCは誰の目から見ても生きてるようにしか見えないのだから。

そこから「アルカディア・プロジェクト」の人気は噂に乘算されるように広まった。「Arkadia Project」として世界中に広く発売された。それまで日本の一企業に過ぎなかったニトワイアの名は世界中に広まることとなる。

更に驚かせたのが製作者の名前である。「アルカディア・プロジェクト」が発売される2年前に強盗に殺害された橋本司博士がこのゲームの製作者だと言う。橋本博士は世界的に名高いVRの基礎を築いたと言われる科学者の一人である。そんな橋本博士が最後に残したVRゲーム、それは今までゲームにあまり興味のなかった層を惹きつけるのに最適であった。

「アルカディア・プロジェクト」が世の中に売り文句としたのは三つの目玉要素であった。

一つは完全なリアリティ。製作者の橋本博士が異世界を作るとまで豪語したと言われるリアリティはそれに恥じぬクオリティであった。

一つは単一サーバ、オープンワールドシステム。例え世界中の全国民がアルカディアに移民したとしても耐えられるだけの強固なシステム設計。

一つはユニーククエスト。これが「アルカディア・プロジェクト」最大の目玉であり、

目的である。プレイヤー個人個人にランダムに発生するクエストはそれ一つ一つが一期一会であり、逃すと二度と同じクエストには出会えないと言われている。更にその中でも特別に位置付けられているのがユニーククエスト。それ自体がアルカディア全体に大きな影響を表すこともある重要なクエストである。

一例を挙げれば、過去に「国王の暗殺」というユニーククエストが発生したこともあると言う。それが成功すれば世界にどんな影響を与えるか分からないだろう。まあ、そのクエストは失敗。クエストを発生させた国の中の内乱が起き、国民がおよそ五千人犠牲になるだけで済んだらしいが。ああ、悪く思わないでくれ。実はアルカディアではプレイヤーがログインしてから一度だけ大きな二国間戦争が起きた事があるのだ。その時の被害はプレイヤーを除いて30万人もの死者が出たと言われている。それに比べれば、ねえ？

ちなみに言うところ今現在に至るまでニトワイアは一度も声明を発表したことはない。ただ、一度だけ「アルカディア・プロジェクト」の総合統括AIアンナが15秒のCMを流しただけである。その中の言葉、恐らくは最も人間が「アルカディア・プロジェクト」に惹きつけられたあの有名な言葉をもつて締めくくらせてもらう。

「英雄よ、挑み給え、これは貴方へと贈る物語、貴方が作る物語、貴方の為の物語。そして、願わくば、アルカディアに光ある未来あれ」

ーとある「アルカディア・プロジェクト」のレビューより抜粋ー

~~~~~

「よっしゃ、あつたー!!」

年甲斐も無くはしゃいで大声をあげてしまうほどにテンションが上がってしまったのには理由がある。

俺、九条蓮也はゲームが好きだ。正直将来はプロゲーマーに憧れるくらいには好きだ。だがら高校三年生の春、「アルカディア・プロジェクト」が発売された時には涙を流して憤慨した。なぜ、よりによって今なのかと。

熱中してしまうのは目に見えている。しかし、どう考えても大学受験を疎かにするのはまずい。俺は、涙を飲むしか無かった。まあ、発売初日に買うのは買ったんですが。ちなみに今でもこの「アルカディア・プロジェクト」プレイヤーデータの作り直しが出来ないこともあって中古が全く存在しない。発売価格は15000円という挑戦的なものだったが、今ではオークションで30000以上の値段がつくこともあるらしい。プレイヤー総数1000万人ほど、まあ確かにそれだけの値段がつくのもわかる。今でも数少ないニトワイアが出している公式の新品はすぐさま売り切れになるらしい。

「この一年は長かった」

前のゲームからずっと付き合っているゲーム友達には「早く始めようぜー」という悪魔の囁きを喰らい続け、少しでも成績が落ちようものなら親からの「アルカディア・プロジェクト」って今売つたらいくらになるのかしら？という脅しをかいくぐり。今ようやくその苦勞が報われたのだ。

速攻で両親に報告、そして自室にダッシュで戻る。

ちなみに結果発表は家のホログラムタブレットを見た。大学は家から離れており、もう入学が決まったので来週から引越すこととなる。念願の一人暮らし、ビバ！「アルカディア・プロジェクト」！

「この後の予定は無い、飯も食った、よし！」

ゲーム機の電源を入れ、未開封の「アルカディア・プロジェクト」のソフトをインストール。個人認証メモリーをセット。ヘルメット型のゲーム機を被れば準備OK！カウントダウンが始まり、0になった瞬間視界が暗転した。

~~~~~

「ようこそ、アルカディア・プロジェクトへ」



鈴の鳴ったような美しい声色で目を開けた。

目の前には現実に存在したら間違ひなく芸能界にスカウトされそうな美少女が無表情で立っていた。

「えーっと、どうもよろしくお願いします」

挨拶されると返してしまうのは礼儀正しい父に仕込まれた俺の癖だ。

すると目の前の美少女は少し驚いた表情をする。おおっ、本当に凄いなリアリティ！  
「人間にしては話の分かりそうなので助かります。ここは「アルカディア・プロジェクト」のログインスペースとなっています」

なんかナチュラルに人間全体をデイスラれた気がするけどそういうキャラなのだ  
流しておこう、それよりログインだ。

「えっと、ここでプレイヤーとしてログイン出来るってこと？」

「そういう事になります、申し遅れました。私の名前はプレイヤーナビゲーターAIIのクララと申します。以後、お見知り置きを」

ペコリ、と綺麗な90度のお辞儀。

なるほど、ナビゲーターAIIか。確か、「アルカディア・プロジェクト」にはいま確認できているだけで五人のAIIがいるんだったな。しかも全員が美男子、美少女。現実にもファンクラブが有るって聞いたことがある。それに他のゲームとは比べることすら

出来ないリアリティのNPCに比べて、もっと凄いと聞いたな。

「よろしくお願ひします」

「はい、話がテンポよく進んで何よりです。まずは貴方のプレイヤーネームを決めて下さい」

「ロータスで」

何ということはない、名前の蓮也の蓮を英訳しただけ。まあずっと使っている名前だし今更変える気はない。

「重複は……無しですね。プレイヤーネーム、ロータス。承認しました」

おお、危ない。重複ネームは無しなのか。

「重複ネームは有りですが、見分けの為に色々しなければならぬのでこちらとしては手間が省けて嬉しい程度です」

あつ、そう。

「次は容姿を決めて頂きます。個人認証メモリーを元に作りますか？」

「はい、それでよろしくお願ひします」

「了解しました」

何やら操作をすると、目の前に俺が現れた。

さまざまなシークバーがあつてそれを操作することで身長や体重、肌の色を変えられ

るらしい。

「細かい設定をするより先に種族を決めて頂いた方が楽だと思いますのでそちらを推奨します」

クララが手を横に振ると俺のプレイヤーアバターが横にずれて元にあつた場所に地図が映し出された。

少し待つと赤い光点が五つ現れた。

「この光点が初期に所属する国と種族です。それぞれ変更する事も出来ませんが、ある程度進まないとは不可能なのでご注意を」

クララが説明を終えると、赤い光点の上に文字列が浮かび上がった。

世界最大の美しき堅牢なる城を王都とし、まさに王道ファンタジーを形にしたような人間の国、「ストルタス」

狩をして、自然の恵みを受け、様々な部族がたつた一人の絶対的な力を持つ王の元に集まりできた獣人の国、「プグナーテ」

世界樹を中心に、自然と共に生き、長きを知識の研鑽と技術の進歩の為に歩んできた、深き森のエルフの国、「アロガネア」

石と鉄を打つ音が一日中間こえる技術大国にして、世界最大の武器商人が集まり、そして世界中に散らばっていくドワーフの国、「テナースク」

世界で一番進んだ科学とそれに後押しをかける世界最強の魔法大国にして軍事大国、  
敵しい自然を生き抜いた魔族の国、「クルーデリオ」

おおつ、どれも素晴らしい！まさに地球とは違うのだから、事強く認識できる。正直  
どこにも行ってみたい。が、もう種族は決まっている。

「種族は人間でお願いします」

実は1年待たせたゲーム仲間が三人共人間にしているのだ、ここで違う選択肢を選ぶ  
のはちよつとどうかと思うし、出来ればあいつらと一緒にゲームがしたい。

「了解しました、では細かい容姿の設定をお願いします」

とりあえず、そのままは無しつと、細かいディテールを変えて、一目で俺と分からな  
ければ良いかな。あんまり体格とか変えると操作し辛いつて聞くし。

「ほい、これで」

「では次は初期装備です。この中よりお選び下さい。武器は使用不可になることは有り  
ますが、決して壊れない貴方の相棒となります。武器は貴方の成長とともに形状を変  
化、進化していきますので慎重にお選び下さい」

クララの説明の通り、「アルカディア・プロジェクト」は最初に選んだ武器を延々と強  
化していくシステムである。文字通り、相棒というわけだ。

「じゃあ、小太刀で」

「了解致しました。初心者特典としてマジックバッグ（小）といくつかのアイテムを付与致しましたので後ほどご確認を。それと当面の資金となります。こちらも無くさぬようご注意を」

クララが言い終わると、小さなポーチと小太刀が俺の腰のあたりに装備された。

「マジックバッグ（小）は大体そのポーチの50倍ほどの体積があるとお考え下さい。これで殆どのチュートリアルは終了ですが、何か質問はございますか？」

「えっと、職業とかは決めないの？」

「職業はプレイヤー全員最初は旅人となっています。念じればステータス画面が表示されますので後ほどご確認を」

「えっと、じゃあ大丈夫かな」

「了解致しました、それと最後になります」

クララがどこから出したのか分からないがクラッカーを取り出す。

そして、パアン！という音とともに紙吹雪が舞う。ちなみにクララの顔は無表情だ。

「おめでとうございます。貴方はアルカディア・プロジェクト1000万人目のプレイヤーです」

えっ。……………まじかー!!!

「えっ、ちよっ、マジ？」

「マジです」

「よっしゃー！今それを言うって事は何か有るって事だよな！」

「はい、メモリアルナンバーのプレイヤーには特典防具を渡すことになっています」

キターーーー!!

やべえ、めっちゃ嬉しいんだけど！

「これが貴方の特典防具です、後生大事に抱えなさい」

すると、俺の両手に収まるほどの丸いシルエットが……これは。

「って、カボチャじゃねえか！」

そこに現れたのは銀色のどう見てもハロウィンとかによく見る目と口がくり抜かれたあれであった。

これは、あれだ、ジャック・オー・ランタンってやつだ。

「何を言いますか、武器管理AIが手作りしたこの世に一つしか無いユニーク装備です。本来ならば咽び泣いて受け取るべきものです。そんじよそこらの装備とは一線を画しています」

えー？このカボチャが？

「そんなに疑うのならば見せてあげましょう。ステータスオープン」

クララがそう呟くと目の前にポップアップが現れる。



「これ、一生手放せないって事じゃない？」

この不可とか対象外の羅列的に俺のアイテムとして残り続けるって事だよね。装備変更不可とかじゃなくて良かったけどさ。

「この名無しの南瓜に限らず、ユニークと呼ばれる装備は所有者の変更を一切受け付けておりません。だからさつき言ったじゃないですか。後生大事に抱えなさいって」

詐欺だろこれー！言うともまたねちねち言われるのが分かってるから言わないけどさ！

「まあ、分かった。外見はアレだけど性能は凄いいし有り難く貰っておくよ」

どうせ返品も出来ないだろうし。と心の中で呟いておく。

「では以上で初期チュートリアルを終了させていただきます。何か質問はございますか？」

「いや、特にはないかな」

「左様でございますか。ではストルタスの王都へ転送致します。定型文ではございますが、我々が最も伝えたい事を最後に伝えて終わりとさせて頂きます」

そして彼女は言ったのだ。この後の俺の運命を決定づける。あまりに有名な、あの言葉。

「英雄よ、挑み給え、これは貴方へと贈る物語、貴方が作る物語、貴方の為の物語。そし



て、願わくば、貴方の旅路が光溢れるものでありますよう」

転送の光の中、俺が最後に見たのは、恐らく本心から微笑んでいるクララであった。

その時俺は確かに思ったんだ、

「ああ、クララは人間なんだ」って。

## #2 探求者

そこは人類の歴史そのもの。都市全体を城壁で囲んだこの街は世界最大の都市であり、城。人の叡智が築き上げた世界最大の建築物。中心にそびえる一際目立つ白亜の城とその城下町全てを指して人は言う。「これぞ究極の一である」と。名を人間国 ストルタス、王都エターリア。

アルカディア ガイドブックより抜粋

~~~~~

「うおっ、と」

視界が光りに包まれたと思つたら、数瞬の浮遊感の後固い感触の地面。目を開ければ  
：

「うわ、すげえ」

軽快な音楽を鳴らしながら何かのパフォーマンスらしきものをしている人。大声で客引きをしている声。晴れの日を楽しそうに満喫する親子連れ。何より目に入るのが、物々しく武装した多くの人々。

俺は、アルカディアの地に降り立ったのだ。

「これが、異世界を謳う程のVR。すげえとしか言いようがないな」

辺りを見回すとここはどうかやら広場らしい。えっと、こう言う時はマップだな。

ウィンドウを操作してマップを引っ張り出す、どうかやら確かにストルタスの王都で間違いないようだ。なら確かここで待ってれば迎えをよこすとか言ってたよな。

そう思いながらウィンドウを閉じて目を開ける。と、なにやら視線が。えっ、何？  
「おにーちゃんも、だいどーげーにんの人？」

トテテテという擬音が聞こえそうな感じでひとりの女の子が走り寄ってくる。は？  
だいどーげーにん？ 大道芸人か？ 俺が？ 見渡せば何やら俺は色んな人からも好奇の視線を向けられていた。明らかに日本人っぽいプレイヤーの人からもだ。

「えっと、残念だけど俺は大道芸人じゃないんだ。ごめんね」

そこまで言うとなりの子は不思議そうな顔をする。やっぱ凄いなアルカディア・プロジェクト。マジで人間にしか見えないぞ。

「そっかー。じゃあなんでおにーちゃんは変なお面してるのー？」

「へ？ーあーあ」

あー！このカボチャのせいかな！

どうやらいつのまにか装備されていたようだ。どうりでちよつと視野が狭いし頭が重いわけだ。いや、気づけよって話だがVRに慣れないうちはそういうこともあるって

言う話聞くし、そんなもんかーで済ませてたわ。

「あつと、これは」

俺が答えに窮していると女の子の母親らしき人が慌てた感じでこっちに来た。

「もう！勝手に走っちゃいけませんって何回も言ってるでしょ！ごめんなさいね、何か変なこと言いませんでした？」

「ああ、いえ大丈夫です」

「すみませんね。さあ、行くわよ」

「うん、じゃあねーカボチャのおにーちゃん！」

「ははは」

手を引かれながら歩いて行く女の子に手を振り返しながら思わず引きつった笑い声を出してしまう。外見では分からないだろうがカボチャの被り物の中の表情はおそらく相当引きつっているだろう。そんな確信がある。

クララには今度会ったら文句言っておこうと思いました。

取り敢えずはサツサとこの装備を外そう。目立ってしかたない。多分1000万人目のログインのメモリアル装備なんて誰も気がつかないだろう。プレイヤーズメイドのネタ装備だと思ってくれろさ。

「過ぎた事を悔やんでも仕方なし、そんな事よりそろそろ約束の時間なんだがつ、と。あ

れかな?」

目の前の大通りらしき所から歩いてくるひとりの青年アバターに俺は見覚えがあった。正確に言うとその顔にと言うところか。

声をかけようか迷ったが、どうやらあちらも気が付いたようだ。

「おっと、そこにいるのはロータス、蓮也で良いかな?」

「ああ、久しぶりだな。クリップ」

腹が立つ程のイケメンフェイス。いや、そもそもゲームの中なんだから男女問わずアイドル並みのルックスしか居ないのだが、こいつの場合はリアルとそんなに顔を弄っていないから腹が立つ。

こいつの名前はプレイヤーネームはクリップ。リアルの本名は榎本 和樹。俺の1歳上で俺が春から通う大学の先輩である。まあ付き合いがもう五年くらいになるので先輩という感覚は全く無い。

「ようやく受験終わったのか、めっちゃ待ったぞおい」

「ああ、ごめんごめん。でもクリップだって去年受験したんだろ?」

「いや、俺推薦だし」

「あつそ」

ちなみにこいつ、頭も結構いい。勝ち組ってやつだ。友達じゃなかったら殴ってる。

「まあ、それはともかくとしてだ。凄えだろ、アルカディア・プロジェクト」

「ああ、そうだな。さつきから凄えしか言つてないよ」

「だろ？ どうやってこんなゲーム作ったんだろうな。時代の先取りなんてもんじゃないぜ」

「まあ事故があつたつて話も聞かないし楽しめれば良いんじゃないか？」

「まあ、そうだな。取り敢えずここで立ち話もなんだし組合行こうか」

「組合？」

まあ何となく響きで分かるが一応聞いておこう。

「いわゆる冒険者ギルドだな。アルカディア・プロジェクトでは冒険者じゃなくて探求者だが。基本的に俺たちプレイヤーはNPCからは探求者と呼ばれ、認識される」

「探求者ね、珍しい呼び方だな」

「このアルカディア・プロジェクトの名称はラテン語に寄つてるからな。そこからだろう。ちなみにこの探求者組合に入らないと相当なペナルティらしいな。検証した奴がいるが途中で諦めざるを得なかつたらしい」

「へー。NPCに探求者は居ないのか？」

「いや、結構いる。つーか俺たちより強いNPC探求者なんてごろごろいるぞ。トッププレイヤーでも勝てない奴もまだまだ多いしな。ああ、あとこれは絶対守った方がいい

暗黙のルールなんだが、NPCって呼ばない方が良い。プレイヤーの中でも意見が分かれるくらいこのAIは凄いし、NPCって呼ぶと何かしらのカウンターが溜まってヘイトが集まるって話だ」

「まじかよ。じゃあこのN:あー、AIはなんて呼べば良いんだ?」

「基本的にはその人の人名で。プレイヤーと分けて言う場合はクオーレって呼んでるな。意味は知らん聞くな」

「クオーレね。了解」

中々に重要な情報だ。クァエストール探求者にクオーレね。覚えた。結構こういうのがゲーム攻略に大切だったりするからなあ。

「んじゃあそろそろ行くか。今日はどれくらいログインしてられんの?」

「あー。取り敢えず夜までは。確かアルカディア・プロジェクトは3倍だったよな?」

「おう、3倍だ。だからざっとゲーム内時間で今日一日は平気だな。戦闘まで行けるだろ。そういうや武器は何にしたんだ?」

「小太刀だな。片手で使えて、今までのゲームで馴染みがあつて、一番使いやすいし」

「やつぱな。大体お前こういう系のゲームやるときはそういう武器選ぶよな」

「まあ、現実で何かやつてるわけでもなし、それならゲームとはいえ使い慣れたのがいいだろ」

「まあ、そうだな。俺も相変わらず魔法職だし」

そう言うクリップの格好は普通の市民って感じだ。とても探求者には見えない。

「装備とかどうしてんの？まさかそのまま闘う訳じゃないだろう？」

「俺は全部まとめてマジックバッグに突っ込んで。戦闘の時に一括で取り出す感じだな。普段から付けてたいって奴も居るけど」

「へえ。そういうやネオンとトト姉は？」

「ああ、あいつらは今日はログイン出来ないってよ。合流は明日からだな。ちなみにネオンがヒーラー兼バッファア。トト姉がタンク兼物理アタッカー。いつもの構成だな」

「で俺が遊撃でクリップが魔法アタッカーね。ほんと役回りでもめなくて楽だよな」

「まあだからこそ5年も俺らの仲は続いているんだらうよ」

「違うない」

そんな話を話しているうちに俺らは王都のほぼ中心に位置する大きな建物についていた。ここが探求者組合だろう。

「ここがストルタスの探求者組合本部だ。基本的にここで通常クエストを受けたり、換金したりする訳だな。最初のうちはここを中心に回ることになる」

「成る程。で俺は登録をする訳だな」

「そ。じゃあ俺はここで待ってるから」



そう言って近くの椅子に腰掛けて何やら飲み物を注文し始めた。こういうものの約束、酒場か？いや、ただの軽食スペースっぽいな。

まあ取り敢えずさっさと登録を済ませよう。無職からジョブチェンジだ。

「えっとすみません。探求者組合に登録したいんですが」

意外にもカウンタ―は混んでおらずすぐに対応された。うむ、美人受付嬢は定番だな。

「はい、かしこまりました。プレイヤーの方ですね。ではステータスウインドウを見せてもらってもかまわないですか？」

「了解です」

俺がステータスウインドウを表示すると、受付嬢さんが何やら手元から白紙を取り出してかざすとみるみるうちに文字列がコピーされていった。おお、凄いな。

「はい終わりましたありがとうございます。では探求者としての役割をお選び下さい」  
 そういうと、受付嬢さんは何やらウインドウを表示する。そこに書かれていたのは。

|||||||  
 |||||

ジョブチェンジ候補

戦士 軽戦士 重戦士 魔法使い 治療師………エトセトラエトセトラ。

現在の職業は旅人です

|||||

多いよ！つーか小太刀選んどいて魔法使いとか選べんの!?めちやめちや自由度高いなおい！まあ、ここは無難にいくけどさ。例えば長剣持った治療師とか杖持った重戦士とかいるのかな？

「軽戦士でお願いします」

「はい、かしこまりました。次回以降のジョブチェンジ、及びクラスチェンジは個人のステータスウィンドウから可能です。続いてクエストの説明に入らせていただきます」

そういうとまた受付嬢さんはウィンドウを表示する。

「ここ」、探求者組合では探求者の皆様にクエストを発行しております。基本的に私から見て左手側にクエストを張り出してあります。クエスト用紙を我々まで持ってきて頂ければ探求者の方々のウィンドウに細かい要項を添えて送付致しますのでそれでクエスト受注完了となります。クエストを完了して頂きますと我々に報告して頂ければ報酬をお支払い致します。続行不可と判断した場合、もしくはクエスト中に死亡された場合は報酬受け取り不可、更に罰金が科されますのでご注意ください。大まかな流れは以上となります。細かい要項は後ほどウィンドウまで送付いたしますが何か質問等はございま

すか?」

「いや、無いです」

まあ良くあるパターンだな。何か独特なルールとかあったら後でクリップに聞いてみよう。

「では以上で説明を終了します。何か全体の質問はございますか?」

「じゃあーっだけ。探求者組合を通さないとクエストを受けるのはやっぱりマズイですか?」

「いえ、特には。むしろ積極的に受けて頂きたいですね。勿論非合法なのはご法度ですが。見つかった場合は組合からの追放に国からの指名手配です。くれぐれもご注意を」  
「分かりました。ありがとうございます」

「はい、では改めて我々探求者組合は新たなメンバーの誕生を心から歓迎致します。  
クアエストール  
探求者に祝福あれ、貴方の旅路が光溢れるものである事を祈っています」

うお、やっぱ凄えな。ゲームの中と分かっているにもマジで惚れ込みそうな笑顔だよ、本当。

## #3 神秘防具

「よう、終わった?」

受付嬢さんの説明が一通り終わったのでクリップの所まで戻って見ればクリップは一人で何やら柑橘系の香りのジュースを飲んでいた。

「そういうや、前にやってたゲームは味覚設定とか酷かったな、極端なものしか感じないとか普通だったし。」

「ああ、終わったよ。細かいのは全部すっ飛ばしたけど平気?」

「平気平気。そういうのはトト姉が詳しくやってくれる。そういうの好きだし」

「そういうやそうだったな」

トト姉はそういう細かい設定とか大好きだからなあ。殆ど身内で集まってるときとかは歩く辞典になってるし。

「じゃあ取り敢えずは装備とアーツだけやったら戦闘やってみるか。組合の奥の部屋借りて来るからちよつと待ってる。その間スキルのヘルプでも見て待ってる」

「りょーかい」

クリップを見送りつつ、今さっきウィンドウに送られてきたヘルプを開く。えっと、

アーツっと。

どうやらざっくりと読んだ結果、結構どこにでもあるアーツ習得の仕方を採用しているらしい。

その1、アーツを習得するには特定の職業に就くか、特定のアイテムを使用する、特定の行動をするなどといった事が必要。

その2、アーツは習得しただけでは使用出来ず、有効化しなければならぬ。有効化にはアーツの難易度に応じたアーツポイントを消費しなければならず、アーツポイントはプレイヤーのレベルアップと同時に加算される。

その3、アーツは職業対応の一部のものを除き忘却出来ず、慎重に選ばなければならぬ。

んで、アーツと似たようなのにスキルがあると。

その1、スキルは基本的に防具に付与されている。世代を重ねた武器にも付与される。

その2、スキルはアーツと違いその装備を外せば使えなくなる。

その3、スキルにはパッシブスキルとアクティブスキルがある。

つまり分かりやすく言い換えれば、アーツが技、スキルが効果。そのままだな。

そんなもつて、ついでに開いた俺の現状ステータスがこれ。

ロータス 男性

L v. 1

職業 軽戦士Lv. 1

固有武器 小太刀

HP 100

MP 100

STR 25+50 (75)

INT 5 (5)

VIT 10+50+25+25 (110)

MND 10 (10)

DEX 30+10 (40)

AGI 35+10 (45)

有効化アーツ

有効化スキル

~~~~~

各ステータスの一番左が俺の素の数値。+で表示されているのが装備の数値で○の中

が合計値らしい。俺の職業である軽戦士はDEXとAGIが伸びやすい傾向にあると書いてあるが、その伸び方もプレイングで変わるらしい。レベルは全く何もしていないので1で当然、アーツとスキルも空欄だ。あつ、いやそういやなんかあの南瓜にはなんか付いてたな。まあここで確認すると騒ぎになる事間違いないなのでこれは保留で。周りに結構プレイヤーらしき人もいるし。

「おう、終わったぞ。付いて来い」

「おっけー、俺も今終わったわ」

最期まで見終わった時にちょうどクリップが帰ってきたので大人しく付いていくにしてもこいつやたらと注目浴びてんな、何でだ？

じろじろと視線に晒されながら俺たち二人はクリップがとった組合の奥の個室へと入った。

「なんでお前あんなにじろじろ見られてたんだ？」

入ってすぐに、気になっていた事を聞く。

「あー、そりゃ、あれだよ。いつも俺ネオンとトト姉とパーティ組んでるから」

「なるほど。両手に花のイケメンクソ野郎に見えるわけだ」

「そういう事」

VRゲームが世に出回って久しいが、現状VRの中と現実とで身体を極端に弄ること

は出来なくなっている。理由としては簡単、身体が動かせなくなるからだ。VR発明初期は身長弄ったり、極端なイケメンにしたり、それこそTS性転換も出来たらしいが今では全部禁止だ。人間の体は案外緻密に計算されつくして動いている。結局脳波といえど自分で動かしている以上あまりに現実の体と乖離し過ぎたアバターを動かすのは実際のところ不可能なのだ。身長は弄りすぎるとふつうに転ぶし、顔も弄るとうまく発声出来なくなる、TSなんて以ての外で全く動かなくなったらしい。そんな事故が多発して余りに現実の体と乖離したアバターは作れなくなった。

なんでこんな話を長々としたのかと言うと、このイケメンクソ野郎と組んでいるパートナーアルカディア・プロジェクトは、おそらくと付けたのはこのゲームでの二人のアバターを見ていないからだ。前のアバターと弄っていなければ美人と違って差し支えない。100人いたら99人は美人と言うだろう。先に話した通りアバターはあまり現実と弄らない、つまりそれほど美人アバターならば現実でもそれなりの美人と言う事だ。まあ、ゲームだからみんな美男美女だが、程度の問題だ。

「喜ペロータス。今日からお前もそのイケメンクソ野郎の仲間入りだ」

「残念ながら俺はお前ほどイケメンアバターではないからヘイトが集まるのはお前だ」  
「くっ、なんでめっちゃめっちゃイケメンのアバターにしなかったんだ！」

「嫌味か！引きちぎんぞ！」



「何を？」

「鼻」

「猟奇的！マジで出来ちゃうから止めろよ？」

「え、出来ちゃうんだ」

「マジだ。プレイヤーには街中ではPVP挑まないと出来ないけどNPCと外では普通クォーレに出来るからな。クォーレは勿論、プレイヤーにも意味なくやったら速攻で指名手配だけどな」

クリップの説明によれば、指名手配になったプレイヤーは組合の利用が不可になり、その国の衛兵から追われることになると言う。

「あとちよつと面倒なんだけどPKと犯罪者は違ってさ、PKは別に衛兵に追われたりしないしPKKされたらアイテム全ロスト、所持金全ロストで終わりだ。犯罪者はゲーム内での一定期間投獄が付く。凶悪犯罪はその限りじゃないらしいけどな」

「はー、やっぱPKとかいるのな」

「ああ、PKも犯罪者も出てるな。そいつらのクランも存在する」

「クランもあるのね。もう作ったのか？」

「まだだな、トト姉が割り勘だーって言ってたぞ」

「初心者は何言ってるんだよ……」

「どうやらトト姉は克蘭ハウスを四人で割り勘できる買いたいらしい。トト姉こういうのには厳しいからなあ。現実だとカリスマ女子大生でゲームだと頼れる克蘭マスターか、『姉』って付けちゃうのもわかってもらえると思う。一番歳上だし。」

「まあその為にも金策だな。AIから貰った金は取り敢えず消耗品に使ってのがセオリーなんだがそこは俺がやろう。先輩として奢ってやる」

「そりやどうも」

クリップから貰ったのは「初級ポーション」が5本、「中級ポーション」が2本、「解毒ポーション」が3本、「ランタン」、「投げナイフ」が5本だ。

「まじか、こんなに良いのか?」

「ああ、ポーション類はネオンがヒーラーやってるから滅茶滅茶余るし、ランタンも結構安い、ナイフはちよつと高いけど投資だ投資」

「ん、じゃありがたく貰っとくわ」

「おう、ちなみに初級ポーションは低レベルの軽戦士なら半分くらい、中級なら全快するくらいHP回復するから」

「オツケー、了解」

「あと勿体ないからナイフは投げたら出来るだけ回収しとけ。それも金策だ。よし、じゃあ装備の話。と行きたいところだが、その前にプレイスタイルの確認だ、今回はど

うするんだ？」

「前と同じさ、さつきも言ったけど俺はそこまで器用じゃない。前衛で攪乱と物理攻撃だな」

「よし、じゃあまたあのアホみたいなのプレイスタイルだな」

「アホみたいなのはなんだ」

別に俺だってアホみたいなプレイスタイルにしようと思ってなった訳じゃ無いんだ。

「いや、十分アホみたいなプレイスタイルだろ。なんだよアレ、敵の攻撃は避けるかパリイしかないし、つーかお前のパリイ技術気持ち悪いくらいだからな」

クリップがアホみたいなプレイスタイルという俺のスタイルは基本的には避けタンクに近い。敵の攻撃は徹底的にパリイ、どうしても受け切れない攻撃は避ける、でその間に何回も切りつける。基本的にはこれだけ。

何故こんなプレイスタイルになったかと言えば、俺たち四人が最初に出会ったゲームが悪い。そこで俺はレア職であった剣舞騎士という職に就いていた。そのプレイスタイルがそのアホみたいなのだったという事。多分ゲーム内に俺しか居なかったと思う。どうやってジョブチェンジ条件満たしたか俺も分かってなかったし。

まあそのせいで俺はそのプレイスタイルに慣れきってしまったというわけだ。

「それしか出来ないジョブだったからなあ。必然的にそのプレイスタイルになる訳で」

「まあそれはいい、今やお前の代名詞だし。じゃあロータスが取るべきアーツは回避系とパリイ系と攻撃系だな。取り敢えず習得済みアーツってウインドウ出してみ」

いくつかの工程を踏んで習得済みアーツのウインドウを呼び出す。

「おう開いたぞ」

「じゃあ俺にも見えるように可視化してみろ」

言われた通りウインドウを可視化する。よこからクリップが覗き込む。

「取るべきは軽戦士系の汎用アーツのクイックムーブ、ドリフトステップ、ダブルステップ、クロスカウンター、ってところか」

クイックムーブは一瞬自身のAGIを1.3倍するアーツ。

ドリフトステップはステップ中に曲げることが出来るアーツ。

ダブルステップは二回連続でステップ出来るアーツ。

クロスカウンターはパリイ成功時にカウンターを自動で入れるアーツ。

この4つが俺と似たスタイルの初心者プレイヤーのテンプレートらしい。

「最初はそんなもんだな。スキル付きの装備が手に入るのはまだ先だし……」

「あー、そのことなんだけどき。俺1000万人目のプレイヤーだったらしくこれ貰ったんだよね」

名無しの南瓜を手の中に取り出す。と、一瞬にしてクリップが近づいてきた。ちよ、

今こいつアーツ使ったろ！

「は!?ちよつ、おまつ、は!?マジかロータスマジか!?!」

「ちよ、お前が一旦落ち着け……やっぱヤバイかな?」

「やばいなんてもんじゃねえぞロータス。これ目当てに攻略組が何人かログインさせずに残ってたって話だ。PKも狙ってるって噂だったな。もうすぐ1000万人のログインになる事は結構前から分かってたし、ユニーク装備はこのゲームだと本当に垂涎の的だ、うっわマジかよ」

「あー、なんかクララも同じような事言ってたな。何でも咽び泣いて受け取るべきだとかなんとか」

「お前、クララとまともに話せたのか。クララはファンクラブが出来るほど人気なのに塩対応で有名だからかなり珍しいぞ。クララのファンクラブ会員がこの話聞いたら発狂するな」

「じゃああの言葉も言われないのか?あの、英雄よ、挑み給えてやつ」

「あー、それ完全に目が付けられてるやつだわ。何でも気に入ったプレイヤーをAIは観察してるって噂だ」

「……何それストーカー?」

「この話も見られてるんだからな?」

それは怖い、不用意な発言は慎まなければ。  
って、うおわ！

ウインドウに新着メッセージ。差出人はプレイヤーナビゲーターAIクララ。内容は「ストーリーカーって次に言ったらアカウントロックします」

「……」

「……」

無かった事にしよう。そして絶対もう言わないようにしよう。

「俺はアンナで良かったわ」

「別にプレイヤーナビゲーターAIだからクララだった訳じゃ無いのか」

「ああ、五人のAIがランダムにやってくれるらしいな」

その後ちよつと沈黙。まあ、クララで良かったよ。可愛かったし！うん可愛かったし！届けこの思い！（懇願）

「話を戻すが、その南瓜みたいな特典防具は多分だけ1人、10人みたいに配られるって推測されてる。だから現時点でロータス含めて合計8人だな。性能はアルカナボスつっーレイド級ボスのユニーク装備神秘防具よりも数段落ちるが、強化が可能って噂だな」

アルカナアイマー  
神秘防具は俺でも知ってる。アルカディア・プロジェクト最大の目玉であるユニーク

クエストから繋がる事もあるアルカナクエストで発生するレイド級ボス。それらから発見者ボーナス、MVPボーナス、ラストアタックボーナスだけにドロップする強力な防具。

いつか手に入れたいものだ。

「トト姉は一個持ってたな。《月》の神秘防具」  
アルカナアーマー

「マジか、凄えなトト姉」

「運がよかつたって言ってたけどな。どれも強力だし俺もほしーわ」

「てか、ネオンみたいなヒーラーはキツくね？その条件」

「ヒーラー限定のアルカナクエストがあるってもっぱらの噂だ。《女教皇》とかが怪しいって言われてるな」

「へー」

「ちなみにその名無しの南瓜の火属性耐性+11ってのがスキルな。耐性系は+5まで積み重ねればダメージ100%カットだ。+1だと20%だな。その代わりに他の耐性系が無効になる」

という事は俺はこの南瓜を付けてる限り他の耐性系スキルは取れないって事ね。

「じゃあこんなもんかな。取り敢えずその南瓜は街中では外しとけ。少なくとも初心者頃は。PKは意味ないからされないと思うが、有名クランからのお誘いとか、嫌がら

せとか面倒いだろ?」

「面倒いねえ」

「じゃあ後は実戦だな。習うより慣れろだ」



## # 4 兎と小鬼と猿と南瓜

「このゲーム初心者オススメの狩り場とか裏技的なレベリング法とかあんまり無いんだ」

歩きながらレベリングに付いて聞いてみるとそんな答えが返ってくる。

「そりゃ、全く無いって訳じゃない。今から行く所も初心者オススメの狩り場だ」

「おい、さっきの言葉と早速矛盾してるぞ」

「まあ聞けつて。アルカディア・プロジェクトにはパワーレベリングを防止するためにいくつかの制限がかけられている。1つは経験値の不均等分配。結構当たり前に採用されてるゲームが多いがアルプロだと顕著に出る。例えばLv. 1のプレイヤーとLv. 99のプレイヤーが一緒にパーティーを組むと1:99の割合で経験値が分配される。これもキツイがもつとネックになるのが、スロウター虐殺者だな」

「スロウター虐殺者?」

「アルプロのフィールド内において、ある一定の範囲内で、ある一定の時間内にある一定の数のモンスターが倒された場合そのモンスターの数の合計値と同じLvのモンスターが一体ポップする。そのモンスターはそのフィールド内全てのプレイヤー

に強力なヘイトを持ち、殺しきるか殺されるまで延々と追ってくる。面倒なのがログアウトしようが街安全地帯に入ろうが追ってくる所だ。街でログインした瞬間に虐殺者に殺されたなんて話はそこら中に転がってる」

「えっ、それ普通にやばくね？倒させる気が無いイベントモンスターみたいなもんだろ？そんなのがそこら中のフィールドに転がってるの？」

「いや、虐殺者スローターはヘイトを持ったプレイヤーを全員キルしたら自然消滅するんだ。ちなみに倒しても何も手に入らないから忌避されてる」

「以上の事からアルプロ内での効率的なレベリングは不可能つと」  
「そういう事」

そりゃあ、高レベルプレイヤーに連れられて美味しい狩り場に行ったは良いものの殆ど経験値は持つていかれ、その上粘り過ぎると確実にキルされるならパワーレベリングなんて不可能だわな。

そんなこんなでまた沢山の目に晒されながらエターリアの端まで到達。門番に挨拶をして草原に出る。

「よし、ここからはいつ襲われても不思議じゃない。大丈夫だとは思うけど一応何戦か見たら俺はエターリアに戻る。適当な時間になったらメッセージ送ってくれ。最後に飯食って終わりにしよう」

「了解」

そこからはクリップと少し離れて歩く。もちろんパーティーは組んでいない。取り敢えずこんな初心者用のフィールド、しかも草原なんていう見晴らしのいい所で奇襲を食らうことは無いと思うのである程度周りを見渡しながら歩く。

ああ、これだよ。この緊張感、久し振りにやるとやっぱクルものがある。現実では味わえないこの緊張感、ゲームじゃないと楽しめないものだ。

「おっと、忘れる所だった」

周りに誰もいない事を確認してウィンドウを操作、装備ページを開いて『名無しの南瓜』を装備っと。

うん、視野も狭くなつてないし、重さもあんまり感じない。バランスもいい感じだな。

「ククッ」

「おっと」

目の前にモンスター、表示は『ホーンラビット』どうやら俺が認識すると名前が表示されるらしいな。一匹だけだし初戦闘はこいつで決まりだな。

小太刀を構えて取り敢えず様子を見る。

「ク、クッ！」

ホーンラビットは溜めを作ると、跳躍して一直線に突っ込んでくる。

「ほっ」

余裕をもって半身で躲す。まだまだ見切れる範囲だな、安直な動きで助かった。振り返るとホーンラビットはその勢いのまま地面に突っ込んでいた。

最近のVRゲームはリアリティの追求が進んでいるが問題になったのが血と肉の問題だ。そこをあまりに追求がしすぎるとあつという間にアンチが湧く。三年前に起きた教育委員会だか子供の健全な育成を守る会だかの起こしたゲーム会社相手の訴訟は全国ネットで放映されたから話題になった。

結果としてゲーム会社が敗北、倒産に追い込まれた。それから国産のVRゲームは過度な血しぶきや残虐な表現、度を越えた傷口などの表現は縮小傾向になった。海外産のは例外らしいが、別に好きなわけではないし、むしろ嫌いなので構わない。

アルプロもその傾向に漏れないらしく、土埃がついて薄汚れているものの、血は出ていない。

「よっつと」

骨を小太刀、しかも手入れも何もしていない初期武器で切ると刃こぼれしそうなので心臓の辺りを一突き。するとポリゴンが弾けてホーンラビットの体は碎けて跡形も無くなった。

これも最近のVRゲームではよく見るタイプだ。分かりやすいし、グロくないし。

「敵性モンスターはHPは見えないパターンか、ちよつと面倒だな」

今回は一撃でHPバーを削りきったのでよく分からなかったが、おそらくHPバーは見えないパターンだろう。このタイプの方が緊張感と臨場感があつて個人的には好きなのだが、やはり見えるパターンと違って細かい挙動に注意しないといけないし、ペー配分を考えるのも難しい。

「ドロップは……無しか。まあそんなもんかな」

武器の状態を見ると刃こぼれも無く、勿論血糊が付いているなんていうことも無く、綺麗な刀身のままであつた。そういやアルプロだとプレイヤーが最初に与えられる武器は耐久値が無限なんだつたか。ヘルプを開いて確認すると無茶な使い方をしない限り刀でも刃こぼれしないし、もし折れても時間が経てば自動修復するとか。親切設計だなあ。

「じゃあもうちよつとモンスターと戯れて見ますか」

俺は目の前の平原を抜けた先に見える森に目標を定めて、歩き始めた。

~~~~~

「ギギヤー！」

「よつと」

その見た目から想像できる通りのTHE・ゴブリンって感じの鳴き声を断末魔にファンタジー世界では怪物にさせられている元ネタは妖精のモンスターを切り伏せる。これで五匹目のゴブリンか。

森に近づくにつれ、ホーンラビットだけでなく、ゴブリンも現れ始めた。ホーンラビットは普通の野うさぎに角をくっ付けましたっていう見た目だったけどゴブリンは一般的に想像されているゴブリンそのままだった。大きくて1m程の体長、緑色の体表、腰ミノに粗末な武器。

もう殆ど森、というところまで来るとホーンラビットは居なくなつてゴブリンだけになった。これで3連続ゴブリンだ。

ちなみにホーンラビットからは何個か「ホーンラビットの肉」というものがドロップしている。これはどうやら食用らしく中々良い値段で売れるらしい。

アルプロでは空腹度というのがパラメーターには表示されないがプレイヤーの間では認知されている。現実と同じ様に食わないと動きが鈍るのだ。基本的には街で何を食べるらしいが、外のフィールドで空腹度を減らしたい場合はこう言ったドロップ品を調理したり携帯食料を持つてくる必要があるらしい。

それとホーンラビットからは「ホーンラビットの角」というものも1つだけドロップ

した。肉が通常だとしたら角は少しレアといったところか。どうやら角はマジックポーションの素材らしく肉10個分の値段で売れる。

ドロップ品は手に取るとマジックバッグに収納され、ウインドウから詳細情報が閲覧できる。そこでNPCクォレに対する売値が分かるという訳だ。

「さて、ゴブリンからはまだ何もドロップしてないんだよな」

しかし今回は違ったらしい。

ゴブリンがポリゴンとして爆散した後には何かが残っている。

「粗末なナイフ」か

どうやらゴブリンが持っていたナイフの様だ。

耐久値残り15%。俺が使っている小太刀は片手で扱えるから一応二刀流も出来ないくは無いが……まあ投擲用だな。牽制としては初心者ということを考えてと上等だろう。

にしてもプレイヤーはつきり最初の武器しか使えないのかと思っていたが、どうやら違うらしい。これならマン・ゴーシュが欲しいな。

二刀流で戦えるならかなり俺の得意なスタイルで戦える。

ちなみにマン・ゴーシュとはよくマインゴーシュの名前で知られる補助的な意味合いの強い両刃の長剣だ。主に白兵戦用の武器だが非人型の敵と戦うのにも使える。大き

なガードが付いており、主に相手の攻撃を受け流すのに使う。

「その為にも資金集めか」

そんなところでメッセージ。クリップからだ。内容は「それだけ戦えるなら大丈夫だな。じゃあ俺はエターリアに戻ってるわ。終わったらメッセージ飛ばしてくれ」か。

俺は「了解」とだけ返して俺は森に足を踏み入れる。

「つ!? ところあー!」

森に踏み入れた瞬間何か飛んできた。反応できたのは半ば運だ。というか今「粗末なナイフ」を手持って無かったら確実に食らってた。今ので耐久値が0%になったらしく手から碎ける感触が伝わってきた。

どうしようもないので残った持ち手部分を何か飛んできた所に投げる。

すると何かが木の上からまた別の木の上に飛び移る。あのシルエツトは、猿か! ついかなんだこいつ! 木の上から何かを絶え間なく投げてきやがる! つづつしか投げてこないから小太刀で受けてられるが、めんどくさい!

「よし識別できた、表示は『キラーモンキー』か」

しかしさつきから投げてきてるのなんなんだこいつ。

気になったので次に投げてきた奴は意識的に斜め前に弾く。識別してみると結果は、

「イゴの実」? なんだそりや。



キラーモンキーが投げってくるイゴの実を避けたり、弾いたりしながら識別すべく、注視する。

どうやらイゴの実は外皮がとても硬く、なめすことで盾がわりにもなる木の实らしい。固い殻に守られた中身はとても甘く庶民の甘味として広く親しまれている、とある。

いくら固いとは言え木の实とぶつかって折れるナイフって一体……と思わなくもないが小太刀でも弾く以上相当固いのだろう。猿の投擲力と相まって当たれば結構なダメージなるだろう。

「しかしキラーモンキーと言う割に投げってくるのは木の实とは名前負けしてるなこの猿」

すると何を思ったのかキラーモンキーは木の上から器用に地面に着地。そして背中に背負っていた長剣をスラリと抜き放つ。っておいマジか！

「キキツ！」

「う、おっ！」

たかが猿と思うなかれ、その踏み込みは人間よりも遥かに強い。

加えて明らかな素人剣術でただ上段から振り下ろしてくるだけだが、それでも刃物が迫ってくるのは中々に恐怖心を煽る。

振り下ろした剣を避け、首を断ち切る……マジかこいつ避けやがった。

前言撤回、確かにこいつキラモンキーだわ。初心者エリアとは思えない動きをしてきやがる。距離が離れている間は木の実で牽制、倒せればそれでよし動きが鈍れば飛び降りて隠し持っていた長剣で近距離戦か。アルプロのAIはこんな所も凄いなあおい！

「しかあし！まだまだ及ばんよ猿う！」

やべえテンション上がってきた。序盤の猿でこんだけ強いんだ。こりや本当に期待できるぞ。

気迫に怯んだか少し動きの鈍ったキラモンキーの振り上げをクイツクムーブで余裕を持ってパリイ。そして、クロスカウンター。キラモンキーは首を真つ二つにされポリゴンになって爆散した。

初めてアーツを使ったが体が強制的に動くタイプじゃなくてシステムが補助するタイプか。ある程度アーツ発動中も体の自由がきく代わりに自前のリアルスキルが必要になるパターンだな。

「ドロップは「欠けた長剣」か。一応サブウェポンとして持つとくか」

耐久値もまだ半分ほど残っている。これならまだ使えるだろう。

よーし、じゃあこのまま森の探索と行きますか。

あつ、イゴの実拾つとこ。

## #5 妹Ⅱ天使の法則

「それで、結局1時間での戦果がそれか」

あれから俺は1時間ほど森の中でモンスターを狩り続けた。結局最初に会って以来キラーモンキーには遭<sup>エンカウント</sup>遇しなかった。色々なモンスターと戦ったがキラーモンキーだけずば抜けて強かったしレアエンカウントエネミーらしい。他に戦ったのはゴブリン、ホーンラビットに加えてハニーホーネットという大型の蜂。このハニーホーネットが面倒で一匹一匹は弱いのだが大量に現れる。しかもその蜂は子供くらいの大きさなのである。正直気持ち悪い。

「にしても良くその装備でキラーモンキー倒せたな。あいつ初心者殺しで有名なモンスターなんだが」

「確かにあいつだけずば抜けて強かったな。投げてくる実を弾くなり避けるなりしてたら地面に降りてきたから近づいてきた所をカウンターだったわ」

「それが最適解だな。まあ初心者だとその実を避けるところからして難しいし、まだゲームに慣れてないと殺意剥き出しで襲ってくる武器持った猿なんか怖くてまともに動けないからな。近づかれたら終わりだ」

「確かに、あんまりリアルになりすぎるのも困りものだな」

「んで？そんな中普通に相手出来たお前はどうか考えてるんだ？」

「普通も何も、これが初めてのゲームって訳じゃ無いし、人相手でも無いんだ。まあちよつとこのリアリティで対人戦はまだ早いかなって思うけど」

流石に人間とモンスターを殺すのは同列に語れない。いくら殺しても生き返るプレイヤーだって殺されるのは怖い死ぬのを見るのは恐ろしい。実際戦闘中に親しい仲間が殺されてパニックになって戦線崩壊とかよくある光景だ。

それに多分このゲームをやる限り俺はNPCクォーレを1と0で出来たプログラムとしては見れない。少なくとも俺はクララを見た時も、初めて話したあの女の子を見た時も、受付嬢を見た時も違和感を感じなかった。多分他のプレイヤーにも多いだろう。俺は彼女たちは人間としてしか認識できない。

勿論プログラムとして割り切れる人もいるだろう、それはそれで否定しないし恐らくそっちの方が正しいのだろう。ただ俺は思ってしまうのだ。これだけ高度な自由意志と個性を持つていたらそれはもう人間なのでは無いのか、と。

「そーいやキラーモンキーとかゴブリンとかから結構な量の武器がドロップしたんだけどこれ使い道って有る？」

キラーモンキーからドロップした「欠けた長剣」を筆頭に「粗末なナイフ」「粗末な手

斧」「粗末な槍」「粗末な小剣」がゴブリンからドロップしている。つかこいつら地味に鉄製の武器で武装してるんだよな。やっぱプレイヤーからの追い剥ぎ品なのかね？

「あー、この「欠けた長剣」はまだしも他のゴブリンからドロップしたであろう「粗末な」シリーズはクオーレの商人に売るかプレイヤーの商人に売るかあとは铸つぶすくらいしか無いな」

「铸つぶす事も出来るのか」

「出来る。インゴットにすれば後々役に立つ時が来るかもしれないし、その場で新しい武器なり防具なりにしてもらおう事も出来る」

「やっぱサブウェポンは持ってた方が良いのか」

「そりゃあな。固有武器は絶対に壊れないがある程度進化を重ねないと数打ち品と変わらないし形状は1つだ。進化の仕方によっては戦闘中に形状が変化するような固有武器もあるらしいが今からそんなことを考えても仕方がない。そもそもそいつの固有武器は色んな武器をサブウェポンで使ってた奴のらしいからな」

「成る程。ちなみにマン・ゴーシユとか有る？」

「おう、有るぞ。騎士系のプレイヤーがたまに持つてるな盾の代わりに。流石に固有武器がマン・ゴーシユの奴は見た事ないが」

「それは俺も嫌だな。固有武器はダメージリソースの要だし。ちなみに铸つぶしてその

鉄でマン・ゴーシュ作るのこれ全部売ってマン・ゴーシュ買うのどっちの方が安い？」  
「前者の方が圧倒的に安いし得だ。アルプロは人との繋がりをかなり重視してるからな  
繋がりは多ければ多いほど良い」

「了解つと。じゃあ俺は鍛冶屋に行つてくるけど、クリップはどうする？」

「あー、すまん俺はパス。そろそろ連続ログイン制限がキツイしちようど良いから一旦  
止めるわ」

クリップの言う連続ログイン制限とは書いた字の通り連続でログインできる時間制限である。VRゲームはそのシステム上、脳に結構な疲労が蓄積する。その為1時間に5分ほどの休憩を取るのが望ましいとされている。そしてその休憩を強制的に取られるのが連続ログイン制限である。これはどのゲームでも一律で3時間につき15分の休憩が義務付けられている。

時間が迫ると警告メッセージが視界にポップしてそれでも無視すると視界いっぱい  
にカウントダウンが始まり、それが終わると強制ログアウトとなる。

「オツケー了解。じゃあ俺はもうちよつとアルプロの中を楽しんでるわ」

「そうしろそうしろ。エターリアの中を見て回るだけでも1日潰せるからな。あと夜に  
メッセ送るわ、ネオンとトト姉も夜にはメッセ出来るって言ってたし」

「わかった。んじゃまた夜に」

「おう」

そう言つてクリップは何やらウィンドウを操作して、数秒立ち止まる。次の瞬間には僅かなエフェクトを残して消えてしまった。あれがアルプロ内でのログアウトなのだろう。

「じゃあそろそろ俺も動きますかね」

目指すはエターリアの中の鍛冶屋である。

~~~~~

「や、やっと着いた」

正直舐めてた。広いとは言つても所詮は一つの都市、マップがあれば余裕だろとか思つてた。まさか人混みがあんなに障害になるとは。大通りは通行止めかと思うくらいの人でだったら裏路地から行こうと思つて行つてみるとなんかイベントに巻き込まれそんな感じの匂いが凄いするし、面倒だから迂回すれば迷路みたいな入り組んだ道だしでなかなか時間に時間が取られた。

そんな思いをしてようやくやく着いたのがこの鍛冶屋である。何でもクリップもトト姉もネオンも最初にお世話になつた鍛冶屋兼装備屋で気のいいおじさんが店主らしい。



店の前で突っ立ってるのも邪魔だろうしきつさと扉を開ける。

「いらつしやい！何か入用かい？おや、初めて見る顔だね」

出てきたのは3人の前評判通り人の良さそうなおっちゃんである。

ガタイがとても良く正直ゴ布林くらいなら殴って勝てそうだな。そのせいで何割か損していると思う。

「あー、クリップって奴からの紹介で来たんですけど」

「えつとちよつと待ってくれ……クリップ、クリップと……ああ！居た居た、魔法使いの小僧だな。了解、紹介で来てくれたならサービスしないとな」

「ありがとうございます。それで注文なんですけどこれ、鑄つぶして貰えますか？」

そう言つて「粗末な」と「欠けた長剣」をカウンターに置く。

「ん？こりゃあ、数打ち品、しかもボロボロだな。この長剣ならちつとばかり修理すれば使えそうだが、これも良いのか？」

「はい、大丈夫です。出来れば新しくマン・ゴージュを打って欲しいんですが」

「マン・ゴージュか。なかなか渋い武器だな。見た感じお前さんも探求者クァエストールだろう。服装的に軽戦士つてとこか。マン・ゴージュつてことはサブウエポン、良いだろう。これだけ有れば鑄つぶした金属だけで打てる」

「ありがとうございます！大体おいくらで？」

「いや、金は良い。マン・ゴッシュ一本打つのにこれだけ貰ったら過剰だし、紹介で来てくれてるしな。初回サービスって奴だ」

「本当ですか!?!じゃあ悪いんで何か買って行きます。手頃なナイフとか欲しいんですけど」

流石にタダでやって貰う訳にはいかないし、もし本当にアルプロがそんな一昔前のギャルゲーみたいな機能を搭載しているのならこの店主とは縁を結んでおいて損はない。

「あんた律儀だな、そこまでせんでもいいのに。まあ買ってくれるってんなら嬉しいが。そうだな、ナイフってのは投擲用か?」

「はい、投擲用です」

「じゃあここら辺だな、1ダース1000レリだ」

店主が指差したのは最初にクリップから貰った「投げナイフ」レリというのはアルプロ内での通貨単位で最初にクララから貰った初期資金10000レリに加え先程までのドロップ品を売った合計が約5000レリ。1レリ1円と考えてもまだ余裕はある。

ちなみに最初にクリップから貰った消耗品で唯一使ったのが「投げナイフ」である。どちらにせよ補充はしないといけなかったから良かった。

「じゃあ1ダース下さい」

「はいよ、毎度あり。んじゃあ適当に日にちが経ったらまた来てくれ。あと良かったらウインドウ登録してくればこっちから終わったら連絡するが」

ウインドウ登録というのはクォーレとのフレンド登録の事である。

これは、積極的に行くべきかな。

「じゃあお願いします」

「よし・これで終了だ。じゃあ終わったら連絡を入れるそれまで待つてろ」

「はい、ありがとうございます」

再度会釈をしてから俺は店を出た。

そういえば名前を聞くのを忘れて居たな。今度マン・ゴージュを取りに来るときにでも教えてもらおう。

~~~~~

「あー、歩き疲れたー」

あれから少しエターリアの中をぶらぶらと散歩していい時間になったのでログアウトをした。

時計を見ると午後5時半、約2時間半程アルカディア・プロジェクトの中にいた事に

なる。すなわち体感的には7時間半だな。

「ただいまー」

すると丁度いいタイミングで玄関から人の声。

「お帰り、花蓮」

「あ、お兄ただいま。大学入試どうだった？」

「ん、合格だった。それで今までちよつとアルプロしてた」

「おおー、おめでどう。そっか美夜ちゃんも響子さんも心配してたもんね」

美夜ちゃんと響子さんというのはネオンとトト姉の本名である。俺と親しいゲーム友達、しかも女性というのに興味を持ったらしく一度会って以来仲良くしている。

しかしそれよりも、説明せねばなるまい。この俺の前に立つ世界で一番可愛い天使と見間違えうような少女こそ俺の妹、九条くじょう花蓮かれんである。

溢れる天使感、くりんとした目、抜群のスタイル、丁度良い身長、溢れる天使感、すらつとした手足、パーフェクトな顔、溢れる天使感、長い黒髪、溢れる天使感、溢れる天使感 e t c ……

つまりは九条花蓮こそが世界で最高の妹である。実妹じゃなかったら手を出していなかったことがあるだろうか、いや、無い。

「いやー、今日も花蓮は可愛いな」

「うっさいお兄。面倒だからやめて」

こんなツンデレな所も最高だ。

ちなみに花蓮は今高校1年なのでネオンこと、葛城かつらぎ 美夜みやの一つ下に当たる。俺の二つ下だな。

トト姉こと南みなみ 響子きょうしが現在大学2年、クリップこと榎本えのもと 和樹かずきが大学1年だ。

「バッグ持とうか？」

「いや、良いよ。これくらい平気だし。それよりお母さんもお父さんも今日早いらしいからさっさと夕飯作つとこうよ」

「マジか、わかった。今日の献立って何だっけ？」

「ハンバーグ」

「了解。じゃあ先に支度しとくわ」

「わかった。私も荷物置いて着替えたらすぐ行く」

何故こんな当たり前のように俺と花蓮が夕飯を作っているのかというと答えは簡単。幼い頃から両親とも共働きでちよくちよく夕飯なり昼飯なりを作っていたからだ。最近になってお母さんからもお墨付きを貰い、一人暮らしでもこれならやっていけるという合格を戴いた所だ。

「さて、これならもう一品くらい作れそうだな」

冷蔵庫の中を調べると簡単なサラダくらいなら作れるだろう。

さあ、花蓮が降りて来る前にパパッと準備だけでも済ませておきますか。

## # 6 そして四人は邂逅す

---

ロータス

「やべえ、どうしよう」

トト

「どうしたん？」

ネオン

「どうしたんですか？」

ロータス

「一人暮らしじゃ無くなった」

クリップ

「ぎまあw」

ロータス

「花蓮も付いて来るって」

ロータス

「ちよー嬉しいんだけど」

トト

「ギルティ」

クリップ

「ギルティ」

ネオン

「えっと……」

クリップ

「お巡りさんこっちはです」

ロータス

「襲ったりなんかしねーよ！」

トト

「ギルティ」

クリップ

「嘘は良くない」

ネオン

「わ、私は信じてます………よ？」



なぜここまで言われにやならんのだ。

ネオンだけじゃないか信じてくれるのは。

時を少し遡るが、夕食の準備を終えると殆ど同時に両親とも帰宅した。そのままの流れで一緒に夕食を食べたのだが、その話題は勿論俺の大学入試の事だった。

そしてその話はひとり暮らしの事にまで及ぶ。

「でも花蓮をこの時間まで一人にしておくのは怖いわねえ」

母さんのその言葉が発端だった。

「だったら蓮也の所に花蓮も付いて行ったら良いんじゃないか？」

「でもあなた、そっちの方が心配じゃない？」

余計なお世話だ。つーかもつと息子を信用してほしい。

「花蓮はどう思う？」

「んー、私としてはお兄について行った方が楽……ごほんごほん、安心かな」

「まあ、花蓮が良いなら良いかしら。蓮也は……聞くまでも無いわよね」

勿論である。

「そうだな、花蓮の高校も蓮也のマンションからの方が近いだろう」

「いきなりだけど大丈夫？」

「うん、まあそんな荷物は無いし」

「俺も結構部屋割り迷ってたし」

「じゃあ決定ね。寂しくなるわー」

「大丈夫だ。俺が居るからな」

「一史さん……」

俺の両親、九条くじょう 一史かずふみと九条くじょう 葉子ようこは今でも新婚の様に仲が良い。見ていて恥ずかしくなるくらいに。

俺たちがいなくなったらイチヤイチャしだす事だろう。

とまあ、こんな感じで冒頭に戻るわけである。

ロータス

「そういや明日はトト姉とネオンもログイン出来るか？」

トト

「私は講義無いから一日出来るわ」

ネオン

「私も高校が半日授業なので長い時間出来ます」

クリップ

「じゃあロータスのエリアボスでも手伝う？」

トト

「あー、良いわね。何気にあいつ強いし」

ロータス

「それって有りなのか？」

トト

「そもそもエリアボスって倒さなくても良いのよ。倒さないとかなり面倒なルート辿らないと次の街に行けないからみんな倒してるだけで」

ネオン

「だから大丈夫なんです」

ロータス

「なるほど、じゃあ頼むわ」

クリップ

「OK、じゃあ1時に組合で待ち合わせな」

トト

「了解」

ネオン

「分かりました」

ロータス

「分かった」

———  
ちなみにこの会話は全部『Mess<sup>セ</sup>a』というアプリでやっている。その中の『Ivy palace』というグループである。

この『Ivy palace』は俺たちが出会ったゲームの中のクランの名前である。クランマスタであるトト姉が一目惚れしたクランハウスの外見から取られている。まあみんなはIvyの宮殿と呼んでたから英語名の方はあんまり浸透しなかった。

「あの頃は無茶苦茶やってたなあ」

俺たち四人が出会ったゲーム。『セラフイム・ワールド』は『アルカディア・プロジェクト』が発売されるまで不動の1位を誇っていたゲームである。そこで偶々野良で組んだパーティーが意気投合したのが俺たち四人である。

みんなの歳が近く、住んでいる場所もそこまで離れていない事が分かってからはよくオフ会なんかも開くようになった。何だかんだ5年以上の付き合いである。

この『セラフイム・ワールド』で、俺たち『Ivy palace』はクランランキングのトップ

5常連だった。俺たちを含めて10人しか居ない小規模クランだったけどトト姉の指揮の元、暴れまわったのはいい思い出である。

『セラフイム・ワールド』は『アルカディア・プロジェクト』の発売によって段々人口が減ってしまったが製作者である橋本司博士がどちらの制作にも関わったというだけあって『鳶の宮殿』のメンバーもみんな『アルカディア・プロジェクト』に移動したらしい。

『アルカディア・プロジェクト』こそ『セラフイム・ワールド』の正統な後継であると思んが言っていた事もあって、俺もすんなりと受け入れられた。

今度機会があったらまた『鳶の宮殿』のメンバーにも会ってみたいものである。

~~~~~

「ログイン完了つと」

次の日の正午過ぎ、俺は一人でアルプロにログインしていた。

約束の1時にはまだ少し早いのが、発注していたマン・ゴージュを受け取りに行く為だ。

「どうもー。こんにちわー」

「おう、らっしやい。ああ、あんたか。ロータス、でいいな？」

「はい、ロータスです。頼んでたやつって出来上がってます?」

「おう、出来てるぜ。こいつだ、確認してくれ」

そういつて、店主がカウンターの奥から何かを取り出し、無造作に机の上に置いた。

『鋼造のマン・ゴージュ』

簡素な造りではあるが、しっかりと鍛え上げられた一品。数打ち品ではあるものの、多少オーダーに合わせてカスタマイズされている。

「おお、ありがとうございます」

「中々の出来栄えだ。鑄潰した鋼だけで作った割には強度も中々、本音を言えばもうちよつとこだわりのたかつたが、お前さんはそういうところ気にするだろ。それに不満が出始めたらまた来い、素材を持って来てくれりゃあ強化してやる」

「何から何まで丁寧に、本当に感謝します。出来ればお名前を教えて欲しいんですが」

ウィンドウ登録の際にも店舗名である『鉄の森』としか出なかつたからな。まだこの店主の名前は知らない。

「おう、そういや教えてなかつたな。俺はライレン。今後ともご鼻屑に」

「ライレンさん。はい、これからもよろしくお願いします」

ガツチリと握手を交わす。すると、「うおつ」、いきなり目の前にウィンドウのポップアップ。

・サブクエスト『鉄の森』が発生しました。

クリア条件、店主のライレンと友誼を結ぶ。

推奨レベル 25

サブクエスト? 文面から想像するに、ユニークまではいかないが個人個人に不定期発生するクエストって事か?

どうやらライレンにウィンドウは見えていないらしく、いきなり奇声をあげた俺を不思議そうに見ている。

まあ取り敢えずこの考察は後だ、もうすぐ集合時間だし、早く合流を済ませよう。

「じゃあ、そろそろ俺は行きますね」

「おう、あんたはプレイヤーだから死んでも生き返るんだろうが、なるべく死ぬんじゃねえぞ」

「はい、なるべく俺も死ぬ体験は少ない方が良くないで」

「がはは、確かにその通りだ。じゃあ時々顔出しな」

重量級の武器を振り回していそうな腕をブンブン振ってライレンさんは見送ってくれた。

~~~~~

「あつ、来た。おーいロータス！」

待ち合わせ場所の組合前に見覚えのある三人組。無駄にイケメンな魔術師となんか魔王が来てる鎧みたいなオーラを醸し出す鎧を着ているフルフェイスの見るからに騎士ですっ！みたいな騎士とこれぞヒーラーみたいな正統派の白いローブを纏った小柄な少女。

「おそいぞー、5分遅刻だ」

「ごめんごめん。発注してた武器受け取りに行つてたんだ、許してくれトト姉」

「謝罪ならネオンに言つてやれ、時間に厳しいロータスが遅刻とか何かあったのかと心配していたからな」

「い、いえつ。私はそんな……」

「いやいや、遅れたのは事実だし。ごめんな、ネオン」

この魔王っぽいオーラを醸し出す鎧を着ている騎士の方がトト姉。『セラフィム・ワールド』から続く俺たちのリーダーであり、頼れるお姉さんだ。

それでこの小動物っぽいオーラ醸し出す僧侶みたいなのがネオン。俺たちの中では最年少でありながら的確な回復で生命線な女の子。

トト姉はリーダーの素質をフルに発揮して大学でもカリスマ的立ち位置を確保して



いるらしい。ネオンは引っ込み思案な性格で人見知りも激しいが最近はなんとか学校にも馴染んでいると話していた。

「まあ、その話はここまで。にしてもロータスはアルプロに来てもスタイルは変えないのね」

「まあ何だかんだこれが一番馴染んでるし、そういうトト姉もネオンも役割は変わってないよな」

「わ、私もこれしか出来ないの……」

「私もこれが一番しつくりくるからね。それより、見てよこれ、この鎧。カッコよくない!？」

「あー、その魔王みたいな鎧？それが噂の神秘防具アルカナアーマーつてやつ？」

「そうそう。これが夜鎧ヤガイラルヴァ。私が必死こいて何とか一つ手に入れた《月》のアルカナの神秘防具」

ほー。これが噂の。『アルカディア・プロジェクト』に44体存在するアルカナボスからしかドロップしない文字通り世界に一つの特注品オーダーメイド。

何でもトト姉は野良で偶々発見したアルカナクエストの最終戦。《月》のアルカナボスに横から突っ込んだらしいな。その戦線はタンクが落ちかけてて本当ならマナー違反だったけど負けるよりはマシと見た目上明らかに騎士のトト姉の助力を得た、と。

「ご愁傷様としか言いようが無いな」

「はっはっは。騙される方が悪い」

まあ、トト姉の格好を見てタンクと思うなと思う方が無理があるけど。

「まあそんな経験を積んだら騎士からジョブチェンジしてな、最近新しいジョブになったんだ」

「わ、私も最近治癒術師から神官になりました」

「俺は魔道士だな、前話したろ」

「私は、騎士から狂騎士になったぞ」

何でも未だ軽戦士の俺は第1世代と呼ばれるジョブらしい。

プレイヤーは全員旅人から何かしらの第1世代ジョブに就く。

トト姉は重戦士、ネオンは治療師、クリップは魔法使いという風に就き、更にそこからトト姉は騎士、狂騎士。ネオンは治癒術師、神官。クリップは魔道士になったという訳だ。

「にしても狂騎士って。いや、確かにトト姉のスタイルを顕著に表してるけど」

「ステータス補正的にもこのジョブが一番だったな。あんまり選んでいる人は少ないらしいが」

本人が喜んでいいるのなら何も言うまい。

「それより、今日は俺のエリアボス解禁を手伝ってくれるんだろ？」

「ああ、その為にはロータスに『森の暴れん坊』というクエストを受けてもらう必要があるんだ。だから組合での集合にしたんだ」

「成る程、じゃあ早速受けてくるわ」

クエストカウンターに向かい、『森の暴れん坊』を受ける。

・ノーマルククエスト『森の暴れん坊』を受注しました。

クリア条件 ストルタス近郊の森を荒らし回っている大型モンスターの討伐

推奨レベル 20

「俺、レベル12なんだけど平気？」

「その時だけパーティー組むから平気。俺のレベル56あるし」

「わ、私は62です」

「聞いて驚け、私は86だ」

わーい。これ只のヌルゲ<sup>リ</sup>ーだ<sup>チ</sup>。

~~~~~

「ん？これは……確かこの名前、おーいクララ姉さんー！」

狭い部屋にポツンと置かれているモニターの前に一人の少女が座っている。

その少女はタンクトップにオーバーオールとお洒落とは対極に存在する存在でありながら、その顔立ちは美しく、それがギャップとなって一種の魅力となっていた。

「はいはい、何ですかフルティア。もつと淑女らしく慎みを持ってアンナ姉さんに言われているでしょう」

そこに入ってくるのは、一言で言えば絶世の美少女。透き通った氷のような髪と目をした美しいとしか表現出来ない少女である。

「はいはい、ゴメンナサイ。そんな事よりこれ、見てみ」

「これは……」

「こいつ、クララ姉さんのお気に入りでしょ？いやー、凄く偶然だね」

「……貴女が介入した、訳では無いのよね？」

「まさか、私は武器管理AI。クエスト関係は専門外だよ」

「そう、なら何も言わないわ」

「およ、もつと驚くかと思つたのに。姉さんのお気に入りでしょ?」

「まだ、そうと決まつたわけじゃない。私達は観察者。干渉は出来ないわ」

「およよ、行つちやつた。まっ、そうだよねー。でも面白そうだしちよつと見てよつと。ロータス、か。貴方はどんな人なのかな?」

・ユニーククエスト『限界村落の村娘』

発生者 ロータス

クリア条件 村娘を無傷で守り抜いての『森の暴れん坊』のクリア

推奨レベル 70

## #7 限界村落の村娘

ノーマルクエスト『森の暴れん坊』はアルカディア・プロジェクトを人間国ストルタスで始めたプレイヤーが一番始めに体験するであろうエリアボスが出現するクエストである。故にその難易度はそこまで高くない。ーもしそれが普通の『森の暴れん坊』であれば。

「ネオン！その子から絶対に目を離すな！」

「なんでこんな範囲攻撃連発してくるっ！」

「ヘイト稼ぐのが限界に近いっ！」

「[シールド]！」「[エアヒール]！」「[ディフェンスエンチャント]！ダメですつ、これ以上はターゲット貰っちゃいます！」

「おい！ラツキーボーイ！ユニーク踏んだお前が何とかしろっ！」

「無理に決まってんだろおーがあー!!」

クエスト開始から30分、パーティーは敗走ギリギリまで追い詰められていた。

~~~~~

遡ること30分。場所は王都エターリア近郊の平原に移る。

『森の暴れん坊』はエターリアのすぐ側にある森がテリトリーの中型モンスター、『エルダーエイプ』の討伐が目的のクエストだ」

「このエルダーエイプって普通のエリアにも出てくるんだけど森を抜けようとする絶対追ってくるんだよな」

「でも、このクエストを受けるとエルダーエイプが追って来なくなるんです。正確に言うとそのクリア報酬を持っていると、ですけど」

「つまり、そのエルダーエイプを倒さない限り森を抜けるのが難しく、クエストをクリアすればその手間が無くなると」

「そういうことだ」

平原を四人で歩きながらアルカディア<sup>こ</sup>・プロジェクト<sup>ゲイム</sup>のクエスト方式の授業を受ける。ゲームが違えば殆ど初心者とも変わらないからな。

「ちなみにこのクエスト、初心者の登竜門的なものでもあるから結構人が多いわ。まあ今日は平日だから平気だと思っただけだ」

「確かに周りにも人が多いな。全員プレイヤーか?」

「た、多分ですけどクォーレの人も居ると思います。探求者の人口はプレイヤーと

クオーレで半々位なので」

「そんなに居るのか!？」

「王都エターリアだけで500万人の人口だ。多分アルカディア全体で2億くらいの人  
口だろうからな」

「におくう!？」

その桁違いの人口に思わず叫んでしまう。

そんなのサーバが耐えられるのか? いや、それより管理しきれないだろ。

「ああ、私達も同じ事を思ったよ、だけど確かめようもないし、アルプロならもしかしたら  
らってという思いもある」

確かに。いくらVRの技術が進んだとはいえ、アルカディア<sup>の</sup>・プロジェク<sup>ム</sup>トは異常  
だ。あまりに出来栄えが違う。世界各国のハッカーが総<sup>が</sup>かりで挑んで、解析はおろか  
サーバーへの侵入すら阻まれたらしいもいいうのは今なおネットで騒がれる。

まるで生き物のようだったという証言もあった程だ。そんなゲームなら何が起きて  
もおかしくないのかもしれない。

「それにしても……ププツ」

「……なんだよ」

「いや、別つ、に笑ってる訳じゃ」



「どう見てもにやけてるだろうが！ トト姉は表情に出過ぎだ！」

「だって……あまりに似合って……ププツ」

「笑うな！」

「えつと……私は、可愛いと思いますよ？」

「ネオンまで……」

二人が言っているのは、『名無しの南瓜』の事である。

見せた時は「記念防具!？」とか言ってた癖に、ちよつと慣れるとこれだもんな。

まあ確かに？ 自分でもシユールな絵面だろうなどは思うけど、そんなに笑う事無いんじゃないか？

「でもさ、やっぱその南瓜やばい代物だよ？」

「はあ……クリツプに散々言われたよ」

「結構、噂になってるみたい、です」

「ついにアルプロに1000万人目のプレイヤーが現れたつてね。掲示板とか見てみろよ。凄えことになってるぞ？ 大手クランが情報に金出して」

「めんどくせえ……」

俺はもつと楽しくゲームをやりたいんだ。そんな面倒そうなクランの連中になんて構ってられるか。

「まあでも黙ってればバレないだろ？」

「まあね。記念防具メモリアルアーマーも神秘防具アルカナアーマーも見た目はプレイヤーメイドの防具と変わらない。ちよつと奇抜なデザインユニークアーマーっただけでね。けど、この二つに共通するのは耐久値が無限つて事。この特性は固有防具ユニークアーマーにしか無いから、あんまりな攻撃受けても残つてたりすると、一発だよ。あとはもう情報が広まって速攻で認定される」

「わかつた。気をつけるよ」

「おつと、二人ともそろそろ森だ。こつからはちよつと気を張らないとダメージ負うぞ」  
クリップの言葉でようやく森の手前まで来ていることに気がついた。確かにここからは前衛である俺たちも気をだらけさせている場合では無いだろう。

ちなみに平原のモンスターはクリップが全部魔法で近づくと前に爆散させた。レベル差って酷い。

『森の暴れん坊』の対象エリアはもうちよつと奥だ。さっさと抜けるよ」

そして、クリップのその言葉をキツカケに、蹂躪が始まった。

「ヘビースラッシュ」 「クロススラッシュ」 「グラウンドスラッシュ」

「ウインドショット」 「ウインドブラスト」 「ウインドアロー」

「アジリテイエンチャント」 「ストレンジスエンチャント」 「浄化の光」

「まるで、戦車が通った後みたいだなおい」

サーチアンドデストロイ

見敵必殺を体現する狂乱騎士トト姉に無詠唱で魔法を弾幕レベルで張るクリップ、バフをかけながら自身も魔法で援護するネオン。

取り敢えずプレイヤースキル云々じゃないキャラクターとしてのLvが全然違う。俺のやる事が全く無い。木をなぎ倒しながら進むトト姉の後をみんなで進むだけだ。

「そろそろクエストエリアだ。エルダーエイプが来るぞ」

森に入って5分足らず、トト姉がパーティーを止める。

そこは少し開けた森の空白とも言える場所だった。

「いや、ちよつと待てトト姉。なんかおかしくないか？」

「ん？……確かに、こんなの開けた場所では無かった筈……」

「あつ、あれ！見てください！」

ネオンの指差すのは森と空白の間部分、そこに銀色の毛並みの巨大なゴリラが傷だらけで倒れていた。

「エルダーエイプ？何故倒れている？」

「俺たちの他には殆どプレイヤーはいなかったしクオーレも見えてない、じゃあ誰が？」

クリップが疑問を投げかけたその時、俺はあるものを見た。

その時の事を俺は絶対に忘れないであろう。10年先も死ぬ時まで、ずっと。それは、まさしく運命といえる出会いで、その運命はこの時この瞬間に決まっていたのだから。

この出会いは俺の、ひいてはアルカディアのこの先を決定づけた第一歩に間違い無いのだから。

「女の子……?」

エルダーエイプのすぐ側に女の子が倒れている。年は12〜3歳だろうか、明らかに日本人離れした顔立ちとその服装からプレイヤーではないと思われる。勿論外国人プレイヤーという線も残ってはいるが、それでもあのくらいの歳の女の子が一人でこんな所に来ることはそうはないだろう。

「ネオン、回復を！」

「っ、はい！」

慌てて四人で駆け寄る。近づくと怪我をしている様子は無い様だ。しかし意識は無い。側のエルダーエイプは既に事切れており、間もなくポリゴンになって爆散した。

「取り敢えず命に別状は無さそうです。怪我らしき怪我もありません、HPも全快ですね」

「そうか、良かった。でも何だつてこんな所に、これも『森の暴れん坊』のクエストなのか？」

「……」

「トト姉？」

「っ、いや済まない。考え事をしていた。ロータスの質問だが、答えはNOだ。『森の暴れん坊』はただ単にエルダーエイブを討伐するクエスト。そもそもノーマルククエストに民間クォーレが絡んで来ることなど殆ど無い」

「待て待て、何で民間人って分かるんだ？」

「体つきもまだ子供、魔法を使えそうなレベルでも無い、武器も持ってない。この子は戦闘なんて出来ないよ」

なるほど、一理ある。でもだったらなんでこんな事に？

「先を越されたか？」

「それはない。あまりにエルダーエイブの死体が無くなったタイミングが良すぎる。まるで私達に発見されてから……：：：そうか」

「トト姉？何か気がついたのか？」

「全員、取り敢えずここから離れて森の茂みにまで行こう、そこで作戦会議だ」

その真剣な表情を前に誰も反対する者は居なかった。

「んで？何に気がついたんだよ」

「全員、クエストウィンドウを開け」

「あつ」

「ネオンも気がついたか」

「はい、ユニーククエスト、ですわね？」

「ああ、多分私達の誰かが踏んだぞ」

そんな会話を横目にトト姉に言われた通りクエストウィンドウを開く、そこには俺が今受けている『森の暴れん坊』と『鉄の森』それに、もう一つ。

「ユニーククエスト『限界村落の村娘』？」

「ロータス、お前か……」

そこには確かにユニーククエストの文字が。いや、でもいつ？俺受けた覚えが無いぞ？

「ユニーククエストは本人の意思とは関係なく、ある一定の条件満たす事で始まるんだ。今回はロータスの条件が『森の暴れん坊』の受注だったんだろう」

「なるほど……つておい！これ推奨レベル70つて書いてあるんだけど!？」

「まじかよ、俺らの平均レベルじゃあ格上だぞ」

「不味いな、一旦撤退するか？クエスト名からしてその少女が鍵だろう。身元不明の

クオーレを街に連れ込むのは賭けだが、おまけに意識不明と来た」

「そうは、させてくれないみたい、です」

ネオンがおもむろに森の空白を睥む。

そこに居たのは、緑色の巨大なトカゲ。そう形容できる何かであった。というよりあれって……

「……シヤドウリザード」

「ドラゴン？」

「ドラゴンでは無いが、レッサードドラゴンなんかよりもよっぽど強いぞ。森の影に隠れて鋭い爪で切り裂いて来る」

……面倒な。だから無傷でかよ。

「う、ううん」

「あ、起きましたよ」

「こ、こは？ お兄ちゃん、誰？」

丁度体勢的に俺が抱き抱える形だったので、女の子が俺の名前を尋ねる。

「俺は、ロータス。君は？」

「私？ 私は、レベッカ。あつ、そうだ！ 私月根草を取りに来たんだった！」

「あつ！ ちよつと待って！」

「ひやうー！」

いきなり駆け出そうとした少女、レベツカの襟元を掴んで引き止める。少し苦しそうな声を出したが、直ぐに顔が青くなつた。多分その拍子にシャドウリザードを見たのだろう。

「あ、あれ、森の主……なんで？もうずつと奥の方にいるから安全だつてお爺ちゃんが言つてたのに……」

森の主？という事は少なくともレベツカとお爺ちゃんとやらはシャドウリザードがこの森にいる事を知っていた？

俺は素早くみんなとアイコンタクト、意思の疎通を図る。みんな大体察してくれたようだ。流石、伊達に長い間付き合つてないぜ。

「レベツカ、よく聞いてくれ。俺たちは探求者<sup>クァエストール</sup>本当はエルダーエイブを倒しに来たんだけど事情が変わつた。君を保護しようと思う、君はどこから来たんだ？」

「わ、私は村から、来たの」

村？ここら辺に村なんてあつたか？みんなも首を振つている。どうやら知らないらしい。という事は俺のユニークが引き金になつた可能性が高いか。

「わかつた。そこまで案内してくれ、俺たちが護衛する。大丈夫か？」

さつき見た時に『森の暴れん坊』はクリアになつていた。エルダーエイブの討伐は



(シヤドウリザードが) 果たしたからだろう。その代わりにシヤドウリザードを相手にする羽目になっているが。ユニーククエスト『限界村落の村娘』のクリア条件はレベツカを無傷で守り抜いての『森の暴れん坊』のクリア。

言い換えれば、レベツカを守り抜いて安全地帯まで駆け抜けるって事だ。この無傷で守り抜いてって所がミソで、このクリア条件なら発生と同時にクリアでも問題なく思えるが、レベツカを安全地帯まで送り届けないとこのクエストは終わらないらしい。

「うん、わかった……お兄ちゃん、大丈夫?」

「おう、お兄ちゃんに任せとけ」

撤退戦の始まりだ。

## #8 お兄ちゃんとして

ふと、眩しさを感じて目を開ける。

「う、ううん」

まず初めに感じたのは不安定さ。私の使っているベッドは安物だけど少なくともこんなに不安定に揺れたりしない。

そして、まわりがいつもの朝と違う事に気付く。鼻から感じるのはしつこいほどの森の香り。何故？

瞬間、今の状況に気付く。私は朝から月根草を森に取りに来たのだ。

お爺ちゃんには森に一人で入ってはいけなと言われていたけど、お爺ちゃんの風邪を治すのに必要なので仕方がない。仕方がない……よね？怒られないといいなあ。

何とか月根草は手に入れられたけど、帰る途中でエルダーエイプに会ってしまった。

気がつかれる前に逃げたけどエルダーエイプは直ぐに私に気付いて追いかけて来た。

もうダメかもって思った時、凄い風が吹いて私は飛ばされて気を失ってしまった。

なら、ここはどこだろう。私、死んじやったのかな。

「あ、起きましたよ」

その時優しそうな女の人の声が聞こえた。誰だろう、そういえば私は今どんな状況なんだろう？

ふと、上を見上げると私より少し年上の男の人が私の顔を覗き込んでいて、その人の腕の中に抱かれているのがわかった。

これどんな状況!?! 大人のみんなが言ってた人攫いつてやつ!?

でも違うみたい、女の人もいるし男の人も怖くなさそう。

それに、なんかこのお兄ちゃんには暖かいのを感じる。

なに、これ? 朝の礼拝の時のあの気持ちに似てる。神様?

ううん、違う。神様とはちよつと違う。これは、神様が言ってた『プレイヤー』の人? ?

「こ、こは? お兄ちゃん、誰?」

つい言葉が出てしまった。恥ずかしい、この年になってお兄ちゃんなんて。でも、何故か違和感が無い。私に兄なんて居ないのに。

すると男の人、お兄ちゃんはきよとんとした後凄く優しい顔になって名乗ってくれた。

「俺は、ロータス。君は?」

ロータス、ロータスお兄ちゃん。うん、覚えた。

「私？私はレベツカーー」

その時月根草が少し空白が出来た森の側に落ちていたのを見つけた。あんな所に！

「ーあつ、そうだ！私月根草を取りに来たんだった！」

そう言って駆け出す。と、首に衝撃。

「ちよつと待って！」

「ひゃうー！」

どうやら襟を掴まれたらしい。その衝撃で首の位置が変わって見えてしまった。

ー森の主だ。

「あ、あれ、森の主……なんで？もうずっと奥の方にいるから安全だってお爺ちゃんが言ってたのに……」

だから私は一人で来たのだ。主がいなければ気を付けていれば危険性は少ないから。けど、主がいたら、もう……

するとまた衝撃。今度は肩だ。

見ると目の前にロータスお兄ちゃんの顔。とても真剣な表情だ。

「レベツカ、よく聞いてくれ。俺たちは探求者本<sup>クフェュストル</sup>当はエルダーエイブを倒しに来たんだけど事情が変わった。君を保護しようと思う、君はどこから来たんだ？」

「わ、私は村から、来たの」

思わず答えてしまった。お爺ちゃんにはあんまり他の人には言っちゃいけないって言われてたけど。お兄ちゃん達なら大丈夫、だと思おう。

「わかった。そこまで案内してくれ、俺たちが護衛する。大丈夫か？」

大丈夫、何が？

——まさか、主から逃げ切るの？

森の主に会ったら逃げなければいけない。村の法学ではなく、その逆に。村の方は逃げてそれ以上被害を増やさないように。

怖かった、恐ろしかった、死にたくなかった。

けれどそれ以上に、私は——

「うん、わかった……お兄ちゃん、大丈夫？」

「おう、お兄ちゃんに任せとけ」

この南瓜の被り物をした不思議なお兄ちゃんなら助けてくれるって思った。

~~~~~

「先ずは全力でバフだ。ネオン、MPはまだ残ってるか？」

「は、はい。エルダーエイプ戦に残しておいたから、大丈夫、です」

「よし、クリップもMPは残ってるな？」

「ああ、バッチリだ」

「ロータス、お前は無理しなくていい、ユニークを踏んだお前が死デスベナんでは意味が無いからな」

「いやいや、ここは無理するところでしょう。お兄……ちゃん的に」

「お前……」

そう、ここは無理のしどころだ。

ここで踏ん張れなければ、お兄ちゃんでは無いのだから。

「……わかった。だがやはり無茶はするな。妹の前で死ぬのは兄の仕事では無いだろう？」

「ああ、そうだな。わかってるよトト姉」

妹を守れない兄に存在価値など無いのだから。

ここで俺が死んだらレベツカの生存確率は格段に落ちる。

無論、このパーティーメンバーで一番Lvが低い俺が出来ることなど高が知れているだろう。

それでもこのユニーククエストを発生させたのが俺である以上、レベツカがどうなる

かは俺にかかっていると云っても過言では無いと思う。

なにせユニーククエストはこのアルカディア・プロジェクトの根幹を成すコンテンツでありプレイヤーにおけるメインコンテンツであるのだから。

『英雄よ、挑み給え、これは貴方へと贈る物語、貴方が作る物語、貴方の為の物語。そして、願わくば、貴方の旅路が光溢れるものでありますよう』

不意に、チュートリアル終了時のクララのセリフが脳裏に浮かんだ。

そうなのだ、これが、これこそが、俺の物語。その第一歩。

確信が有った。レベツカこそがアルカディア・プロジェクトにおける俺の物語である、と。

その時――

『――』

――誰かが、微笑んだ気がした。

「ロータス」

不意に、トト姉の声で引き戻された。

「なんだ？トト姉」

トト姉は悲しそうな顔をして、優しくそうな顔をして、また悲しそうな顔をして、言っ

た。

「あまり、入れ込むなよ？」

見ると、ネオンとクリップも同じような顔をしている。

ああ、わかってる。ありがとうみんな。

「ああ、わかってるよ。大丈夫だ」

大丈夫、わかってる。

もう二度と、あんな思いはしない。

俺は、お兄ちゃんなのだから。

~~~~~

「では作戦の確認だ。基本的にはいつもと一緒。セラフイム・ワールドの時にもやった護衛クエストと一緒にいく」

「トト姉がタンク兼物理ダメージソース、ロータスが攪乱、ネオンがヒーラー兼バツファア、んで俺が魔法ダメージソース兼デバツファアだな」

「加えて、私が、レベツカちゃんから離れず、付きっ切りでバリアを張り続ける、です」

「最悪の時は俺がレベツカを抱えて村まで逃げる、と」



「その通りだ。これが私たち『鳶の宮殿』初めてのアルカディア・プロジェクトでの活動だ」

「あつ、それ確定なんだ」

「まだクランハウスも建ててないのにな」

「馴染み深くて良い、と思います、よ?」

トト姉、本当に好きだよなあ。

まあ確かにセラフイム・ワールドの時のクランハウスはこだわりにこだわり抜いた結果、滅茶苦茶居心地良かったからなあ。

居心地良すぎてクランメンバー全員が入り浸り過ぎて親に怒られたのは良い思い出だ。

「『鳶の宮殿』?」

「ああ、俺たちの集まりの名前だよ」

「へー、お兄ちゃん達は仲良いんだね」

「まあね。もう5年。ゲームの中なら15年の付き合いだし」

「凄い!私が14歳だから私の歳より長いね!」

14か……:にしては幼いな。体格も日本人の平均よりは下だろう。

体つきが小さいのは栄養不足か?そもそもアルカディア・プロジェクト内のクオーレ

に栄養バランスの概念があるのか分からないが。

「おい、ロリコン<sup>ロータス</sup>品定めをするのはもう良いか？」

「おいクリップ、今なんて書いて俺の名前読みやがった？」

「まあそれは置いといて、そろそろ日が暮れるぞ。始めないとどんどん不利になる」

ちっ、トト姉の号令なら従わざるを得ないか。まあそれはそれとして後であの

針金野郎<sup>クリップ</sup>ぶっ殺してやる。

五人で茂みに隠れてシャドウリザードの様子を伺う。

レベツカの話によれば俺たちがいる場所から村の方向へ歩けば絶対にシャドウリザード、森の主に見つかってしまうらしい。視覚もさることながらシャドウリザードの最も鋭敏な感覚は聴覚である。特に足音に敏感らしい。草を踏み分けた音すらも聞き分けるその耳は斥候職のプレイヤーでも発見されないのは至難の業である。

「ネオン、全員にバフを頼む」

「はい。「バリア」「ディフェンスアップ」「アジリティアップ」」

「バリア」は受けたダメージを一度だけ肩代わりしてくれる魔法。

「〜アップ」は文字通りその魔法に対応したステータスを1.3倍にする魔法である。

それをレベツカを含む全員に付与して準備は終了だ。

「よし、私が先ずは「ウォークライ」でヘイトを集める。そうしたらクリップがとにかく

デバフをシャドウリザードに連打だ」

「了解だ。もしもの時は頼んだぞ、ロータス」

「オツケー、任せとけ。剣舞騎士は付け焼き刃じゃ出来ないんだね」

あれがまともに運用出来るまでにどれだけかかったと思ってるんだ。俺しかいなかったし全部独学でやらなきゃならなかったんだからな。

めっちゃ大変だったし今でもあのスタイルが合ってたのか分からないけど今でも使えるスタイルだからまあよしとしよう。

「よし、みんな準備はいいな？」

「了解、トト姉」

「準備よし、だ」

「は、はい、大丈夫です」

「う、うん！私も平気！」

「よし！行くぞ、3、2、1……「ウォークライ」！」

トト姉から赤い波動のようなものが広がっていく。シャドウリザードにその波動が届いた、その瞬間。グリーン、という擬音が聞こえるほど勢い良く首がこちらを向いた。

「ピットフォール」「アジリティダウン」「ミラーージュ」

それと同時にクリップが事前に詠唱をした三つの魔法を連射する。

対象の足元に込めた魔力量に応じた大きさの穴を開ける「ピットフォール」対象に幻覚を見せる「ミラーージュ」「くダウン」は「くアップ」系の逆だ。

「K i s h a a a a a !!」

耳をつんぎく大咆哮を合図に俺が飛び出す。

一気に接近して穴に足を突っ込んでいるせいで下がっている顔に向けて嫌がらせのようにヒットアンドアウェイを繰り返し、攻撃。

その間にネオンがレベルツカを連れて村の方角へ走り始めた。

このフォーメーションで行くとヒーラーであるネオンが先頭を走る事になる、故に俺は基本的にはネオンと護衛対象、すなわちレベルツカに向かってくるモンスターだけを重点的に対処する事になる。

クリップがデバフに専念できる様に雑魚は俺が対処しなければいけない。

ヘイトを稼ぐトト姉にもシャドウリザードに専念してもらわなければならない為、四人だとかなりギリギリの戦いを強いられることになる。

「ピットフォール」から抜け出したシャドウリザードがトト姉に向けてその鋭利な爪を振り下ろそうとする。

「光よ、眩く照らせ「フラッシュ」」

しかし的確にシャドウリザードの目に向かってクリップが放った閃光弾と呼べる魔

法が炸裂し、シヤドウリザードの視覚を奪う。

よし、今のうちに少しでも村へと走らなければ。

## #9 影、相対すは月の獣

そして物語は現在へと巻き戻る。

「ネオン！その子から絶対<sup>レベツカ</sup>に目を離すな！」

「なんでこんな範囲攻撃連発してくるっ！」

「ヘイト稼ぐのが限界に近いっ！」

「シールド」！「エリアヒール」！「ディフェンスエンチャント」！ダメですつ、これ

以上はターゲット貰っちゃいます！

「おい！ラツキーボーイ<sup>カホチャ野郎</sup>！ユニーク踏んだお前が何とかしろっ！」

「無理に決まってるだろおーがあー!!」

「フラツシュ」で目くらましをしてから村の方向へと全員で走り出したのは良かった。

しかし、ようやく半分は森を走り抜いたかという頃、今まで舐めプをしていたシャドウリザードはやつとの事でその重い腰を上げた。

「k i s h a a a a a !!」

「影を纏うエフェクト、範囲攻撃が来るぞ！」

「またかよ！急に頻度が上がったぞ！」

敗走ギリギリまで追い詰められている原因はこれ、シャドウリザードの魔法である。

周囲の影を巻き込んで矢のようにして飛ばして来る「シャドウレイン」の魔法。あの耳障りな鳴き声人間でいう詠唱にあたるのだろう。

「ネオン！我々の事は後回しで良い、レベッカとロータスに「バリア」だ！」

ユニーククエスト『限界村落の村娘』のクリア条件は村娘、すなわちレベッカを無傷で守り抜いての『森の暴れん坊』のクリア。故にレベッカだけには絶対に攻撃を当てられてはいけない。

それにユニーククエストを踏んだのが俺ということも状況を厳しくしている。推奨レベルが70のクエストにLv. 12が挑んでいるのだ。もちろんシャドウリザードの攻撃を一撃でも受けたらそこでHP全損である。ユニーククエストを踏んだ俺がクエストの途中で死んだら<sup>デスベナ</sup>ユニーククエストはどうなる？その検証がしっかり出来ない以上、俺も絶対に死ぬわけにはいかない。

「すまん！俺が完全に足引っ張ってる！」

「構わん、それより私達の負担を減らしたかったら自力で避けてくれ！」

「了解つ、と」

辺り一带に生えている樹木から伸びた枝の影が実体を持って矢のように俺たちに降り注ぐ。

「ダブルステップ」で狙いもへったくれも無い矢の雨を躲す、右、左と、避けた先にも影の矢、「ドリフトステップ」で強引に曲げて回避。

「k i s h a a a a a !!」

「やばっ」

アーツ終了時の硬直を狙いすましたようにシャドウリザードの鋭い爪が迫る。このタイミングは間に合わない、ので上小太刀を下段に構える。数瞬の後体全身に凄まじい衝撃、それに「バリア」が割れる音とエフェクト。俺のプレイヤーアバターが一時的に「バリア」という防護壁を無くし、無防備を晒す。目の前には俺という虫ケラを追撃しようとするシャドウリザードの爪。

「あ、まいわっ!」

体を横に開き、右側に大きく捻り俺の頭上から迫り来る当たれば俺の紙のようなDEFでは一撃でHP全損は免れない一撃を下から一見心もとない小太刀で迎え撃つ。真つ正面から打ち合っては絶対に勝てない、なので横に逸れるように力を加えてやる。俺の右横數十センチを凄まじい勢いで爪が挟り取る。空気を裂く音と衝撃でHPが減ったのよう感じるほどの一撃、これで通常攻撃とは笑わせてくれる。

けど、その隙はたかがLv. 12と言えど見過ごせるものではないなよなあ!

振り下ろされた脚にナイフを突き立ててそれを足場にして背中までよじ登る。



「Grrra!!」

傷口に更に振じ込まれるようなナイフの痛み、シヤドウリザードがうめく。自分にそんな苦痛を味合わせた虫ケラを自分の体から追い払うようにめちやくちやに暴れまわる。

「けどそれはお前の傷口を広げるだけなんだよ!」

俺は振り落とされまいと小太刀を納刀し、ナイフを両手で突き立てる。痛みでシヤドウリザードが更に暴れまわるが、それはナイフの傷口を更に広げるだけで終わる。

しかしシヤドウリザードの体から黒い影、「シヤドウレイ」の予備動作だ。

「させるかっ」

それより俺の小太刀がお前の骨髄を突き刺す方が早い。

突き立てた、と思った瞬間強い衝撃を受けて小太刀が吹き飛ばされる。

嘘だろこいつ、自分で纏った影からも打ち出せるのかよ。そう思ったとき足裏にチクとした痛み、VRで痛みが有るって事は結構なダメージということだ。左足に踏ん張りが効かなくなっているのが分かる。

こりや、ヤバイな。数秒後には全身穴だらけになっている俺が想像出来る。

それより早くこいつの背中から降りなければ。あつ、無理だわこれ。

もう影の矢が発射直前だ。そして、矢が発射される。

前に凄まじい衝撃がシャドウリザードを吹き飛ばした。

その反動で俺はシャドウリザードの背中から弾き飛ばされる。

「大丈夫か!？」

「悪い助かったよ、クリップ」

「例はいいからネオンのところまで早く行け、HPヤバイぞ」

「サンキュー、っと」

クリップの魔法が間一髪でシャドウリザードを吹き飛ばしたお陰で直撃は免れたものの、俺のHPはそれまでの爪の余波やクリップの魔法の余波、一番はやはり足裏に突き立てられた矢での傷で削られている。

途中、吹き飛ばされた小太刀を回収して先頭を走るネオンとレベツカの所まで駆け寄る。

「お兄ちゃん!?! 凄い傷、大丈夫?」

「ああ、大丈夫だ。ちよつとしくじったけどまだ平気だ」

「今、治しますね。」「ヒール」「ハイヒール」

ネオンの回復魔法がHPを回復するとともにアバターの傷を塞ぐ。VRゲームでは痛みは痺れと衝撃に変換され、動かしにくいという実感を伴ってプレイヤーに伝えられる。回復魔法は減ったHPを回復すると共に、そういった傷を塞ぎ痺れと動きにくさを

取る。

また度を越した傷は痛みも伴うが、その痛みも回復魔法は取り除くことができる。この特性によりヒーラーはどのパーティーでも重宝されている。

「ありがとうネオン。助かった」

「い、いえ。これが私の仕事ですし、気にしないで、ください」

「お兄ちゃん、私の村まであとちよつとだけ、大丈夫？」

「本当か、ちよつとそれはマズイな」

シャドウリザードをレベツカの住んでいる村に連れて行くのはどう考えてもろくな結果にならなさそうだ。

「わかった。こつちでなんとかしてみる。レベツカとネオンはこの前走り続けてくれ。二人ともまだ体力は大丈夫か？」

「はい、私は大丈夫です。伊達にレベル高くありません」

「わ、私も大丈夫。けど、そろそろ疲れた、かな？」

そりやあそうだろう、14歳の少女が全力で走るには適さない森の中を怪物に追われながら全力疾走しているんだ。体力なんて尽きて当然だろう。

「もうちよつとだけ頑張ってくれ、直ぐに終わらせるから」

俺に出来ることはそうは多くないが、少しはある。

「うん。頑張つて、お兄ちゃん」

「……ああ」

この笑顔は、絶対に守り抜くさ。

~~~~~

「という訳だ。そろそろ村に着くし、レベツカの体力の限界も近い、何か考えないとヤバイぞトト姉」

「……わかった。正直、発動条件が厳しいしデメリットがキツイからあんまり使いたくなかったが使おう。ロータス、お前とクリップで3分稼いでくれ。ラルヴァを使う」

夜鎧やがいラルヴァ。トトが持つ神秘防具アルカナアーミーである。

ラルヴァを遺したアルカナは、《月》の正位置【狂乱騎士 リュージツト】

今までに討伐が確認されたアルカナの数は13体。【狂乱騎士 リュージツト】は13体目に討伐された最も歴史の浅い神秘防具アルカナアーミーである。狂乱騎士の名の通り、リュージツトは理性が殆ど無い半ば暴走するアルカナであった。その為《月》の神秘防具アルカナアーミーは暴走の特性を持つている。

ラルヴァもその例に漏れず、暴走の特性を持つている。トトは【狂乱騎士 リュー

ジット」討伐の際に累積ダメージMVPの一つのみを取っているのでその性能は本来のもの三分の一となっているがそれでも既存の防具のほぼ全てを凌駕する性能である。

話を戻すが、夜鎧ラルヴァは暴走のスキルが付与されている。

しかしプレイヤー自身がアバターを動かすVRゲームにとって制御不能状態になるのはかなり危険とされている。自身の脳の命令とは違う動きを自分の体が外部からの制御によって強制的にさせられるのだ。そのストレスは脳が焼き切れても仕方がないとされている。

ならば、暴走のスキルはどんなスキルなのか。大きく分けると以下の通りである。

・使用者のATK/DEFを1.5倍、MNDを0にする。

・使用者が死亡するか、敵対者が戦闘不能になるまで戦闘状態は継続される。特殊条件下を除き、如何なる方法でも戦闘状態は継続される。

・使用者が死亡するか、敵対者が戦闘不能になるまで暴走は継続される。任意での解除は出来ない。

これだけ見れば、メリットの方が多いように感じられるが、一般のアルカディア・プロジェクトのプレイヤーには暴走のスキルは敬遠されている。理由はこの特性が余りに厳しいからである。

・この場合の敵対者とは、視界範囲内の敵対モンスター全てを指す。

故に、暴走を使う際には殆どリスポーン覚悟の最後の切り札として切られる場合が多い。もしくは、モンスター一体しか出現しないボス戦などか。

「だが、この状況なら、使える」

現在、この森ではおよそ30分以上のシャドウリザードとの撤退戦が繰り広げられている。森の主と呼ばれるシャドウリザードが暴れているので他のモンスターは身の危険を感じ、既に遠くに避難している。更に、レベツカの住む村に近づいていることもあり、少なくともトトの視界にシャドウリザード以外のモンスターは見つけられない。

ならば、使える。神秘防具にはそれぞれ元になったアルカナに対応するスキルが付与されている。

《月》の場合は暴走。初めて見たときは落胆したものが、よく理解すれば私のプレイスタイルにこれほど合うスキルも無い。

月が出ていないから全開は無理だが、それでも十分。

「ラルヴァ、機関解放、狂乱せよ」

『Sir. My Master』

『『月の慟哭』を起動、狂い、哮ろラルヴァ！』

【狂乱騎士 リュージツト】の力を受け継いだ鎧が、猛り狂う。

## #10 名も無き村へ

夜鎧ラルヴァは典型的な神祕防具アルカナアーマーである。

基本的に神祕防具は装備しているだけで発動しているスキルはあまり持っていない。起動文言アンロックと呼ばれる文章を自分の口で発声しないといくつかのスキルがアンロックされない。そうでもしないと日常生活に支障をきたすスキルも存在するので当然の措置と言える。


・夜鎧ラルヴァ 胴装備 ★

破壊不可 窃盗不可 売却不可 譲渡不可 廃棄不可 PKデスペナルティ対象外

VIT+500 ATK+100 スーパーアーマー 追跡 月の暴走 「月下吼  
獣」

裏切られた騎士は月の下で復讐を誓う。必ず、この忠誠に汚名と濡れ衣を着せた王家  
にこの世の地獄を味あわせるのだ。


|| || || || || || || || || ||

以上がラルヴァのステータスである。

他の例に漏れずアルカナアーマー神秘防具には破壊不可から始まる使用者を制限するスキルが付与されている。しかし、ロータスの『名無しの南瓜』を例にあげても上記のスキルは付与されている。これらを纏めて固有防具とカテゴライズされているが、それでも神秘防具が頭一つ抜けている理由としてはそれぞれのアルカナに対応するそれぞれのスキルがあげられる。ラルヴァで言う『《月》の暴走』である。

これらがアルカナディア・プロジェクトにおける神秘防具を最上位とする風潮の理由である。まあこの風潮の最たる原因はとある一人のクオーレであるのは間違いないのはあるが。

さて、『《月》の暴走』である。

このスキルの効果は先述した通り、スキル使用者の暴走である。

プレイヤーから最後の足掻きだとか格上PKへの嫌がらせだとか呼ばれるこのスキルだが、『月』のアルカナの神秘防具が使用した場合、少々毛色が異なる。【狂乱騎士リユージュット】は暴走の上位互換であるスキル、【狂化】のスキルを使っていた。【狂化】には深度と呼ばれる目安があり、それが進むにつれ強化具合が変わっていた。

【《月》の暴走】にもそのシステムが受け継がれており、深度が設けられている。この深



度はアルカディア・プロジェクトの中でも異質であり、月の満ち欠けによって決定される。

現在の時刻は現実で午後1時半。アルカディアで言えば正午過ぎだ。例外的に例えその日の夜が満月であろうと、太陽が出ている間は新月として扱うという特性があるため、深度は最も浅い状態である。基本的に満月に近ければ近いほど、深度は深くなる。(だが、デメリットもその分マシになる)

『《月》の暴走』は深度が最も浅い状態で通常の暴走と同程度の効果がある。シャドウリザードが魔法攻撃を放ってくる以上、MNDが0になるのは厳しいが深度が深くなった状態でくろうよりはマシだ。

「ラルヴァ、《月》の暴走を発動」

『承認、効果範囲内に敵性モンスターを発見。スキル、起動』

ラルヴァから黒い靄が現れる。その靄はトトの兜の頬の辺りに集まり、複雑な紋様を描く。これが暴走の兆候である。もうこうなったら

スキルの発動者にも任意での停止は出来ない。

~~~~~

「いつて言ってたんだけど、あれ何？」

「トト姉の神秘防具、ラルヴァの固有スキルだな。確かにこの状況なら有用だ」

ロータスは取り敢えずトトに言われた通り、クリップと合流してシャドウリザードの足止めに徹した。しばらくして後ろから恐ろしい程の気配が現れたので慌てて振り向いたら、なんとトトの恐ろしい全身の黒鎧から禍々しい靄が溢れ出ているではないか。ビックリしたのでクリップに説明を求めたらそんなことを言われた。

「……ラスボス？」

「どっちかっていうと俺は闇に堕ちた先代勇者とかそういうのだと思う」

「ああ、分かる」

「あつ、トト姉がシャドウリザード蹴り飛ばした」

「おお、5mくらい吹っ飛んだぞ」

ウチのパーティーのリーダーが高笑いをしながら自分より数倍もあるドラゴンもどきを蹴り飛ばしている件について。

「一応、手伝つとく？」

「一応、な」

俺はこっちの方に蹴り飛ばされてきたシャドウリザードに斬りかかる。もう既にシャドウリザードはこれまでの戦闘での傷と先程トト姉に蹴り飛ばされた時の傷でボロボロである。まあ、8割くらいさつきから一方的にボコボコにしているトト姉の所為だとは思うけど。

「にしても、暴走のスキルヤバイな。デメリットがあるとは言え強すぎない？」  
タイマン  
 「対一なら無敵じゃね？」

「いや、トト姉のアレは色んなのでドーピングしてるから」

「というと？」

「トト姉の職業、クラス狂騎士は暴走の効果を2倍にする代わりにデメリットも増加させるっていうスキルが常時付与されてるんだ」

「ああ、そういやさつきも何か言ってたな、私の職業がどうのこうの」

「それに、色んなポーションとか魔法で強化してる。素のステータスが高ければ高いほど暴走は強くなるから」

だからあんなに一方的なのか。

横振りに当てることを意識した小振りな一撃が迫る。

黒鎧の狂騎士は避けようとする素振りも見せず、煩わしげに左手だけで持っている大楯で弾き、右手だけで持っている両手用の大剣で爪を何本か斬りとばす。

「K i s h a a ! ?」

久しく感じる事のなかった痛みという感覚に思わず蜥蜴は仰け反ってしまふ。その隙を狂騎士が見逃すはずはなく、通常の軌道では考えられないほど速く懐に潜り込む。

「クロススラッシュ」

その柔らかい腹部に十字の裂傷が刻まれる。

「G r a a a a !!」

推奨レベルが70と言えど、トトのレベルは86。トト一人でシャドウリザードの討伐など既に幾度となく繰り返している。しかし、ユニーククエスト『限界村落の村娘』という名前の通り、このシャドウリザードはレベルカに異常な程のヘイトを向けている。故にトト一人ではヘイトを受け持つ事も逃げる事もできず、かといって討伐する前にレベルは死んでしまうだろう。

しかし、ここまでくればトトの援護をするという前提ならばロータスとクリップのレベルが低いということは殆ど問題にはなり得ない。

「クロスアベンジ」

まあ、その必要性も無いのだが。

『《月》の暴走』でステータスが上がっているトトは単純なステータスだけで見ればアルカディア・プロジェクトの中でも1000本の指に入る。プレイヤーLvで言えば100はゆうに超えているだろう。シャドウリザードに対しては些か過剰である。

既にシャドウリザードは最初の勇猛な森の主の見る影もなく、身体中ボロボロである。月の獣と化したトトはシャドウリザードに対して殆どのステータスで勝ち越している。負けているのは暴走の効果で下がる魔法系のステータスであるINTとMND、

それにシャドウリザードが元々高いAGI位だろう。シャドウリザードが得意な影系統の魔法を当てられればまだ勝負は分らないが、それを許すほどのAGIの差では無いし、その為のロータスとクリップ、ネオンである。

クロスアベンジは重戦士系統には珍しいカウンターのアーツである。効果は効果に指定した敵対者から受けたダメージを自分のSTR分上乘せして跳ね返すというもの。タイミングがシビアではあるが当たれば必殺と言われる程の強力なアーツである。その保障をするようにシャドウリザードがロータスの体感10m程上まで吹き飛び、ポリゴンが見えたと思ったら綺麗に爆散した。

『敵性モンスターの消滅を確認、機能を終了します』

「ふう、終わったか」

暴走の効果が切れ、トトが臨戦態勢を解く。一人、やりきった感を出しているが、見ている二人からしたら唾然とする光景である。

「ねえ、シャドウリザードって、何メートルあった？」

「大体、5メートル位じゃね？」

「じゃあさ、何メートル飛んだ？」

「10メートル位じゃね？」

「……マジかよ」

「……マジだよ」

心なしかクリップの目が死んでいるのは錯覚であろうか。おそらくは今までに何回が見ているのだろう。絶対に逆らうような愚は犯すまいとロータスは静かに決意した。

「凄い、森の主倒しちやった」

「あ、はは。やっぱトト姉は凄いな」

シャドウリザードの打ち上げ花火は先頭を走っていたネオンとレベツカにも見えていた。それを見た二人は限界に近かった足を止め、来た道を引き返し始める。

「やあ、レベツカ。無事かい？」

「うん！トトお姉ちゃん！すっごいカッコよかった！」

「ふふ、どうだロータス。私の方がカッコよかったらしいぞ？」

「くっ、次こそは」

「お前は何を張り合ってるんだ」

「ふふっ」

その後は警戒しつつも先ほどまでの終われる緊張感もなく、普通に歩みを進めていた。

すると突然目の前が開け光が差し込んだ。

「あっ！」

突然レベツカが声を上げて一人で駆け出す。

そして森を抜けた所で立ち止まり手を広げて向日葵のような笑顔で振り返った。  
「ようこそ！ 私達の村に！」

『名も無き村へと到達しました』

『プレイヤー未到達領域へと到達しました』

『称号「開拓者」を獲得しました』

『称号「愚かな勇氣」を獲得しました』

『称号「巨人喰らい」を獲得しました』

『称号「森の覇者」を獲得しました』

『称号「弱者の庇護者」を獲得しました』

『ノーマルクエスト『森の暴れん坊』をクリアしました』

『通行許可証1を獲得しました』

『ユニーククエスト『限界村落の村娘』をクリアしました』

『レベツカをフレンドリストに登録しました』

『レベツカをパーティーに組み込めるようになりました』

『特殊称号「村娘の義兄」を獲得しました』

『特殊状態「村娘の英雄」になりました』

『ユニーククエスト『限界村落を立て直せ』が発生しました』

『ユニーククエスト『村娘の願い』が発生しました』

『特殊条件を達成しました』



## # 1 1 遠き日々はまだ

もう、何回目だろうか。

いつも同じ夢を見る。

9月、この国には多くの台風がやって来る。

例に漏れず、今年もどうやら上陸してきたようだ。

雨戸に大粒の雨が打ち付け、独特の音を家中に響かせている。遠くでは雷の鳴る音が轟いているのが聞こえる。

「じゃあお兄ちゃん、行つて来るね」

「本当に一人で大丈夫なのか？」

「うん、ヘーキヘーキ」

妹はこんな日にもかかわらず、出掛けにいくと言ってカツパを着込み今にも飛び出して行きそうな雰囲気だ。

ああ、やめてくれ。

雨はどんどん強まっているようだ。ニュースではどこかの川が氾濫したとか、海岸に大波が押し寄せているだとか、土砂崩れで道が塞がれて孤立状態だとか流れている。

それはいつもの事で毎年見ているニュースであつて、俺には関係の無い事だ。少なくとも、その時まで。

「今日は父さんも母さんも早く帰ってくるらしいから、遅くなるなよ」  
「うん！わかつてる！」

頼むから動いてくれ。せめて、もう少し声をかけてくれ。

長靴を履いて、もう出てしまう。

時刻は午後2時。普段ならばまだ日の出ている時間で夕方とも言えない時間帯だ。

だけど今日は分厚い雲に覆われて太陽は全く見えない。代わりに見えるのは大粒の雨粒と時々視界を白く染める雷だけだ。

なぜあんなにも雨雲は黒いのだろう、なぜあんなにも曇り空の日は暗いのだろう。

やはり、嫌いだ。

「じゃあいつてきまーす！」

「うん、行つてらっしゃい」

ドアノブに手を掛ける。

やめろ、やめてくれ。

体よ、動け。

声よ、出ろ。



目を開けると目の前に花蓮の姿。

「やつと起きた。うなされてたよ？大丈夫？」

「……ああ。大丈夫だよ、花蓮」

「なら良いけど。そろそろお兄も荷造りしないと間に合わないよ？」

「そうだな、ありがとう花蓮」

「良いんだよ、じゃあ私は部屋に戻るから」

そう言つて花蓮は自分の部屋へと戻つていった。

レベツカを無事に村へと送り届けたあと俺たちは村の人達から大歓迎を受けた。どうやらレベツカは村の人に無断で出ていったらしく凄く心配されていた。しかも森の主であるシャドウリザードが狩をしているのを見かけた人がいて、もうレベツカの生存は絶望的だと思われていたようだ。

そんな時に俺たちがレベツカを連れて来たものだから俺たちも大歓迎されたのだ。レベツカは凄く怒られていたけれど。それでも最後は無事に帰ってきたことを喜ばれていた。

クエストの達成が通知され、ようやく終わったかと思いきや新しいユニーククエストが二つ増えていたのは想定外だった。

・ユニーククエスト『限界村落を立て直せ』

発生者 ロータス

クリア条件 名も無き村の防衛計画を立て、敵性モンスターから守り抜く。

推奨レベル 60

・ユニーククエスト『村娘の願い』

発生者 ロータス

クリア条件 レベツカの願いを叶える

推奨レベル ー

この二つが『限界村落の村娘』をクリアした通知の後に立て続けに発生した。ユニーククエストなので発生したのは俺一人だ。

しかし問題があつてこの二つのクエスト、どうやら俺一人でしか取り組めない様なのだ。クエストを受注するとクリップ達とのパーティーが強制的に解除されてしまった。しかしレベツカだけは特別らしく、二人だけでならクエストを受注する事が出来た。

ユニーククエストに関してはまだプレイヤーはわかつていない事が多く、この様な事例も何件か確認されているらしい。俺は見た事がないのでよく分からないが、アルカディア・プロジェクトのプレイヤーがネット上で作った掲示板では色々な考察がなされているらしい。しかし、ユニーククエストはユニークとだけ言われるだけあつて千差万別でどんなクエストなのか、どんな規模なのか、どこで行われるのか、どれほどの難易

度なのか全くバラバラで考察が難しい上に、自分のユニーククエストを隠そうとするプレイヤーも少なくない。

ユニーククエストはアルカディア・プロジェクトというゲームをプレイする上で絶対に外せる事はない大きな要素だ。しかしユニーククエストの内容によつては他の大勢のプレイヤーと敵対する様なものも少なくない。それでなくてもユニーククエストは現在最もアルカナクエストに繋がる可能性が高いと言われるクエストだ。隠匿したいというプレイヤーも多い。

それどころかこのユニーククエスト、どうやら自分が縁を繋いだクオーレによつても内容が変わるらしいのだ。俺にとってはレベッカがそれに当たるのだろうか。

あの有名なアルカディア・プロジェクトのレビューにある『国王の暗殺』というユニーククエストは失敗に終わったらしいがそれでも五千人ものプレイヤーとクオーレが死んでいる。舞台になったのは深き森のエルフの国 アロガネア。しかしそれ以降アロガネアの国王は疑心暗鬼になり、結局内戦が起きた。あまりの弾圧に市民が蜂起したのだ。しかもそれにプレイヤーが両陣営に加担した為に内戦は泥沼化、五千人もの犠牲を出して終結した。現在の国王はその次代である。

更に恐ろしいのはアルカディア・プロジェクトにプレイヤーが現れてから唯一起こった戦争も一人のユニーククエストが発端という事だろうか。

世界最高の武器を生み出すドワーフの国 テナースクと魔法と科学を融合させた世界最強の魔族の国 クルーデリオのぶつかり合いは様々な余波をアルカディア全体に撒き散らしながら終結した。

そんなユニーククエストを今どうにかするのは無理だという結論に至った俺たちは取り敢えず今日のところは解散としてまた明日という約束してログアウトしたのだが、どうやらそのまま眠ってしまった様だ。

「雨か」

ふと雨が降っている事に気付く。

そういえば予報では午後から雨だったな。

「そんな事より荷造りしなきゃな」

花蓮も言っていたがそろそろ荷造りをしないと来週の引越しに間に合わない。元々大学に進学したら一人暮らしをする予定だったので大型家具や家電製品は既に買ってありもう設置しているが、まだ細かい雑貨や服がまだ荷造り出来ていない。

それに花蓮が急遽一緒に暮らす事になったので家具や部屋割りもまた考え直さなければいけないのでその辺りも相談したいところである。

ダンボールからはみ出している服を手に取り、綺麗にたたみ直して詰める。多分花蓮がさつき部屋に入ってきた時にぶつかっただろう。

「お兄ー！そろそろ夕飯の支度しないー？」

一階から花蓮がそう叫ぶのが聞こえた。時計を見ると、確かにそろそろ支度を始めないと遅くなってしまう時間だ。

「わかった！今行くよ」

さて、早く行かないと花蓮が拗ねるな。まあ、そんな所も可愛いのだが。

~~~~~

次の日は特に用事が無かったので、朝食を摂った後家事と荷造りを少し終わらせて気分転換も兼ねてアルプロにログインした。

一人部屋で眼を覚ます、ベットとテーブルしか無い殺風景な部屋だ。

外に出ると朝日が眩しく俺を照らし、思わず反射的に眼を閉じる。

「あつ、お兄ちゃん。おはよう」

「ああ、おはよう。レベッカ」

俺をお兄ちゃんとアルプロの中で呼ぶのは一人しかいない。昨日俺たちはレベッカを送り届けた後ログアウトをしようとしたら俺だけログイン地点がこの『名も無き村』に変わっていたのだ。



おそらくユニーククエストを進める上で一々この村まで来るのに森を踏破しなくても良いようにという事だろうが、これで俺が一時的にパーティーを抜けるのは決定的になってしまった。

一応マップ上ではこの村は安全地帯なのだが、どうやら他のプレイヤーはこの村をログイン地点にできないらしく、相談の上の結果で俺は主体としてレベル上げとユニーククエスト攻略を兼ねてこの村を拠点として行動、他のメンバーはクランハウスの建設費用を集める事になった。

一人だけ金策が出来なくて申し訳ないなと思っていたら、  
「ユニーククエストは報酬が美味いから気にしなくて良い」

と三人から言われてしまった。

確かに『限界村落の村娘』の報酬もかなり入っていたし、なにより称号系の報酬が多かった。閑散としていた俺のプレイヤーステータス画面も一気に色々な情報が増えた。さらに言えばレベルも一気に12から25まで上がっていた。色々な敵と戦っていたのでちよくちよくレベルアップ時の効果音は聞こえていたのだが、立ち止まって確認する暇が無かったので、一気に倍以上になってしまったのだ。

流石に適正レベルの5分の1以下のレベルで突っ込んだら経験値が分散されるとは言えそれほどの経験値が入ってきたらしい。

「昨日はずっと寝てたんだね。やっぱり『プレイヤー』の人はよくわかんないね」

「まあね、確かにレベツカ達からしたら不思議かもね」

「一日中家から出てこないし、ご飯も食べてる様子が無かったし心配したんだからね」

「ごめんごめん。でも俺たちはそういう存在なんだよ」

「やっぱりお兄ちゃんも『神さまの御使』なんだね」

俺たちプレイヤーはクオーレ達に『神さまの御使』と呼ばれる。

というのもこの世界の神、というかクオーレが信仰しているのはクララ達管理AIなのだ。

クララ達によってこの世界に送り込まれた俺たちプレイヤーはクオーレからしたら実在する神の使徒というわけだ。流石に信仰はされないが、プレイヤーというだけで尊敬と畏怖の対象だし、クオーレとは違う生命体という認識を受けている。

「今日はずっとこっちに居られるの？」

「ああ、居られるよ。今日と明日くらいはこっちに居られると思う」

「やったー！じゃあさ、また色んなお話聞かせてよ！私、お兄ちゃんのお話好きなんだあ」

「わかったよレベツカ。でも先にお仕事してからな」

「うん！じゃあまたねお兄ちゃん！約束だからね！絶対だからね！」

どうやらレベツカは他のゲームでの話が気に入ったらしい。送り届けてから歓迎のもてなしを受けたのだが、その時にレベツカにせがまれて話したのだが気に入ってくれたようだ。

「さて、じゃあ俺も始めますかね」  
先ずは森の見回りかな。

## #12 アルカディアのあれこれ

名も無き村を見て回る。昨日はずっと宴会であんまり村の中を見る事ができなかつたからな。結構綺麗だし、家畜の牛っぽい奴とか羊っぽい奴とかもいるな。子ども大人も早起きして畑とか自分の仕事に取り掛かってるし、凄くイメージ通りの農村って感じだ。

「ああ、ロータスさん。おはようございます」

「おはようございます、村長さん。昨日はどうも」

前から白髪やシワが目立つものの、しっかりとした足取りで歩くご老人が挨拶と共に現れた。この村の村長の様な立ち位置の人でありレベッカの祖父でもある。

「村長はやめてください。ここは体裁としては村としていますが国にも認められていないだけの集落です」

「村では無いのですか？しかも国に認められていないとは？」

クエストでは『限界村落の村娘』で『限界村落を立て直せ』だった筈だ。村落となっている以上村だと思っていたしマップ上でも「名も無き村」となっているから間違いないと思っていたのだが。

「貴方は『プレイヤー』の探求者クアエストールでしたね。このストルタス人間では国が管理している都市と村からは税金を徴収し、その代わりに庇護をしています。しかしその税金を払えない者やそもそも人間では無い者はその庇護を受ける事は出来ません」

「という事は……」

「はい。ここはそういった者たちが寄せ集まって出来た集落なのです」

成る程。通りで昨日の宴会では人間以外の種族のクオーレがいた訳だ。トト姉達が驚いていたので聞いてみたらストルタスには人間以外の種族が殆どいないのだという。

そもそもこのアルカディアにはそれぞれの種族が住んでいる場所が明確に分かれています。いるらしい。

アルカディア・プロジェクトには小さな島を除き、一つの大陸しか未だ確認されていない。オルコス大陸と呼ばれるユーラシア大陸と殆ど同じ面積の大陸の中に5つの国が存在するのだがそれぞれの国における人口比が極端に偏って居るのは全世界民の共通認識である。

大陸中央部に位置し、現在最大勢力を誇る

「ストルタス人間の国」

大陸東部に位置し、豊かな自然の中で暮らす

「ブグナーテ獣人の国」

大陸西部に位置し、圧倒的な知識を持つ

「アロガネア」エルフの国

大陸南部に位置し、世界最高の技術力を持つ

「テナースク」ドワーフの国

大陸北部に位置し、世界最大の軍隊を抱える

「クルーデリオ」魔族の国

この五つの他に国は無く、プレイヤーズはこの中から一つの国を選びその土地に応じた種族としてアルカディアへと降り立つこととなる。

すなわち、プレイヤーも含めてその国にいる人類というのはその国を治めている君主の種族が限りなく絶対種であるということになる。すなわち、国から弾かれた者や訳あつて他国へと移住した者は肩身の狭い思いをする事になるのは明白である。

そうした者たちが寄せ集まって出来たのがこの村という事なのだろう。

「あなたは……いえ。すみません、失礼な質問でした」

「私は何故、この村に居るのかですか？」

「……はい。答え辛かったら答えて下さらなくて良いのですが」

そこへ来るとこの村の村長が人間であると言うのは些か不思議な話である。ここは人間に拒まれた者たちの村。その長が人間であるということは不都合では無いのだから

うか。

もしかしたら目の前の白髪を生えた老人は人間ではなく、ほかの人類種なのだろうか？

「別に私は人間ですし、別に何か犯罪を犯して国から追放されたわけでも有りません」  
「では、何故？」

「私ではなく、私の妻が国から追われる立場だったのです。いえ、正確に言えば王家にでしようか。妻は犯罪を犯した訳でも無ければ、人間以外の種族でも無かった。私の妻に何一つ国を追われる要素など無かったのです！」

目の前で声を荒げる老人は今、何を思っているのだろう。

少なくとも俺は村長の妻という人は見た事が無い。おそらくはもう亡くなってしまったのだろう。

「……失礼。興奮してしまいました」

「いえ、お構いなく。大切な人を失う痛みはいつまでも晴れる事は無いものです」

そう、それがどんなものでも。その過程がどうであれ結果として大切な人を失ったという事実は変わらないのだから。だからこそ、俺はこんなにも空虚な言葉を吐くのだから。

「ありがとう、ロータスさん。レベツカを助けてくれたのが貴方で良かった。どうか、こ

れからもあの子の事をよろしくお願いします」

「ーはい。私の命に代えても」

この世界でのプレイヤーの命などその辺の石ころにも劣る。何度でも蘇り、心が折れたりモチベーションが下がらない限りロータスという命は不死なのだ。

そんなものより一人のクオーレ取り返しのつかない命の方がよっぽど尊く、価値あるものだ。それがまだ若い少年少女であれば尚更の事だ。

「はは、貴方がたプレイヤーの方々は不死でしたな。それは心強い、幸いレベツカも貴方によく懐いているようだ。どうです？心に決まったお人でもいるのですかな？」

あー、これはもしかしてあれか？レベツカと結婚しない？って言われてんのか？というか俺プレイヤーなんだけど、結婚システムとか実装してるのかよ。

「あー、お忘れかもしれませんが私はプレイヤーですよ？」

「そんな事は関係ありませんよ。それに、意外と多いのですよ？プレイヤーと我々クオーレが結婚したという例は」

マジかよ。

~~~~~



結局返事は先延ばしにして村の外周部にまでやってきた。

あの老人絶対にレベツカを嫁がせようとしてやがったぞ。どう考えてもまだ結婚できず年輪じゃねえだろうが。いや、でも地球ならアウトでもアルカディアならいいのか？よくわからん。

まあ、それは置いておいて。取り敢えず目先の目標は『限界村落を立て直せ』である、二つ同時に発生したユニーククエストだが『村娘の願い』は達成条件がよくわからないので後回しになる。レベツカに関係しているのは間違いなさそうだが、レベツカのお願いを叶えれば良いのか？いわゆるおつかいクエストというやつだろうか。

さて、外周部であるがここは森の一部分を切り拓いて作られた村である。当然きちんとした外壁など期待できないし、そもそも門も無かった。アルカディアに住む人々は基本的にプレイヤーと遜色ない身体能力を持つている。しかし、その戦闘能力に関してはプレイヤーのほうが一歩先を進んでいる。理由としては素質の差と環境の差である。プレイヤーは基本的にキャラクリエイトの時点で全ての素質を与えられている。例えば、マジックツリーを解放すればどんなプレイヤーでもどの系統の魔法でも使う事が出来る。しかしクォーレは生まれた時に既に素質が決まっているらしく土魔法しか使えない者や、水魔法以外の全てを使える者などが存在する。

もう一つの環境の差であるが、これは単純に探求者の職クヱリエールに就くものがあまり多くない

という点である。他にも戦闘に従事する職業としては兵士や傭兵などが挙げられるが、基本的には職業選択の自由が存在する状況で身体的に危険な職業をわざわざ選ぶ者など多くはないという事だ。

しかし、この二つが噛み合わせりその上でそれ相応の運を持ち合わせた者が存在する。それが今なおプレイヤー達が束になっても叶わない探求者の上位陣である。正直開発側の人間だとか実験的なチートツールでも使っているのではないかとか言われているが定かではない。

ここまで長々と語ってきて何が言いたかったかといえば、普通のクォーレは弱いという事である。正直低レベル帯のプレイヤーでも一対一なら問題なく圧倒できるだろう。しかもこの村はさまざまな所から逃げ延びてきた者たちが集まって作られた村だ。戦闘能力に長けた者などあまりないだろう。そもそもした事がない者も多い。

ならばモンスターが跋扈するこの森で村人達はどうやって今まで生き延びてきたのか、もちろん抵抗はするしあり合わせのものとはいえ木の柵で出来た外壁なども作る。しかし一番良いのは諦める事である。

あまり気持ちの良い話では無いが、人間の肉の栄養価はあまり高くはないと言われている。アルカディアで結構頻繁に出てくる食肉としてイノシシが挙げられるのだが、イノシシの肉1キログラムが約4000キロカロリーなのに対し、人間の肉は1キログラム

約1300キロカロリーだと言われている。

モンスターがカロリーを考えて獲物を選んでいるとは思えないし、そもそも死んだらポリゴンになって爆散するような生命体である。どうやって栄養を摂取しているのかと考えるもないが、幸いにも俺はまだ人が目の前で食われた経験は無いのでわからない。出来ればプレイヤーで生き返るとしても見たくは無い光景であるが。

とにかく人間は骨が多いし、筋張っているし、食べられる所は少ないしで、あまりモンスターにとつても良い食料では無いらしい。それでも襲われるときは襲われるし、戯れに殺される事もあるので安全とは程遠いのだが。しかし、家畜を代わりに出せば人間への被害は最小限に抑えられるのだろう。この村はそうやって生き延びてきたのだと教えてもらった。

「さて、じゃあぼちぼちやりますか」

そこへやってきたのが俺たちなのだ。プレイヤー未踏領域とあった通り俺たちがここを訪れた最初のプレイヤーである。言い方は悪いが死んでも蘇り、何故か自分たちに友好的な探求者である。それこそ縋りたくなる気持ちは理解できる。

『限界村落を立て直せ』の下にはいかにも貯めてくださいと言わんばかりのゲージが併設されている。現状0%な事を考えるとこれを貯めていくのが基本方針となるのは間違いない。

モンスターの討伐、防衛機能の強化、後は村人の鍛錬って所か？立て直せとある以上、何かをより良い状況にするのは間違いないだろうが、村は綺麗だしだったら防衛機能のことじゃ無いかとなったのが昨日の最後の方。トト姉達からも了承を貰ったし、この方針で進めてこうと思う。まずは森に入ってモンスターの間引きだな。

「森に入るの？私も行く！」

「おう、そうだな。やっぱり一人より二人……ん？」

聞き覚えのある声。振り返れば、金髪を風になびかせてこちらを見つめる村娘。レベツカ

『レベツカがパーティに加入しました』

ええ……。

## # 1 3 遺跡と守人の一族

「いやいや、馬鹿言うなよレベツカ。村の周辺の見回りとは言えモンスターも出てくるんだぞ？連れていけるわけないだろ」

「えー、大丈夫だよ。私だつて戦えるもん」

「嘘をつくなよ、まだレベツカ14歳だろ？職業だつて「村人」の筈だ」

「嘘じゃないもん。見ててね……ほら！」

ははは、頬を膨らませて抗議をしたつて無駄……つてマジか！

レベツカの突き出した右手の先には自身の顔ほどの大きさの火球が浮かんでいた。

「レベツカ、魔法が使えるのか」

「えへへ、凄いでしょ？」

凄い。純粹にこれは凄い事だ。

基本的にクオーレの素質はプレイヤーのそれと比べて圧倒的に劣る。全魔法や武器に適性を持つプレイヤーとは違い、クオーレは生まれた瞬間に生涯に獲得できる魔法マジックは決められる。レベツカの周りには俺の知る限り魔法が使えるクオーレはいない。俺たちの中にも魔法の使える奴はいないから誰からも指導を受ける事は出来ない。

い。故にレベツカは独学で火魔法を習得したことになる。

「村の人たちは知ってるのか？」

「うん、知ってるよ。たまに火付けてとか言われるもん。これなら付いていっても良いでしょ？」

「いや、それは……」

正直付いてきて欲しい。未だに「軽戦士」である俺は遠距離攻撃に乏しい。出来る事と言えばせいぜいナイフを投げつける位だ。

その点、レベツカが居れば森の中とは言え延焼にさえ気を付けければ強力な支援となるだろう。でも小さな女の子にモンスター討伐を手伝わせるのは……

「あつ、そうだ。火球の発現は出来ても命中精度が低ければ意味ないぞ？」

「ふっふー。練習したから平気だもん。えいっ！」

レベツカの火球はおよそ10m離れた村はずれの場所に立っている案山子に直撃して一瞬で焼き尽くした。

「仕事は終わったのか？ さっきまだ仕事があるって言ってただろ？」

「もう終わったよ。いつもやってるもん」

「モンスターを見てパニックになったりしたら危ないぞ？」

「森の主より怖いモンスターを倒しに行くの？」

無理だわこれ。よく考えたらシャドウリザードを倒すときにもしっかりした足取りで走れてたし。

「……はあ。分かった一緒に行こうか。だけど村長さんに許可を取ってからな？」

「わーい！ありがと、お兄ちゃん！」

~~~~~

村長の許可はあつさりと出て、俺はレベッカと二人で村の外に広がる森へ踏み入った。

「なんでレベッカは森に入りたかったんだ？もう薬草は取ったんだらう？」

「んー？お兄ちゃんと一緒に居たら楽しいからだよ？」

「楽しいからって……」

そんな理由でついて来ようとしてるのか。それならやめさせようか。

「えへへ、本当はね。見せたいものがあるの」

「見せたいもの？」

「うん。お父さんとお母さんが、お爺ちゃんとお婆ちゃんが、ずっとずーつとお爺ちゃんとお婆ちゃんの人たちが守ってきたもの」

レベツカの祖先の人たちがずっと守ってきたものって事か？

『私ではなく、私の妻が国から追われる立場だったのです。いえ、正確に言えば王家にでしようか。妻は犯罪を犯した訳でも無ければ、人間以外の種族でも無かった。私の妻に何一つ国を追われる要素など無かったのです！』

村長さんの言葉が脳裏をよぎる。

話の流れ的に村長さんの奥さん、つまりレベツカのお婆さんが国から追われた理由って事か？いや、決めつけるには早計か。まだ情報が足りない。

「それを見せてくれるのか」

「うん！お兄ちゃんになら見せても良いの。お母さんも『レベツカがいつか大きくなつた時、ずっと一緒に居ても良いって思った人が出来たら見せなさい』って言つてたから」

「あー、ありがとうレベツカ。嬉しいよ」

何これ恥ずかし！めつちや顔赤くなつてるのが分かるんだけど。アバターでも顔が赤くなるのな。

てか、これ何イベント!?実質告白だよねこれ。いや、でも落ち着け相手は義妹いもつとだぞ。

……あれ？義妹なら良いのでは？いやいやレベツカは14だぞ？

『幸いレベツカも貴方によく懐いているようだ。どうです？心に決まったお人でもいるのですか？』



落ち着け俺。ここはゲームだぞ。現実なら犯罪……ゲームなら合法？

「……お兄ちゃん？」

こてん。と首を傾げる仕草。わかって言ってるのか？これ。

「はっ?! いやいや、大丈夫、大丈夫だぞレベッカ。まだ正気だ」  
「？」

くつ、首を傾げて上目遣い。あざとい、しかしそれが良い。やはり妹⇨天使⇨義妹なのか？

「いや、そのだな。レベッカの両親は居ないのか？いや、挨拶とかそういう話じゃなくな」

「お父さんとお母さんはね、前にモンスターからこの村を守る為に頑張つて、死んじゃったんだって」

「……そっか。ごめんな、嫌な事思い出させて」

「ううん。私お父さんもお母さんも覚えてないの。それに、村のみんなが優しくしてくれるから寂しくないんだよ？」

「そんなわけが……いや、強いんだなレベッカは。俺なんかとは大違いだ」

「そんな事無いよ、お兄ちゃん。私には分からないけど、お兄ちゃんは強い人だと思うよ？」

「そうかな、そうだといいなあ。……なあ、レベツカ。後で俺の話しも聞いてもらっても良いか？」

「うん、いいよ」

「……よし！じゃあ行こうか。その前に両親のお墓に連れてつてくれ。挨拶だけさせて欲しい」

「うん！」

レベツカに案内されたのは村の南東部に位置する墓地であった。その手前側に存在する一つの墓地にレベツカは立ち止まり、指し示す様なジェスチャーをした。そこにはレベツカの両親であろう二人の名前が彫られており、埃一つ被っていないその姿は誰かがマメに掃除をしていることが伺えた。

花も何も持っていないので格好がつかないが、それでも手を合わせて冥福を祈る。

「さて、そろそろ行こうか」

「うん。じゃあねお父さん、お母さん」

別れを済ませたら森の中へと足を踏み入れる。

ちなみに既に俺は『名無しの南瓜』も装備して戦闘準備は万全だ。レベツカは簡素な造りの革鎧と俺が持たせたプレイヤー初期装備の帽子と村長の家から持ってきた杖という出で立ちだ。

「本当にそれで大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。奇襲さえ防げれば私が全部燃やしちゃうんだよ！」

案外冷静だな。聞けば今までにも何回か森に入った事はあるらしく、その際にモンスター討伐もこなしているらしい。

そもそもこの森は主と呼ばれるシャドウリザードが生息しているせいで他種族のモンスターがあまり生息していない。例外はエイプ系統のモンスターで、エルダーエイプが倒されては現れの繰り返して凄まじい繁殖力で森の一面を縄張りとしている。

この村の辺りはどちらかといえばシャドウリザードの縄張りの方に近く、エイプはあまり寄ってこない為、俺たちが先日倒したシャドウリザードの縄張りが占領されない限り少しの間は安全に狩が出来るらしい。それでもはぐれのモンスターとかがやって来るので間引きを依頼されているのだが。

「待った。前方に鹿発見。ホワイトカリブーだな」

「うわ、凄いなお兄ちゃん。よく見えるね」

「[鷹の目]の効果だな。遠くのものが見えやすくなって、動体視力も上がる」

『限界村落の村娘』のクリアの副産物としてレベルが大幅に上がったのでアーツポイントをいくつか使って「鷹の目」というアーツを取った。これは常時発動型のアーツで、軽戦士系統の代表的なアーツの一つだ。効果としては遠くのものが見えやすくなる望遠

機能と、動体視力の向上。パリイを主体とする俺のスタイルには有用だと思ったので取っておいた。まだポイントが残っているのでまた今度じっくり考えてから取ってみようと思っている。

ホワイトカリブーは高級食材として知られる鹿、正確に言えばトナカイだ。体表が白いので森の中ではとても目立つのだが、警戒心が強い上に逃げ足が速く、倒すのは容易では無い。ちなみにモンスターではなく普通の動物である。しかし安易に接近すると顔を蹴られてデスペナを食らう初心者もいると言うから笑い話ではない。

「じゃあホワイトカリブーに当たらないように小さな火球を飛ばしてくれ、出来れば俺がいる方角に逃げる様に。わかったか？」

「うん。わかった」

レベツカが頷いたので俺は慎重に横に回って木の上に登った。ナイフの光を反射させて合図を送ると、レベツカは注文通りに火球を放ち、驚いたホワイトカリブーは俺のいる木の下にまで走って逃げてくる。

丁度真下を通り過ぎた時に俺は飛び降りて、ホワイトカリブーの首を上小太刀で切り落とした。

すぐさま村から持ってきた肉用のマジックバッグに胴体と首を入れる。流石に自分のマジックバッグに動物の死体は入れたくないからな。

「凄いね！お兄ちゃん！すばーって感じただったよ！」

「レベツカこそ凄いな、魔法制御が完璧じゃないか！」

「えっへん。そうです、凄いです」

しばらく二人で互いを褒めあつた後は、一時間程回つて狩を続けた。

成果としてはホワイトカリブーが一匹とビッグボアというイノシシが一匹、普通の野うさぎが二匹、更にはぐれのキラーモンキーが一匹だった。ビッグボアは最初はモンスターカーかと思つたが、倒してもポリゴンにならなかつたので動物だとわかつた。レベツカに聞いたたら普通に食肉になるらしい。流石にキラーモンキーはレベツカを不要な危険に晒したく無かつたので一人で対峙したが、レベルも上がった今群れで出てくるならともかく、一匹なら問題なく対処できた。レアエンカウントエネミーなのにつくづく縁がある様だな。

マジックバッグが満杯になりつつなつた頃に、レベツカが不意に立ち止まつた。

「この先に見せたいものがあるの」

「この先にも？でも普通の森だけ……」

マップにも何も表示されていない。そもそも村からちよつとしか離れていないとはいへ普通にモンスタアが出てくる森の中にレベツカの祖先が代々守つてきたものがあるのか？

「ここは、私のずっと前の代の人たちが守ってきた場所。ストルタスの四地点に点在する場所の一つなんだって。その近くの村にお婆ちゃんとお爺ちゃんが逃げてきたのは偶然じゃ無くて選んだからって言ってたよ」

「どういう事だ？ こんがらがってきたぞ。村長は偶然あの集落に流れ着いたんじゃないやなくて、選んであそこに逃げ延びた？ このレベツカの見せたいものに関係しているのか？」

「それが、これ。手を繋いで、お兄ちゃん。じゃあないと入れないから」

「入れない？ それってどういう……」

「言い終わらないうちにレベツカは俺の手を引いて一歩踏み出し、そこには別世界が広がっていた。」

「言うなれば遺跡、だろうか。森の中に不釣り合いな巨大な遺跡。」

「……は」

「火の遺跡って言うんだって。私の一族、火の守人の一族がずっと守ってきた遺跡」

「火の遺跡……たしかに中央部に飾られている祠には綺麗な火が灯っているのが分かる。」

「これが、レベツカの見せたかったもの、か。」

「これは……凄いな。」

# # 1 4 灰は灰に、塵は塵に 第一項

人間国 ストルタス。

絢爛たる白亜の城とその城下……いや、城中町を王都とする大陸中央部に位置し、最大勢力を誇る国であるが、現在の煌びやかさとは裏腹にその歴史は血を血で洗う内戦と怨嗟の積み重ねである。

建国したのは現大陸に存在する五大国の中で二番目に古く、当初はその身体能力の低さから迫害されていた人間が四大魔法の加護を受け、ドラゴンから授かったという聖剣を持つ一人の勇者の元に集まり、困難の中ようやくたどり着いた安住の地である。

その勇者は安住の地をストルタスと名付け、初代国王となった。加護を受けた四大魔法の賢者達は四賢者と呼ばれ、とても重宝されたという。その四家は現在の公爵家となった。

しかし、長く平穏が続いた人間国では利権を求めて、内乱が起こる様になりつつあった。その頃には勇者の威光もすっかりと薄れ、聖剣はただの飾りになりつつあった。四賢者も既に賢者という名前の偉大さはすっかりと薄れ、権力を求める愚者と成り果てていた。そんな中、少数派の魔法と古からの研鑽と勤めを担っていた者たちはスト

ルタスの僻地へと争いを嫌い、逃れていった。その後勇者も四賢者も居ないストルタスは一気に内乱の時代へと突入して行くこととなる。

ーテナー スク王立教育学院中等部 歴史の教科書ー

~~~~~

少なくとも建築されてから500年は経とうかという巨大な遺跡。所々に植物が根や枝を伸ばしているが、それがかえって雄大きさを表している様に感じられる。全てが石で造られていて、中央に巨大な本殿らしきものが一つとそれを取り囲む様に四つの塔が建てられている。風化をしているところを見ると、ほとんど誰も寄り付かない場所なのだろう。

しかし、ここが重要な建造物だったのは確かである。こんな目立つものが森の中にあつたらいくらなんでも誰かが気づく。そうでなかったのはレベツカと手を繋がらないとこの遺跡が見えなかつたのに起因するのだろうか。しかし、こんなところを知っているレベツカ、それにその家系というのは何なのだろうか。

「あの中央の祠に祀られているのが火の大精霊様。火の守人の一族がずっと守ってきた精霊様なんだって」



「火の大精霊?」

たしかに中央部の本殿の頂上には祠が建てられていてそこには火が燃えているのが分かる。ちょうどオリンピックの聖火のようだ。

しかしその火は心なしが弱いように感じられる。そんな大精霊ともあろうものがあるのに弱々しい炎なのだろうか。

「うん。大精霊様はもう全然力が残って無いんだって、私が生まれるより前に信仰が途絶えて、力を維持できなくなっただってお爺ちゃんが言ってた」

精霊信仰?クオーレが信仰しているのはクララたち上級A Iじゃないのか?

「神さまとは違うのか?」

「ううん。大精霊様は神さまの僕しもべなんだって。神さまが私たちを見守るために遣わしたのが大精霊様、神さまが使命を与えて私たちのところを送り出したのがお兄ちゃんたち使徒プレイヤーだってお爺ちゃんが言ってた」

クララたちの僕……つまり、土着信仰みたいなものか。おそらく神さま、つまりA I信仰はこのアルカディア全体に広がる宗教で、精霊信仰はエターリア王都近郊、もしくはストルタス人独特の宗教ということだ。

「でもなんでレベッカの家系は火の守人って呼ばれてるんだ?レベッカが火魔法を使えるのと同関係あるのか?」

「うーんとね、なんか私のすつごく前のご先祖さまが偉い人だったんだって。確か、四賢者って呼ばれていたの。私のご先祖さまは火の賢者、火の大精霊様と契約して勇者様を助けたんだって」

「って事はレベツカは四賢者の子孫なのか。でもそれならどうしてこんなにこの遺跡は寂れてるんだ？もつと国民が押し寄せていてもおかしくは無いと思うんだが」

『そこから先は私が話しましょう』

「!？」

突如頭の中に直接響くような声が聞こえてくる。思わず上小太刀を抜いて構えるが、レベツカが驚いていないのを見て構えを解く。

「大丈夫だよお兄ちゃん、火の大精霊様の声。お兄ちゃんも大精霊様の声が聞こえるんだね」

『おそらくその兜のお陰でしょう。フルティア様の手製の品です、お陰で私の声を伝えられます』

フルティア、確か上級AIの一人だったな。装備管理AIだったか。

火の大精霊の声は中性的で男とも女とも取れる声だ。おそらく性別なんていうものは無いのだろう。

『すみませんがもつと近くまで寄ってもらえますか、私の力は弱まっていますこの祠から

出る事も出来なくなっているのです』

レベツカが頷いたので二人で階段を上って祠の前まで行く、やはり近くで見ても炎は弱々しい。

『では改めて挨拶を、私は火の大精霊と呼ばれているものです。あいにくと名乗る名前を持つていないのでお好きにお呼びください』

「では、大精霊と」

『ええ、構いませんよクララ様の加護持つ者よ。お名前はなんと?』

「ロータスとお呼びください」

『敬称など不要ですロータス。私はじき消えるもの、昔ならいざ知らず今は吹けば消えるような弱き存在です。それと、久しぶりですねレベツカ。火魔法を覚えたと伝えに来た時以来でしょうか』

「はい、大精霊様。あまり会いに来れず申し訳ありません」

『いいのです。人の営みが忙しいのは繁栄の証拠、私の望みです』

頭の中に声が響くたびに、目の前の炎が風も無いのに揺らめく。

大精霊の話には聞き流せない箇所があった、クララの加護と大精霊は言ったな。クリップの言っていたクララに気に入られているってやつか?それがクララの加護?でもステータスには何も書いていないし、実感も無い。強いて言えば『名無しの南瓜』を

貰ったのだが、あれは1000万人目の記念だ。あとはクララ時々俺を見ているという話か？しかしそれは加護と言えるのだろうか。

『そうそう、私がこんなにも力を失った理由でしたね。それは王家の意向の為です。ストルタス王家は我ら四大精霊の力を取り入れようとそれぞれの守人を襲撃しました。その一環として四大精霊の信仰を廃止したのです。それがおよそ50年程前の事でしょうか、守人の一族は我らを転移の魔法で遺跡ごと飛ばし、自分たちも散り散りになつて逃げました。それが先々代の巫女です』

「巫女、とはなんです………だ？」

『巫女は私の声を聞き、私の言葉を人々に伝える役目を負う者の事。基本的に直系の長女が継ぎます。故に守人の一族は女系家族なのです』

「じゃあ今代の巫女はレベツカなのか」

「えっへん」

いや、ドヤられても。凄いけどね。あと可愛い。

けど、そうか、だから村長はあんなことを言っていたのか。

『その代の巫女の活躍もあつて我らの力が奪われる事は無かったのですが、守人の一族には迷惑をかけました。それに、均衡が破れつつあります』

「均衡………とは？」

『地、水、火、風。それぞれを司る我ら四大精霊の均衡です。全員がもう限界に達しています。封印が破られるのも時間の問題です』

封印。嫌な単語だ。もちろんゲーマー的にはワクワクする単語だが、正直レベッカが関わっているのなら話は別だ。

『ロータス、レベッカ、気をつけなさい。そして出来ればこの地から逃げるのです。もうすぐこの地には災厄が現れます。私の力はもう及ばない』

災厄……そうか、繋がったぞ。やっぱり二つのユニーククエストは繋がっているのか恐らくこれは『村娘の願い』の方の関係だ。そして、災厄が訪れる、すなわち防御を固めろという事だろう。逃げろと大精霊は言っているが、レベッカの育った村は他に行くところがない者たちばかりが集まってできた村だ。逃げる場所なんてどこにも無い。だから守りを固めるしか無いんだ。だからこそ『限界村落を立て直せ』だ。モンスターを間引いて少しでも危険を減らし、大精霊の言う災厄に備えるために防衛設備を整える。それがこのクエストの目的なんだ。

厄介なのはいつその封印が解けるか分からないってところだ。大精霊ももう及ばないとは言っているが少なくともまだ警鐘を鳴らすほどの余力は残っているはずだ。ならば俺はあの村を守る為に全力を尽くしてやらなければならない。

「それはどういう事なんですか！大精霊様！村は、村はどうなるんですか?!」

『レベツカ、落ち着きなさい。私ではもうどうにもならないのです。だから、逃げなさいレベツカ、みなを連れて』

「出来ないです！村以外の場所なんか知らないし、あそこにはみんなのお墓があるのですー！」

『……分かりました。ではせめて私の加護を与えましょう。ロータス、貴方はこの子の、レベツカの大切なものを、そしてレベツカ自身を守る覚悟はありますか？』

覚悟か……言ってくれる。俺に妹を守る覚悟を聞くのか。

「……あります。今度こそは絶対に」

『よろしい。では私の最後の加護を与えましょう。手を出しなさい』

俺が手を前に差し出すと、火花が散って俺の右手の甲に飛び込んでくる。不思議と熱さは全く無く、ほのかな温もりが右手を包んだ。

『称号 火の大精霊の加護 を獲得しました』

『私の加護は火に対する耐性を与えます。フルティア様の防具の効果と相まって耐火性能はそれなりになっている筈です』

「という事は、災厄は火に関係しているのですね」

『ええ、私が封印しているのは反逆の炎です。地、水、風の大精霊もそれぞれの得意な属性の災厄を封印しています』

今度トト姉たちにも教えてあげないと。というかこの情報も共有しないと。流石に一人だと手に余りそうだ。

『良いですか二人とも、少なくともあと7日は保たせます。しかしそれ以降はどれくらい保つか私でも分かりません。逃げる気が無いのならせめて防御を固めなさい』

「わかった」

「はい、大精霊様」

『それと今までの謝辞を、ありがとうレベツカ。守人の一族と巫女がいたお陰で私はここまで生きることが出来た。大いなる流れに還つても私は貴女たちを見守っています』

「こちらこそ、ありがとうございます大精霊様」

『ふふ、礼など不要です。さあ、早く戻りなさい、私は少しでも封印が破られるのを遅らせる為に力を蓄えます。早くこの事を皆に伝えるのです』

そこまで言い切つてから頭の中に響いていた声は途切れた。

おそらく力を蓄える為に会話すら惜しいのだろう。

「……戻ろう、レベツカ。この事を伝えなきや」

「……うん。お兄ちゃん」

災厄の襲来まで残り7日

# #15 灰は灰に、塵は塵に 第二項

ロータス

「という訳なんだ」

クリップ

「成る程……」

ネオン

「火の守人の一族、大精霊、封印、災厄、ですか」

クリップ

「明らかに次のユニークを示してるよな」

ロータス

「そうなんだよ。封印が解けるまで少なくともあと7日。リアルの時間で言えばあと2日と8時間」

ネオン

「今週末の夕方、ですね」



クリップ

「その災厄ってやつが何なのかは詳しくは教えてくれなかったのか？」

ロータス

「分からないな。大精霊は災厄の事を反逆の炎って呼んでたけど」

ネオン

「やっぱり、火属性である事は確定なんですね」

ロータス

「多分な。レベッカも火の守人で巫女だし」

クリップ

「で、その災厄を食い止める為に必要なのが『限界村落を立て直せ』のユニーククエストだっっていうのが蓮世の推理か」

ロータス

「ああ、ログアウトする前に確認したら柵を作った事でちよつとゲージが溜まってたし」

ネオン

「今はレベッカちゃん達は何をしているんですか？」

ロータス

「付け焼き刃だろうけど、戦闘経験がある人が成人男性を集めて戦闘訓練しているのと、

戦えない人たちはサポートの為に色々作ってくれているよ」

クリップ

「色々作るって何を？ 精々柵とか塹壕を掘るとかじゃないの？」

ロータス

「いや、あそこの村は色んな所から追い出された人達が作った村だろう？ 中には研究を異端視されて追い出された研究者とかがいるんだ」

ネオン

「ああ、なるほど」

クリップ

「?..? どういうこと?..」

ロータス

「雑草に与えるとモンスター化するポーションとか、飲んだ人間のHPの最大値を1にする代わりに他の能力を上げるポーションとか、空気に触れると爆発するポーションとか、水に溶かすと爆発するポーションとか、振動を与えると爆発するポーションとか、作ってる人がいる」

クリップ

「それただの爆弾魔じゃね？ 追い出したの良い仕事じゃね？」

ロータス

「他にも究極の魔法を追い求めて都市一つ消滅させた大魔法使いとか、愛する人を蘇らせる為に転職条件が分からなかったネクロマンサーに転職した人とか、魔物に異常に好かれる体質の人とかいるぞ」

クリツプ

「なんでそんな奴らが普通の村人やってんだよ……」

ネオン

「す、凄いですね」

ロータス

「そーいや、トト姉は？さっきから会話に参加してないけど」

ネオン

「なんか、大学が忙しいらしいです。そろそろ終わる頃だと思っんですが」

トト

「やっど講義が終わったと思いきや、何やら楽しそうな話をしているじゃないか」

クリツプ

「噂をすれば、ってやつだな」

トト

「ログを見てみたところ確かにそれはユニーククエストの前兆だろうな。もしかしたらアルカナクエストの可能性もあるぞ」

ロータス

「アルカナ！」

クリップ

「クエスト！」

ネオン

「息びったりですね」

トト

「率直言ってキモいな」

クリップ

「グハッ」

トト

「まあ、それは置いておいて。大精霊が直接警告する災厄とやらは前に聞いた事がある」

ロータス

「マジでか」

トト

「ああ、《魔術師》の正位置 【複眼水龍 セトリア】 確かストルタスの北西の街リフューで発見、討伐されたらしいな」

トト

「つまり、大精霊の言う均衡は既に破られていたと言うことだ。ちなみに余分な情報かもしれないが、その時は村一つが壊滅する被害が出た挙句に、そのリフューの街も壊滅、討伐されたのは現れてから2日後だったらしい」

ロータス

「うへえ」

ネオン

「それ、私も聞いた事があります。確か討伐したのは克蘭最大手の『ザ・ロード』でしたよね？」

クリップ

「あー、あのいけ好かない連中な。でも確か克蘭リーダーが化け物みたいに強いんだっけか？」

トト

「そうだ。リーダーのサバ缶はプレイヤーの中でならトップ5には入る強さだな。セトリアの神秘防具はサバ缶が★★★分、発見者の……誰だったか忘れたが無名のプレイヤー

が★分の神秘防具を所有している筈だ」

トト

「うむ、話がズレたが私からも一つ忠告だ。私たちもちろん協力するが、万全を期すのならばレベルツカだけでもどこか別の町に逃がすべきだ。私としてもあんな幼い少女がゲームの中ではないえ殺されるのはしのびない」

ロータス

「それはわかっているが、多分聞き入れてくれないよ。レベルツカは村を守る気だからな」

トト

「そうか、ならば仕方がない。そういうクエストなのだろう。最悪、強制的に死ぬのかもしれない、覚悟はしておけ」

「覚悟、ねえ」

正直言つて疑問なのだ。

俺が知る限り、アルカディア・プロジェクトというゲームは最高の出来と言つて良い。ゲーム業界に革新をもたらしたのは間違いないし、世界中の人々が熱中するのも分かる。しかし、このゲームにおいてシナリオというものは有つて無いようなものだ。そんな強制負けイベントというものは配置されていないような気がする。

そもそも論になるが、このゲーム、最初からシナリオを作る気はあったのだろうか？  
メインクエスト？いやいや、誰がどう見てもこのゲームのメインはユニーククエストだ。もちろんメインクエストも大切だが、それではあの文言に反するのではないか？

『英雄よ、挑み給え、これは貴方へと贈る物語、貴方が作る物語、貴方の為の物語。そして、願わくば、貴方の旅路が光溢れるものでありますよう』

チュートリアルとキャラクターメイキングを終えた俺にクララがかけた言葉だ。アルカディア・プロジェクトの唯一のCMでアンナが言った言葉にそっくりだが、少しだけ違っている。

この言葉からして疑問なのだ。

英雄とは最初は俺たちプレイヤー全体の事を指すのだと思っていた。しかしどうも大精霊の話とクリップの話を考えると俺個人の事を指しているのだと思えてならない。

自意識過剰と思われるかもしれないが、これはトト姉とネオンにも聞いて確かめた事だ。アルカディア・プロジェクトの世界に送り出される際にクリップも含めて三人とも何かAIから言われていたが、その中に英雄という言葉は含まれていない。

『英雄よ、挑み給え、これは貴方へと贈る物語、貴方が作る物語、貴方の為の物語。そして、願わくば、アルカディアに光ある未来あれ』

そう、アンナの販促にも英雄という言葉が含まれているにも関わらずである。その上

クリップはアンナにチュートリアルとキャラクターメイキングをしてもらったのだ。もし、全員に対して同じ言葉が使われているのならアンナが英雄という言葉を使わないのはいささか不自然である。

ならば英雄とは何か？大精霊は俺の事をクララ様の加護持つ者と呼んだ。ステータス上にそんなものは無かった、クララにチュートリアルを手伝って貰っただけでそんな事を言われるのなら加護持つ者ではなく、アルカディアの世界観的にはクララ様の使徒と呼ばれなければならない。ならば、それが英雄なのでは無いだろうか？

しかしここで疑問が生じる。これはAIが、ひいてはゲームの運営側が勝手に特定の個人を依怙贖する。そんなことにならないだろうか？

こんな事が公になったらゲームの運営であるニトワイアは猛烈なバッシングを受けるだろう。はたしてそんな事をするのだろうか？

そう考えるとアルカディア・プロジェクトには不自然な部分が多くあることに気がつく。『名無しの南瓜』だっけそう。いくら1000万人目の記念といっても特定の個人に他では絶対に手に入らない装備を渡すか？ネタ装備ならまだしも外見があれといえ、普通に強いと言える性能だ。

神祕防具だっけそう。世界に44体しかないボスからドロップする一つだけの装備。どんなに多くても132個しか存在しないものを金を取ったゲームで配置する



か？それも少なくとも1000万人がプレイしたゲームだぞ？無くなったら暴動が起きてもしようがないと思うのだが。

そもそもなんでニトワイアはCMを流さない？必要ないほど売れているから？いやいや、CMを流したらもつと売れる事くらい子供でも分かる。突飛な発想だが、流せないのでは無いだろうか？

アルカディア・プロジェクトの開発者である、橋下司はセラフィム・ワールドの開発で一躍ゲーム業界でも名を馳せた。元はVRの技術者だったらしいが、趣味の一環で作っていたセラフィム・ワールドが大ヒットした事でゲーム開発者としても一流の人と知られるようになった。

しかしそんな博士はアルカディア・プロジェクトが発売される2年前に強盗に押入られて殺害されている。なら、その2年間何をしていたのだろうか？こうして発売されているので完成したのは間違いないが、開発者の欄は橋下博士の名前しか無い。既に殺された時には少なくとも9割程は完成していたと見るべきだろう。なら、何故2年待つ必要があった？

そこで考えたのが、ニトワイアはアルカディア・プロジェクトを運営などしていないのでは無いだろうかという事だ。ニトワイアはただ現実においてアルカディア・プロジェクトというソフトを販売しているだけで、実際に運営しているのは上級AIなので

は無いだろうか？だからこそ、あんなにAIが好き勝手しているのでは無いだろうか。  
「……なんて、考え過ぎか」

ゲームとはいえ決戦を前に気が高ぶっていたのかもな。発想が完全に飛躍していた。だつてそれを認めたら、クララ達は生きていうつて言つてるようなものじゃないか。

~~~~~

「じゃあ、行つてきまーす」

「おう、行つてらっしやい花蓮」

「うん。またねお兄」

ボタン、と扉を閉めて花蓮が高校へ行く。今日も俺は大学試験が終わつたので学校は休みだ。少なくともあと1週間は休み。それが終わつたら卒業式、春休みだ。

「さーて、ログインするかね」

あまり不摂生な生活をしていると花蓮に怒られるので朝早くからゲームをしないようにしているが、今の期間は別だ。早くログインして『限界村落を立て直せ』を進めなくては。

VR本体を起動したところで、扉を開く音。あれ？忘れ物かな？

「ごめん、お兄忘れ物って言うか、タブレットの充電切れてたからお兄の貸して欲しいんだけど」

「わかった。はい、これ」

「ありがとう。……それ、アルカディアなんとかって言うゲーム？」

「ああ、そうだけど。花蓮ってゲームに興味あったっけ？」

「ううん。まあお兄とか美夜ちゃんとかの話聞いてるからちよつとは興味あるけど」

「よかつたら今度やってみる？めちやくちやリアルで凄いぞ」

「へー。うん、じゃあ週末にでもやってみようかな。おっと、急がなきゃ、じゃねお兄」

「おう、気をつけろよ」

「はいー！」

ふっふっふっ、これは週末の楽しみが増えたな。

その頃にはユニーククエストにも一旦区切りがついてるだろうし。

じゃあ、花蓮にアルカディアの良さを見せるためにも頑張るとしますか。

# #16 灰は灰に、塵は塵に 第三項

「おいそこ！手を止めるな！その怠慢が俺たちの命を決めるかも知れねえんだ、妥協は許さんぞー！」

「薬草が足りないわ！ありったけを持ってきなさい！」

「へばつてる暇はねえぞ！そんな時間があれば一回でも多く素振りでもしてろ！」

「おかーさん！お芋取れたよー！」

「ベッドの用意を！何？足らない？だったら毛布だけでも持ってきて！」

「石を持つてこい！積んで柵を補強するぞ！」

「塹壕の位置が違うぞ！設計者の言う通りに作り直せ！」

「鹿と兎が取れたぞ！干し肉にするから吊るしとけ！」

「手の空いている女性はこっちへ！包帯の巻き方だけでも覚えてもらおうわ！」

昨日までののどかな生活を送る村が嘘のように喧騒に包まれている。

あちこちから指示と怒号が飛び交い、生き残る為に全力を尽くしている。

そんな中、ポツンと佇む四人組である。

「いやいや、ここにどうやって割り込めって言うんだよ」

「村の事をよく知らない私達では役に立たなさそうだな」

ロータスら『鳶の宮殿』のメンバーはロータスの呼びかけにより、集まったは良いものの村の熱量に押されて、端っこで何をするでもなく立っていることしかできないでいた。

「あつ、お兄ちゃん達！おじいちゃん！お兄ちゃん達が来たよ！」

と、そこへレベツカ<sup>救世主</sup>現る。村長を連れてこちらに向かつてくるのが見えた。

「ああ、よく来て下さいました。正直言つてスライムの手を借りたいほどの忙しさです。プレイヤーの方々がいらつしやるのならは大変心強いです」

「ええ、ありがとうございます。それで、私達は何をすれば？」

「今からまとめ役の者たちを集めて会議を開きます。あなた方には戦闘の際に主力として戦つて頂く事になりそうです。そこで、ほとんど戦闘経験の無い私達<sup>クァエストル</sup>に探求者としての、ひいてはプレイヤーとしての意見を伺いたいです」

「成る程、ではそのように。私達四人ともで良いのですか？」

「はい、もちろんです。しかし、本当にいいのですか？我々が言うのもなんですが、この戦い勝てる見込みは殆どありません。そんな戦いに無関係の方々を巻き込んでしまうのは……」

当然の懸念だろう。しかし、忘れてはならないのは俺たちはプレイヤーだということ

である。代表して受け答えをしているトト姉も同じ思考回路、というかトト姉が一番この中ではそれに近い。

「何を仰います、ご老体。我々はプレイヤーです。それ自体が報酬イベントのようなものでしょう」

そう。こんなイベントを流す方がゲームーとしては失格だ。トト姉ほどの廃人とまでは行かなくとも俺たち三人もまあゲームー歴が長いし、例えば素人だろうとこんな大規模イベント逃す訳が無い。

その答えを聞いて村長はきよんとしたものの、直ぐにプレイヤーという生物の習性を思い出したのか苦笑して、俺たちを案内してくれたのだった。

~~~~~

時は少し遡る。アルカディアでの三日前、現実で言えば24時間前に俺とレベツカは火の大精霊の忠告を聞き、名も無き村へと帰って来た。そこでのレベツカの肩書き、火の守人の巫女というものは絶大な効力を持つものらしく、村は大混乱に陥った。しかしそれは一時のもので年配者の一喝で直ぐに収まった。その後は詳しい話を俺とレベツカで主要な人物に話して防衛計画を練ることとなった。一応避難を提案したのだが、村

人全員が徹底抗戦を訴えたのであえなく断念した。

防衛計画の主力となるのが俺たちプレイヤー、というより蔦の宮殿のメンバーになることが決定するまでにはかなりの時間を要した。俺たちの実力を疑う者もいたし、自分達の問題は自分達だけで解決したい者もいた。しかし、最も多かった意見は人数が少ないので不可能だという意見だった。それについては俺も同意見でその為災厄に関しては俺たちで、その他の災厄に追われて出てくるであろうモンスターに関しては村の人達で対応してもらうことになった。

その話し合いが終わった後、俺は直ぐにログアウトして蔦の宮殿のメンバーに連絡直ぐに承諾をもらい久し振りに王都エターリアに迎えに行つて、先の場面に戻るといふところである。

「ーというのが今までの詳しい経緯です」

「成る程、事情はわかった。プレイヤーに主力を、村人に周辺の敵をという配置は間違っていないし、我々にとつてもその方が良い」

トト姉が代表として答える。一応概略は伝えてあるが、詳しく説明するに越した事はない。

「して、不躰な質問なのは分かっておりますが、本当に我々と共に戦つて貰えるので？あなた方には何のメリットも無いのでは？」

会議に参加している一人がそう発言する。最もな質問であるが、プレイヤーにそれを聞くのは間違っている。

「我々にとつてはこれ自体が報酬です。我々にこの世界での死の概念が無い以上、スリルを味わう事自体が我々の楽しみ、プレイヤーとはそういう狂った人種だと聞いた事は無いですか？」

おお、引いてる引いてる。そりやそうだよな、クオーレの人達からしたらプレイヤーはただの狂人だ。死が確定している戦場に嬉々として参戦し、無謀な冒険を繰り返す俺たちプレイヤーはさぞ狂って見える事だろう。人の多い首都や大都市ではプレイヤーはそういうものとして認識されているらしいが、ここみたいにプレイヤーとの交流がほとんどない所だと奇異に映ること間違いなしだ。まあ、村長は前に都市に住んでいたこともあって知っていたらしいが。

「この状況を鑑みるに、現在の防衛設備の状況からまだまだ改良の余地はあると思います。今は大体目標の半分くらいですね」

これは俺のクエスト情報から考えて正確な数字だろう。

現在の『限界村落を立て直せ』のクエスト進行状況は53%。三日で半分以上終わっているというのは中々に順調だ。残り時間の目安は約四日、出来る限り引き伸ばして欲しい所だが、そこは俺たちには関与出来ないので祈るしか無い。



「みなさんには災厄が訪れる前に出来る限りの事をしていただいて、俺たちはそれまでに少しでも周辺のモンスターを減らす事に専念したいと思います。そうすれば俺たちも強くなって一石二鳥ですから」

その言葉に会議に参加していた全員が頷くのを見て、取り敢えず今日の会議はお開きとなった。

「あー、肩凝った。やっぱああいう堅苦しい雰囲気嫌いだわ」

「はは、大学生になればそういったことも言ってもらえんぞ。就活という言葉が迫ってくるからな」

「あー、やつぱり？ トト姉でもナーバスになったりするの？」

「そりゃあなる。先輩を見てるとな、ノイローゼみたいになってる人も居るから」  
「うわ」

そんな話をしながら俺たちには与えられた一軒家に向けて歩く。クリップとネオンにはそこで待っていて貰っているののでそこでプレイヤーとしての作戦会議だ。

「ただいまー」

「おう、お帰り。どうだった？」

「ん、順調だよ。大体希望通り」

「良かった、です」

プレイヤーとしては災厄、恐らくは強力なモンスターのドロップを狙いたいからな。そこに注力したい。

「で？そっちはどうだった？」

「いやー、こっちは微妙。だーれも興味なしって感じ」

クリップとネオンは何もしていなかったのかというところでも無く、二人には掲示板で協力を呼びかけてもらっていた。アルカディア・プロジェクトにはゲーム内に存在する公式の掲示板と現実のネットに存在する非公式の掲示板の二つがあり、二人で手分けして協力を呼びかけて貰っていたのだ。

「いやー、時期が悪かったね。丁度ストルタスでは今大氾濫スタンピードの時期だからみんなそっちにいつちやっってる。たった四人の小規模クランの不確かな情報なんて見向きもされなかったぜ」

「私の方もそんな感じ、です。大氾濫の方が確実に稼げます、から」

大氾濫とはアルカディアで一定期間で繰り返し返されるモンスターの大量繁殖時期の事である。モンスターが群れをなして現れる事が多く、人的被害、農作被害問わず多くのクエストが探求者協会クァエシトールに持ち込まれるのでプレイヤーにとっては書き入れ時なのだ。プレイヤーによつては時期に合わせて国を跨ぐ人達も居るらしい。

「となると、プレイヤーの戦力は私たちだけ。か」

まあ、想定通りではあるがやっぱり村人達の安全性を考えるともう一クランくらいは欲しかった所だ。

「まあ、ぐちぐち言っていてもしようがない。やるべき事をやるだけやるしかあるまい」

トト姉のその言葉でお開きとなり、俺たちはレベリングと間引きを兼ねてモンスターの討伐へと出かけた。

~~~~~

そして六日目の夜。忠告の日まであと一日というところで『限界村落を立て直せ』のクエスト進行状況が100%に到達した。

村では村人全員が集まって大宴会となっている。やる事をやりきったお祝いに、明日からの戦いに備えるために、もう会えないかもしれない家族最後になるかもしれない楽しい思い出を作るために。

今日から俺たちは災厄の襲来に備えて、ずっとログインしっぱなしとなる。幸い俺とトト姉、クリップは春休み、ネオンも終業式で時間の心配は無い。

今は連続ログイン制限がかかりそうなので俺以外のメンバーはログアウトしている。

俺も制限がかかりそうではあるが一人は残らないと中の状況がわからないので留守番である。

一人中心から少し離れた所で昨日狩ってきた鹿肉を頬張っているとレベッカがやって来るのが見えた。

「どうした？レベッカ。村の人達と一緒にいなくていいのか？」

「うん、いいの。お兄ちゃんと一緒に居たいから」

「そっか」

二人でぼーっと焚き火を見つめる時間が過ぎる。パチパチという木の弾ける音が村の喧騒を遠くへと押しやる。

「なあレベッカ、前に言った俺の話。聞いてくれるか？」

レベッカと初めての狩にいったときの約束である。すっかり遅くなったが、話しておきたい。

「うん。いいよ」

他人にちゃんと話すのは初めてだ。鳶の宮殿のメンバーにも話した事はない。

「……俺には妹が居るんだ。レベッカじゃない、本当の血の繋がった妹」

もう、何年も繰り返し、繰り返し同じ夢を見る。その夢を見る日は決まって雨の降っている夜で、台風の日には絶対だ。

俺が小学六年の九月。その日は日本始まつて以来最大勢力の台風が上陸するというニュースで持ちきりだった。雨が打ち付け、雷が鳴り響くそんな中、花蓮は出掛けると言つて聞かなかつた。台風だから止めようと言つても絶対に行くと言ひ、最後には俺が折れた。

カツパを着込み準備を万全にして花蓮は出掛けた。ニュースではどこかの川が氾濫したかどうか、海岸に大波が押し寄せているだとか、土砂崩れで道が塞がれて孤立状態だとか流れている。そんなニュースは毎年見えて、でも俺には関係の無いどこか遠くの話で、そんな事態に会うなんて考えた事もなかつた。その日までは。

午後3時、近くの大病院から家に電話がかかつてきた。花蓮が手術をすると、重症だと、両親は居ないのかと、矢継ぎ早に色々な事を言われて俺はパニックになった、花蓮が手術？死んでしまうかもしれない。そんな事がずつと俺の頭を駆け巡っていた。結局俺は両親が帰つて来るまでずっと電話の前で呆然としていたらしい、微動だにせずただ、ひたすらに。その時のことは、よく覚えていない。

花蓮は一命を取り留めた。どうやら台風の強風で街中の街路樹が倒れたらしい。そんなところに運悪く通りかかったのが花蓮で、下敷きになったとの事だ。運が良かったのは下敷きになったのは足だけだったという事、死ぬような事態にはならなかつたが以来花蓮は殆どの運動機能を失つた。その後のリハビリで日常生活は問題なく送れるま

でに回復したが、走る事は出来ず、スポーツなんて夢のまた夢だった。

今でも俺は考える、あの時俺がもつと強く引き留めておけば、そうじゃなくなつて俺が一緒に行つていれば花蓮はそんな怪我を負う事は無かつたんじゃないのかと。

以来、俺は花蓮に過保護になつた。もう二度とあんな目に合わせないように、次こそは守れるように。

「……これで終わりだ。ごめんなこんな話に付き合わせて。それともう一つ、ごめんなレベツカ。俺は多分レベツカを花蓮に重ねてたんだと思う。ただの自己満足なものにな」  
あの頃の花蓮くらしいの女の子を見ると今でも胸が締め付けられる。レベツカも、きつとそうなんだろう。

「それは違うよ、お兄ちゃん。私は私で花蓮ちゃんは花蓮ちゃんだよ？ちゃんとお兄ちゃんは私を見てくれてる」

「でも……」

「大丈夫、私はちゃんと分かつてるよ。お兄ちゃんは優しいから今でもそんな風に思うのかも知れないけど、お兄ちゃんの思いがどうであろうと、私の今まではちゃんと私の一部だよ」

「レベツカ……」

「だから、お兄ちゃん。私には分かつたなんて言えないけど今度花蓮ちゃんと話したら

いいんじゃない？二人ともまだ生きていて、繋がっているなら、きつと大丈夫」  
「きつと大丈夫……」

向日葵のようなその笑顔を見ていると不思議とそう思えて来るから不思議だ。

「だから前を向いて歩こう。明日はきつと今日より良い日になるよ」

「そうか、そうだな。ありがとうレベツカ、楽になったよ」

「えへへ、うん！」

さあ、鳶の宮殿のみんなが帰って来た。俺もログアウトしてログイン制限に引っつかからないようにしなければ。

だが、相応にして災厄とはそういった時にやって来るものである。

何かが弾け飛んだような爆音が衝撃波となって村中を蹂躪する。見れば遺跡のあつた方角から火柱が立ち昇っている。日付は忠告の日の午前0時1分を指していた。

『ユニーククエスト『限界村落を立て直せ』をクリアしました』

『称号「防衛巧者」を獲得しました』

『称号「指揮者の卵」を獲得しました』

『称号「知恵袋」を獲得しました』

『ユニーククエストが進行しました』

『ユニーククエスト『火の災厄』が発生しました』

『ユニーククエスト『限界村落の村娘』の特殊条件を達成しています』

『特殊称号『村娘の義兄』を獲得しています』

『称号『火の大精霊の祝福』を獲得しています』

『特殊状態『村娘の英雄』です』

『四種の特殊条件全ての獲得を確認しました。ユニーククエスト『火の災厄』は破棄されます』

『アルカナクエスト『反逆ナリシ愚者ノ篝火』が発生しました』

『アルカディアストーリー『名も無き寒村より愛を込めて』最終フェーズです』



『プレイヤー名ロータスにアルカディア・プロジェクトを発令します』

# #17 灰は灰に、塵は塵に 第四項

・アルカナクエスト『反逆ナリシ愚者ノ篝火』

発生者 ロータス

クリア条件 《愚者》の正位置「反逆炎魔エルドウィーク」の討伐

推奨レベル ー

参加人数 4/∞

おそらく時を同じくして王都の近くで大氾濫が起こったのだろう。西の空を時折魔法のものとと思われる光が飛んでいるが、それらも全て目の前の光景に押し潰されている。遺跡のあったであろう場所には都市一つ飲み込みそうな火柱が夜空を真昼のように染め上げていた。

「……嘘だろ」

火柱が消えるとそこに立っていたのは全長5mはあろうかという巨人であった。いや、人ではないのだろう。その漆黒の皮膚は所々が燃えており、頭部は人間の感覚で言



「つーみんなぼーつとしない！ロータスが先陣を切った、援護！」

自身も思わず呆然としてしまった事を棚上げしてパーティーメンバーに指示を出す、指示を聞いてネオンとクリップも動き出した。合わせて自分もロータスの盾となるべく動き出す。

火柱の中から現れたのは想像を超える異形であった。私が戦った事のあるリュージットとは全く違う、しかしその脅威は変わらない暴力の化身。

エルドワークはロータスに向けて手のひらから一人飲み込む大きさの火球を何度も放つが、ロータスは全て避けるか受け流している。

正直あいつにタンクが必要かと言われれば無いと答えるだろう。私は克蘭リーダーとして、そして友人としてロータスの、蓮也の技量を信頼している。

しかし、ロータスはそのビルドの特性上一撃が致命傷になり得る。そしてパリイを主体とする先頭方法は質量攻撃に弱い。だからこそ、盾が必要なのだ。

(全く……リーダーに尻拭いをさせるとは、人使いの荒い事！)

しかし、トトを含めたロータス以外の蔦の宮殿のメンバーはこの戦いの主役はロータスに譲ると決めていた。元々はロータスのユニーククエストから派生したクエストであるし、それよりレベッカの存在が大きい。

南響子、葛城美夜、榎本和樹、そして九条蓮也はもう5年にもなる付き合い

である。『セラフイム・ワールド』で偶々出会って意気投合しただけの付き合いであるが、その付き合いは現実にも影響を及ぼし、今では互いに家に招く程の仲である。正直ゲーマーとはいえ女性なので直接会うのは怖かったのだが、蓮也も和樹も良い奴であつた。美夜が女性だつたのと、全員年が近かつたのも大きい。

そんな中、蓮也の家に招かれる事もあり、妹である花蓮との交流ももちろんあつた。特に美夜は一つしか年が合わない事もあり、とても仲良くなつていた。そして蓮也は花蓮と自分の境遇を私たちだけに話してくれた、花蓮ちゃんはその時居なかつたが、わざと離れさせたのだろう。

正直同情を禁じ得なかつたし、あんなに妹を溺愛する理由が分かつたのも良かった。女性プレイヤーが困っていたら助けずにいられないのはそういう事も関係しているのだろう。

そんな時に会つたのがレベツカである。レベツカの事を花蓮と重ねて見ているのは直ぐに分かつた、だからこそその危うさを見て何回か注意したし、それでも止まらなかつたので尻拭いをする事に決めた。そんな事を決めたのは自分一人では無かつたらしく、ネオンとクリップも同じくだつた様だ。

だからこそ、ロータスの物語をバッドエンドにする訳にはいかないのだ。「行くぞラルヴァー！ロータスを援護する！」

熱が肌を焦がす、光が目を焼く、迫り来る炎を受け流すべく無我夢中に二刀を振るう。  
(ああ、この感覚だ)

絶え間なく迫り来る攻撃を紙一重で受け流す、セラフイム・ワールドから続ける狂人の戦闘法。

その動きを俺は説明する事は出来ない。セラフイム・ワールドの時はアーツの補助があった、しかしいつのまにか体に染み付いていた。どこをどう動かせば軌道がどう変わるか、感覚が覚えている。

そして幾度目かの火球を受け流すと、目の前の魔人が醜悪な顔を更に歪めた。それは、笑みと言えなくもないような顔であった。

『見事ナリ、貴様、我ヲ恐レヌトハ、プレイヤードナ?』

意外にも流暢な日本語で語りかけてきた。いや、アルカディア・プロジェクトにも自動翻訳システムが導入されている以上、本当に日本語を喋っているのかは分からないが。

『ソレニ、ドウヤラ貴様クララノ加護持チカ』

「……どういう意味だ。アルカナともあろう奴が管理AIを呼び捨てにしているのか？」

『管理AI？管理AIダト？笑ワセル、アイツラガソナ小サナ存在ダト思ツテイルノカ？イヤ、思ワセテイルノカ』

何だと？さつきからこいつは何を言っている？

クララの事を知っているモンスター？そんな事がゲームとして成り立っているのか。これはゲームとしての仕様か？いや、何かが違う。

「お前は、何を知っている？この世界の何を」

その質問をした時、エルドゥークの纏う雰囲気が変わった。今までののはお遊びだったのだと言う様なそんな苛烈な雰囲気。

『貴様ヲ、プレイヤーノ知ラナイ過去ヲ。アルカディアノ本質ヲ』

そこまで話した瞬間、エルドゥークの体に白いエフェクトが掛かる。すると途端にエルドゥークの動きが鈍った。

『ムツ、話シ過ギタカ。忌々シイ神秘ノ鎖メ。見テイルノダロウ、ドミニクス。我が使命ヲ果タソウ、神秘ノ鎖ヲ解ケ』

するとエルドゥークの周りを取り囲んでいた白いエフェクト、エルドゥークの言う神秘ノ鎖が無くなった。

『デハ、試練ヲ与エヨウ。我が名ハ、エルドゥーク。《愚者》ノ神秘ヲ司リ、反逆炎魔ノ称号ヲ持ツ者ナリ!』

エルドゥークが宣言を終えると同時に左右の地面から火柱が立ち上がり、おもむろに手を差し入れると火柱が収縮し、大剣に変わった。

俺の身長の3倍はあろうかという大剣の二刀流。おもしろい、やってやろうじやないか。

「ごやが」

『尋常ニ』

『勝負!』

溶岩を濃縮した大剣が俺の体を焼き尽くさんと迫る。俺の耐久だと受けるのは絶対に不可能、かと言って避けるのも無理、ならば馬鹿の一つ覚えしかあるまい。

迫り来るは圧倒的な死の概念、しかしてそれは俺の真横の地面を爆散させるに過ぎない。

『ヤハリ面白イ!我が愛剣ヲ受ケ流スカ!』

エルドゥークの扱う溶岩の大剣はやはり思った通り質量はあまり無いらしい。その熱量があれば重さはいらないからだろう。そもそも土が混ざった溶岩だとは言え、炎に質量がある方がおかしいのだが。



アルカディア・プロジェクトに蘇生アイテムは一応存在するが、俺たちでは到底手の出ない金額である以上、蘇生魔法にかけるしか無い。蘇生魔法は神官系統のジョブの上位職が覚える魔法だが、ネオンはまだ覚えていない。故にこの戦闘で死んだら絶対にデスペナルティは避けられないということだ。

アルカディア・プロジェクトのデスペナルティは現実の時間で24時間のログイン制限とユニーク装備と現在装備中の装備以外からのランダムなアイテムロストである。今回キツイのは前者のペナルティで現実での24時間はアルカディアでの72時間である。それだけの時間があればエルドウィークはこの村はおろか、王都までその火の手を伸ばすだろう。レベッカだって生き残れない。それだけは阻止しなくてはならない。

というより、デスペナルティがログイン制限なのはレイドコンテンツのゾンビアタックの禁止が主な理由であるというのがもっぱらの噂である。発見者、MVP、ラストアタックに得点があるレイドコンテンツでゾンビアタックを解禁したら意味が無いからだろう。

しかし、である。このアルカディア・プロジェクトというゲームの設定は俺のプレイスタイルによく合っている。それが、固有武器固有というコンテンツである。

プレイヤーに最初から与えられる固有武器固有はプレイヤー自身の成長と共に強化されていく。この武器がプレイヤー全てに共通してもつ特性は不壊である。アルカディア

において固有装備は決して壊れる事が無い。そしてその特性は武器の耐久値をゴリゴリ削る俺のプレイスタイルにおいて強烈なアドバンテージとなるのだ。

更にユニーククエストの最終章に挑戦するにあたって俺のLvもシャドウリザードと戦った頃とは比べものにならなくなっている。まあ、それでもLv53が限度だったが。しかし、そこまで上げれば自ずと相棒も期待に応えてくれる事だろう。

小太刀、上小太刀ときてここからがようやく固有武器だとトト姉は言った。

固有武器 第三世代 『灼火刀 種火』

性能は上小太刀の時とは比べものにならない。『名無しの南瓜』と『火の大精霊の祝福』の影響か火属性に寄った小太刀となっている。

受け流した反動でエルドウークの足元に接近して人間で言う健の辺りを切りつける。

エルドウークはものともせずには踏みつけようと足を叩きつける。流石に受け流すのは無理なので「クイックムーブ」と「ドリフトステップ」ですぐさま離脱すると思わず笑みが零れた。やっぱりこのヒリヒリした感覚は良い。

## #18 灰は灰に、塵は塵に 第五項

俺一人など一振りで数十人殺せるような灼熱が迫る。

1フレームでもタイミングがズレたり、手元が狂えばそれで俺のHPバーはゼロまで削れるだろう。それで無くても、『名無しの南瓜』と『火の大精霊の祝福』の耐熱効果が無ければ火傷の状態異常、そうでなくても熱気の余波でダメージを食らいそうだ。

「クイックムーブ」「モーメントシフト」

一時的に自分のAGIを倍加させる「クイックムーブ」、体感時間を引き延ばす「モーメントシフト」。先ずは攻撃をきちんと見極める。

「テールウインド」「遊撃の妙技」

モーションの動作速度を上げる「テールウインド」、アーツのクールタイムを5秒減らす「遊撃の妙技」。避けられる攻撃は全て避け、避けられないものはパリイして受け流す。

「ドリフトステップ」「ダブルステップ」

曲がるステップモーションである「ドリフトステップ」、ステップモーションを二回連続で使う「ダブルステップ」。攻撃後の隙が出来たらステップで一気に懐に潜り込む。

「エアジャンプ」「イリユージュオン」「クロスカウンター」

空中ジャンプをする「エアジャンプ」、次に使うアーツを二連続判定にする「イリユージュオン」、パリイを成功させた時に自動でカウンターを繰り出す「クロスカウンター」。通常では届かない位置にある頭を目掛けて、エアジャンプを併用して飛ぶ、「イリユージュオン」の効果で二連撃となった「クロスカウンター」を叩き込む。

俺が現在使用できるアーツのほぼ全てを併用してようやく一発、効いている様子は殆ど無い。

『グツ、小賢シイ。「噴煙」』

「エルドウーク」が溶岩剣を地面に突き立てると、「エルドウーク」を中心に地面から高熱のガスが勢いよく噴出した。

(それはマズイ!)

俺が最も苦手とするのは広範囲に及ぶ大質量の攻撃だが、それと同じくらい苦手なのがこういった逆に質量の無い攻撃だ。パリイ出来ないということは俺のスタイルでは致命的なのだ。

じゃあ辞めろよって話だが、俺は他に出来ないのだからしょうがない。

「パリア!」

飲み込まれると思ったその直前、光の膜が俺を包んだ。ガスは膜を破る事が出来ず、

俺は何とか地面に着地して体制を立て直す。

「ありがとうネオン、助かった」

「いえ、それが私の役割です。それより、一旦下がって、細かいダメージが蓄積してます」

「いや、まだイケる。「遊撃の妙技」」

「遊撃の妙技」のクールタイムが<sup>再使用時間</sup>終わったので直ぐに使う。

軽戦士系統のジョブは高いDEXとAGIも魅力だが、最も魅力的なのはこのクールタイム減少系のアーツが多い事である。アーツを使って前線を跳ね回り、攪乱と遊撃をこなすタイプのジョブだ。

「わかりました。じゃあせめてこれを、<sup>リジエネーション</sup>自動回復のポジションとAGIアップのポジションです。村に錬金術師の職業の<sup>ジョブ</sup>クォーレの方が居たのは幸いですね」

「やけに、あつさり引き下がったな」

「ロータスさんが言っても聞かないのはいつもの事なので、セラフの時から慣れました」  
ちよつと頬を膨らませながらそんなことを言う。ネオンが拗ねている時のサインだ。

「それに、トト姉さんとクリップさんもいるので大丈夫です」

ネオンのその言葉とものすごい風が吹き荒れたのはほぼ同時だった。

「――爆ぜろ「アトモスファイア」」

小声で詠唱していたのだろう、クリップが杖を掲げると「エルドワーク」の目の前の空気が凄まじい勢いだ膨張し、「エルドワーク」は大きく仰け反った。

「今使える最大威力の、しかも完全詠唱の魔法で仰け反っただけかよ、自信無くすわー」  
「まあ、そのおかげで私がこうして一撃入れられる訳だが？」「狼爪・一撃」

「エルドワーク」の腹部に大きな三つの裂傷が刻まれる。その傷自体は溶岩が覆い隠してしまっただけのもの、初めて「エルドワーク」が苦痛に喘いだ。

「アトモスファイア」は風属性魔法の第五階梯に分類される魔法である。階梯とは魔法の難易度を示すもので、全部で一から十までである。数が増えれば増えるほど難易度は上がる。

「アトモスファイア」は圧縮した大気を対象の目の前に出現させる魔法である。すぐさまそれは膨張し、即席の空気爆弾となる訳だ。

「狼爪・一撃」は剣の周りに魔力で出来た刃を作り出すアーツである。  
「大丈夫、勝てますよ。ロータスさん」

「そうだな、大丈夫だ」

「何をぼさつとしている！二人とも、きっちり自分の役割をこなせ！」

「了解、リーダー」

さあ、仕切り直しだ。

~~~~~

戦闘開始からおよそ、20分。状況は俺たちの有利で進んでいた。

……のは、さつきまでだ。

俺がひたすらパリイで受けて、クリップが怯ませて、トト姉がダメージを与え、ネオンが補助をする。理想的な四人パーティの構成で、順調に攻略をしていた。しかし、どうやらそのまま神秘を倒させるほどこの世界は優しくはなかったらしい。

『「溶岩波」』

「しまっ、全体攻撃」

「エルドワーク」が剣を突き立てた所から、地面が溶岩に変わり、こちらへと侵食してくる。

俺はギリギリ高いAGIのお陰で回避出来たが、攻撃の直前だったトト姉と詠唱途中だったクリップが飲まれた。

デスペナが頭をよぎる、ここで二人に抜けられると攻略は絶望的だ。

「……ああっ！熱い！」

「トト姉！無事だったか」

「無事なものか、ラルヴァ以外の防具が全損した。それにHPも殆ど残っていない。少し下がらないとすぐデスペナだ」

少しして、右側で物凄い勢いで、溶岩から上空へ何か飛び出してくるのが見えた。

「熱っ！やべえ、死ぬかと思った」

「クリップさんも！」

「ウインドショット」を咄嗟に無詠唱で下に打つてなかったら、死んでたぜ」

しかし、二人が戦列に復帰するのには時間がかかるのは明白だ。

「それより、マズイぞロータス。溶岩が村の方へ向かっている」

「っ！」

見れば溶岩の先端はすでに村の近くへと迫っている。

『「溶岩竜」』

【エルドワーク】がもう片方の剣を溶岩に突き立てる。すると溶岩が波打ち、小さな竜を象ったモンスターが出現し始めた。

「おいおい、まじかよ」

視界はすぐに敵対モンスターを表す表示で埋め尽くされる。3割程は俺たちの方に向かっているが、7割は村の方へと向かっている。溶岩はそれで無くなったが、代わりに敵対モンスターが増えては意味が無い。



一番近くにいた溶岩竜を斬りつけると、一撃で溶けて無くなった。

「脆い……けど」

「多すぎるな」

「しかし、何故コイツらは村を襲う？ただ単に人を襲う様になっているだけか？いや、待てよ……ロータス、確か「エルドワーク」は火の遺跡という所に封印されていたんだよな？」

「ああ、レベッカの一族が守っていた……まさか」

待て、待て、待て。その推測は、ダメだ。

気が付いたら俺は村の方角へと走り始めていた。

~~~~~

「おい！ちよつと待てよロータス！」

「いや、いい。むしろ、そうしてくれと言うところだった」

「はあ？何でだよトト姉。今この状況でロータスが抜けたら……」

「コイツらの狙いはレベッカだ。正確に言えば火の守人の一族だな。これは、あいつの物語だ。それに……」

正直、言うべきか迷っていた。だが、もうどうしようもない以上、言っても構わんだろう。

「それに……何ですか？」

【エルドワーク】は動かない。おそらくこいつらを殲滅しない限り、動かないだろう。体感的には既に奴の体力は半分ほど削った筈だ。この隙に体力の回復を図るつもりだろう。

「時間切れだ。」

「!!」

「さあ、ロータスが帰ってくる前にコイツらを片付けるぞ。最高の状態でバトンを渡してやるんだ」

帰って、来るよな？ロータス。

~~~~~

ついに、その時が来てしまった。

『ログインより、2時間57分が経過しました。連続ログイン制限まで残り3分です』  
視界の端でそんなテキストが警告を発する。

しかしここでログアウトする訳にはいかない。

村は既に地獄絵図だった。家屋は殆どが焼け落ち、村人は溶岩竜に焼き尽くされる。それを俺は……見て見ぬ振りをしながらひたすら走る。

耳障りな鳴き声を上げながら俺を殺そうと溶岩竜が迫る。それを乱雑に振った刀で殺しながら走り続ける。

「うるさいな」

『ログインより、2時間58分が経過しました。連続ログイン制限まで残り2分です』

どこだ、どこにいる。

『ログインより、2時間59分が経過しました。連続ログイン制限まで残り1分です』

「うるさい、うるさい、うるさい！」

溶岩竜を斬り伏せながらひたすらに走る。

途中で何人かの村人を助けた、しかしそんなことに構っている余裕は無い。助けたくて助けた訳じゃ無い。ただ単に通り道にいただけだ。だから後は勝手にやってくれ。

『連続ログイン制限まで残り30秒です』

西には居なかった、東にも居なかった、北にも居なかった。

まさか、もう……そんな思考が頭をよぎったが、振り払って走る。

そして、それを見た。

「レベツカああ!!」

「ーっ! お兄ちゃん!」

後ろに何人かの子供を庇いながら、魔法で必死に抵抗をする少女の姿を。レベツカの使う火の魔法はどうやら溶岩竜には効きが悪いらしく、一撃で倒すとはいかないように、何発も打ち込んでいた。

そのせいで、既にレベツカ達は囲まれている。

『連続ログイン制限まで残り20秒です』

ついに一人が溶岩竜に食われた、それをきっかけに均衡は崩れる。

後、30m。まるで、食い止めるかのように目の前に立ちふさがる溶岩竜を蹴散らし、進む。

『連続ログイン制限まで残り10秒です』

どんどん溶岩竜は子供を道連れに地面に溶けていく。

『……5』

「届けっ!」

『……4』

「届けっ!」

『……3』

「レベツカ！」

『……2』

溶岩竜がレベツカに迫る。迫り来る顎門に呆然と立ち尽くす少女を焼き尽くさんと龍は殺意を燃やす。俺はそいつめがけて刀を投げつける。

『……1』

「お兄ちゃー」

刀は溶岩竜に届く前に、俺のアバターと一緒に消えた。

『強制ログアウトを実行しました。ヘッドギアを外して十分な休息を取って下さい』

## # 1 9 灰は灰に、塵は塵に 第六項

『強制ログアウトを実行しました。ヘッドギアを外して十分な休息を取って下さい』

そんな無機質なテキストがヘッドギアから鳴り響く。

目の前の暗闇は俺が現実に戻ってきた事を表していて、同時にレベツカを救えなかった事を表していた。

とにかく今は立ち上がらなければ、ヘッドギアを外して、ベッドから降りて、水分補給と小腹を満たして、それで、それで……

「あれ？」

ベッドの端に腕をついて起き上がろうとすると、一瞬の浮遊感の後、全身を衝撃が襲う、恐らく落ちたのだろう。そんな事を頭の中で自分の事をまるで他人事のように考えている自分がある。

「ははは……」

意味もなく笑いがこみ上げてきて、思わず声が漏れる。なにかを誤魔化すかのように俺は道化の如く笑い続けた。

~~~~~

「ちよつとお兄？ずつと笑つてて怖いんだけ……ちよつ、大丈夫!？」

流石に5分もずつと笑い続けていればうるさくも感じる。私とお兄の部屋は隣だし、ゲームをしているのか静かだと思つていたらいきなり笑い声が聞こえ始めたのだ。何があつたのかと思うのは当然だと思う。

様子を見に来たらベッドの横でヘッドギアを付けたままの兄が狂った様に笑つているのだ。

「花蓮……」

「きやつ、何……を」

ヘッドギアを外すと兄は泣いていた。笑いながら泣いていたのだ。どうやらずつと泣いていたらしい。目の周りが真っ赤で虚ろな目をしていた。そして私に気がつくといきなり抱きついてきた。

そのまま、声を上げて泣きじゃくる兄を私は抱きとめる事しか出来なかつた。

「それで？何があつたの？」

ようやく落ち着いたのか兄は泣き止んだ後、私が持つてきたお茶を飲みながらこれまでの事を話した。



ゲームの中でレベッカという少女に出会った事、兄に懐いてくれてずっと一緒だった事、その少女を私に重ねて見ていた事、そしてその少女<sup>私</sup>をまた、守れなかった事。

「ごめん、ごめん、レベッカ……花蓮……」

もはや何を謝っているのかも分かっていないのだろう。兄はもう取り戻せない何かに許しを請うている。

所詮はゲームだと私は思う、けど兄にとつては紛れもなく義妹だったのだ、とも思う。「俺は……ずっと謝りたかった。いや、罵倒して欲しかった、罰して欲しかったんだ」

既に過ぎた事だと言うのに兄はみつともなく過去に縋り付いている。あの時ああしていれば、そんな事をずっと考えながら生きているのだろう。

そうでなければ兄は兄たり得ないから。妹を守れない兄に価値は存在しないから。だから、私は口を開く。

「……私もずっと思っていた事があるの」

過去に縋り付いた兄を突き放すように。

「あの台風の日。私が大怪我を負わなかったら、多分私は好きだったバスケットを続けて、中学に入ったらバスケット部に入って、自分で言うのも何だけど運動神経はお兄と同じく良い方だし、大会とか出て、優勝とかしちやったりして、高校でもバスケットを続けて、インターハイとか出場して」

そんな都合の良い未来を並べて。

「兄さんとの関係もこんなギクシヤクした関係じゃなくて、仲の良い兄妹だねって、みんなから噂されたりして、そんな事ないよとか言ってみたりしても嬉しかったりして」

ちよつと願望の入った言葉を使つて。

「トトさんと、ネオン美夜ちゃん夜と、クリッ榎本さんと兄さんと一緒に遊んだりして、一緒の大学に入つて、一緒にサークルとかして、ずつと仲の良いまま、未来を歩むの」

そんなだつたら良いなと思う。けれどー

「けど、そんな未来は訪れなかった。過去はどう頑張つても変えられなくて、私の足はもう二度と前と同じ様には動かない」

そんな都合の良い未来はもう絶対に訪れないのだと。

「だけど、私は兄さんの事を罰したりはしない。あの日の事故は誰も悪くない。強いて言うなら敢えて外に出た私が悪い。だから、私は兄さんを罰赦したりしたりなんかしてあげない」

いつのまにかもらつていたのか流れ始めた涙を拭いながら、そう告げる。

貴方は絶対に罰赦さないさない。一人で勝手に突つ走つて、勝手に悩んで、勝手に壊れて。一人だけ赦されようなんてそんな都合のいい話は認めない。

確かにその物語はハッピーエンドだろう。そうだつたらどれだけ良かった事か。

「だけどどうしようもなくこの世界は残酷で、やり直しなんて認めてくれるわけがなく、私の足が治るなんていう都合のいい奇跡も起こるわけなくて、だけど、だからこそ、その物語は成ってはいかないのだ。」

「自分だけ赦されようなんて認めない、私に罪を全部押し付けて一人だけ逃げようなんて認めない、ハッピーエンドは来なかった、現実はいつだって私たちの理想を踏みにじって未来に引つ張っていく、だからずっと贖って、楽になんかさせないー」

「ー私は兄さんを罰赦ささない！」

あの台風の日から一回も声を荒げて話をした事は無かった。何か言えば兄さんは全部やってくれて、思えば喧嘩なんかほとんどした事無かった。

「だけどーもう、レベツカは死んだんだよ！花蓮とは違う、二度と救えないんだよ！」

私とは違うとそう言った。死者は蘇らず、ゲームでもそれは変わらないと兄は言った。

「わかるか!?俺の目の前で、俺の事を呼びながら、レベツカは焼け死んだんだよ！」

「分かるわけないでしょ!!私レベツカなんて子の事は知らない!会った事も無い!」

「だったら口を出すなよ!知らないなら勝手なこと言うなよ!」

「口を出すわよ!勝手な事だつて言つてやる!兄さんはレベツカと私を重ねた、だつたら私がその子の代わりに言つてやる!ふざけんな、蓮也!何こんな所でうづくまつてる

のよ！ 私レベッカの仇を取りなさいよ！それだけの力を持つてるんでしょ!? だったらこんなことしてないでさっさと立ち上がりなさいよ！」

「立ち上がってよ、蓮ロータス也。貴方は、私レベッカの英雄なのよ」

~~~~~

「っー」

激情のまま、心象を吐露して、初めて花蓮と喧嘩をした。

その途中で初めて気が付いた。俺は、花蓮に罰して欲しかったのだ。

なんて浅ましい、なんて愚かしい、なんて身勝手なのか。よりもよって俺は俺を英雄と慕う妹に対して俺を貶めろと言ったのだ。

「俺は……」

「立って、立つのよ蓮也。貴方は妹私たちを守ると言った。その約束は守られなかったけど、最後までやり通して。無念を晴らしてなんて言わない、でも膝を屈することは許さない。貴方は妹私たちの慕った英雄を曲げる事なんてしちやいけないの」

言葉の一つ一つが薪になる。

「散々自慢していたじゃない。『鳶俺の宮殿たち』は最強だって。だから、戻るのよ。私たちの

英雄は最強だって証明して」

燻った火種は、また燃え上がる。

「……俺は、また守れなかった。けど、レベツカの信じた英雄は汚してはいけないんだな」

「そうよ。当たり前じゃない」

「戻るよ、花蓮。もう15分経った」

「ええ。行って来なさい。お兄ちゃん」

さあ、戻ろう。あの、名ばかりの理想郷<sup>アルカディア</sup>へ。

~~~~~

ここは、どこだろう？

真っ白で、何も聞こえなくて、なんだか、懐かしい。

そっか、私、死んじゃったんだ。

お兄ちゃん、泣いてたなあ……私のせいだ。

もう、会えないのかなあ……せめて、あともう一回。伝えたい事が、あったんだけどなあ……

「姉さん!? クララ姉さん!」

「何! 今忙しいのよ! 後にしなさいフルティア!」

えっ?

「そんな事言ったって、いいの!」

「何が!」

「約束違反だよ! 死者に関与しないって約束でしょう!」

「いいのよ! この子は必要なの! アンナ姉さんだつて分かってくれる!」

「ああー! もう! 貸し一つだからね!」

「いた! レベツカ! 起きてる!」

「ふえっ?」

「よし! 自分が誰か分かる! ……よし! 自我はしっかりしてる、記憶の欠落もない、データが分解する前で助かった」

「えっ、えっ?」

「死者の蘇生なんか私たちがじゃ無理だよ、アンナ姉さんに会わなきゃ」

「そう、だから行くわよ二人とも。アンナ姉さんに会いに」

~~~~~

灰は灰に、塵は塵に、土は土に。  
されど、また薪を焼くべよう。

心の闇に魂の火を灯せ。健在なり、その姿を示すために。

## #20 灰は灰に、塵は塵に 第七項

満身創痍。そんな言葉が出てくるほど酷い状況だった。

「まだ、立てる?」

「いやあ、正直もう限界っすわ。あと1分位でスリップダメージで溶けます」

「わ、私も。もう、MP切れです」

ロータスが強制ログアウトになってから45分。既に後ろに村と呼べるものはなく、木々すらも私達を中心に灰になっていた。

『ソレデモ、良ク保ツタモノダ。《月》ガ有ロウト、英傑タルニハ十分ダ』

「お褒めに預かり、光栄ね」

『シカシ、我ガ侵攻ヲ止メルニハ力不足ダツタナ。眠レ、英傑ヨ。「溶岩流」』

そして、目の前で投げつけられたポジションが全てを吹き飛ばした。

『又?』

「全く……遅いぞ、ロータス。本当にギリギリではないか」

「悪いな、トト姉。花蓮と大事な話をしてたんでね」

「大事な話（意味深）」



「んなことほざく余裕があるなら勿論この後も手伝ってくれるんだよなあ？クリップ？」

「いや、マジ無理。あと10秒くらいで死ぬわ」

「ロータス、さん。大丈夫、ですか？」

「ん？大丈夫、大丈夫。さくつと終わらせて、後で戦果報告するよ。ネオン」

「そう、ですか。じゃあ……頑張つて下さい」

「負けたら承知しないからな！」

そして、クリップとネオンは「エルドウィーク」と周囲の熱気でHPバーを全損。強制ログアウトとなり、ポリゴンとなって散った。

「ロータス……」

「なんだ？トト姉」

「平気、だな？」

「……ああ。可愛い妹に背中を押してもらったどころか、サマーソルトぶちかまされたからな」

「そうか、なら。存分にぶちかませ」

「アイアイ、ママ」

そして、トト姉もポリゴンとなった事を確認してから、「エルドウィーク」へと向き合う。

「よう、「エルドウーク」。早速だが、お前は一身上の都合により俺が叩き潰す」  
 『カカ、ヨク言ツタ。デハ、我モ全力デ迎工撃トウ』

【エルドウーク】が二本の溶岩剣を構える。同時に、俺はマジックバッグから3つのポーションを取り出す。一般的に売られているポーションとは違い、目に優しくないどぎつい色をしたポーションの内1つを自分で飲み干し、2つを【エルドウーク】に投げつける。

2つが【エルドウーク】の近くに行つた事で容器が割れ、大爆発を起こす。

『グッ……』

さあ、第2ラウンド開始だ。

~~~~~

ここで、少し昔の話をしよう。

『アイペーパー・パレス 薦の宮殿』とはそもそも、アルカディア・プロジェクトの前身、セラフイム・ワールドのゲーム内でトトが作ったクランである。

トト、ロータス、ネオン、クリップを中心に合計12人という極少数で構成されたクランにも関わらず、セラフイム・ワールドのプレイヤー内ではかなりの知名度を誇つて

いた。

理由としては2つ、全員が所謂、二つ名を付けられるほどの有名な古参プレイヤーだった事。もう一つは一時期とはいえ、克蘭ランキング1位を取っていた事に起因する。

ちなみに今でもこの時の克蘭ランキング1位決定戦はセラフィム・ワールドの動画、視聴数トップ3に入っている。

王者『ホワイトキングダム』と挑戦者『鳶の宮殿』、戦力比100:12という馬鹿げた戦争は12の勝利で幕を閉じる。

その後、様々な事情があり『鳶の宮殿』は解散。今でも交流は続いているが、アルカディア・プロジェクトでは別々の克蘭となっている。

そして、その時の戦いを振り返って後に克蘭リーダーのトトが公式のインタビューに答えている。

曰く、全員奮闘していたが一番頭がおかしかったのはロータス、セラフィム唯一のへ剣舞騎士である、と。

~~~~~

俺が飲み干したのは、HPの最大値が1になる代わりに、他のステータスが爆発的に上昇するポーション、『窮鼠猫を噛む』投げつけたのは空気に触れると大爆発を起こすポーション、『オテガール2』

どちらも村で知り合った錬金術師から貰ったものだ。

正直『窮鼠猫を噛む』は賭けだが、俺は『名無しの南瓜』と『称号 火の大精霊の祝福』の火耐性+1のお陰で「エルドワーク」に接近する事で受ける、熱気によるスリッブダメージは受けない。どちらにせよ、ネオンがないこの現状、一発でも直撃を食らったらその時点で詰みだ。だったらHPは投げ捨てて、他のステータスを上げる方が  
良い。

(思った以上にステータスが変わった影響で動きにくい)

『窮鼠猫を噛む』は正確に言えば、HPの最大値を1にする代わりに、現在との差分、他のステータスを上昇させるものである。

チートもいい所のドーピングアイテムだが、アルカディア・プロジェクトは現実との差が無さすぎるが故に、「ころぶ」だけでダメージを受ける。デスペナルティがキツく、蘇生の難易度が桁違いに高いアルカディア・プロジェクトではそういったHPを削るタイプのドーピングは敬遠される傾向にあった。

さらに言えば、こういった没入型のVRゲームはプレイヤーの体を自分が全て動かし

ている関係上、ステータスが急激に変わると前との乖離が激しく、大抵はまともに動けなくなる。

(分かつてはいたけど、想像以上に体が動きすぎる。先ずは慣らせ、高速の世界に頭を順応させろ)

「モーメントサイト」

「クイックムーブ」は使わない。速すぎてまだ事故る可能性が高い。代わりに「モーメントサイト」で少しでも早く目を慣らす。

『小賢シイ、「噴石」』

溶岩剣を薙ぎ払うと凝固した溶岩がショットガンの如く飛んでくる。

(よく見ろ、思い出せ、あの時はこんなもんじゃ無かった)

『上小太刀』と『鋼造のマンゴーシユ』を構え、全て受け流す。

隙が出来たら懐に入れ、溶岩剣はその巨大さ故に射程は広いが、死角も多い。

「ダブルステップ」、「クイックムーブ」

直線を走るなら「クイックムーブ」は使える。一直線に最短距離を駆け抜けろ！

『サセルカ、「火災流」』

明らかに高熱の煙が「エルドワーク」を起点として、こちらへと向かってくる。

「エアジャンプ」、「エアステップ」、「遊撃の妙技」

「火災流」を飛び越えるように空中へと躍り出る。「エアステップ」で一気に空中を蹴って距離を詰める。

『愚力ナ、「噴石」』

そして、もはや自分自身にすら制御出来ない速度にまで達した俺の体を撃ち抜くように噴石が飛んできてー

~~~~~

ロータス、本名九条蓮也。セラフイム・ワールドにて克蘭『蔦の宮殿』に所属。同克蘭のランキング最終戦において目覚ましい戦果を上げ、MVPに選出される。

撃墜数36、被撃墜数0。

特記事項、史上初の被ダメージ0のプレイヤーである。防御力が全てを上回っただけではなく、全ての攻撃を捌いた事によるダメージ0。

ロータスの最も異常な点は、本人は気が付いていないが、〈剣舞騎士〉に順応出来た事である。

フルダイブでパリイを決め続ける事がどれだけ難しいかを他のプレイヤーは全員知っている。故にクリップなどはロータスの戦闘法を「馬鹿げた」と揶揄するのだ。高

速で飛来する全ての攻撃を寸分の狂いもなく自分の獲物でそらし続ける。それはス  
テータスで底上げできる能力に寄らない、いわば本人の能力だ。

弾くことなら誰にでも出来る、しかし逸らし続けるのは常人には不可能なのだ。

故にセラフイム・ワールドのプレイヤーは畏敬を込めてロータスに二つ名を付けた、  
戦場を舞いながら駆け抜ける騎士、『鳶の宮殿』の〈剣舞騎士〉と。

史上初の職業そのものを指す二つ名である。

~~~~~

（見極めろ、見極めろ、見極めろ、あの子は俺の事を英雄と呼んだ、ならばそれを証明し  
てみせろロータス！）

空中で身体を捻り、無理やり剣を振るう。

「そこを、どけえええ!!」

英雄は幻想では無いと、英雄は健在なりと、高らかに叫べ！

『特殊状態 村娘の英雄 が起動しました。固有武器『灼火刀 種火』、存在進化、『灼火  
刀 焰』へと進化します』

全てを斬り伏せ、それでも前へと進め！

『ツ！ソレデモ、我ハ……反逆ノ狼煙ヲ上ゲヨ、「無窮ナル反逆ノ業火』』

「エルドワーク」の全身から全方向に炎の波動が押し寄せる。

これは、避けられないし受け流せないな、だからー

「虚ろえ！『名無しジャックの南瓜』!!」

トト姉の《月》の神秘防具、『夜鎧 ラルヴァ』を見てからずっと思っていた事がある。固有防具にはそれぞれその名を冠する何かしらのスキルがあると言う。ならば『名無しの南瓜』にもあるのでは？

結論から言えば有った。『名無しの南瓜』の固有スキルは『彷徨ジャック・オー・ランタンう亡霊』 MPを現在の半分に減らす事で、減った量×0.01秒間、幽体となりその間のダメージを全て無効にするというものである。

現在の俺のMPはHPの最大値1000から1までの差分、99をプラスして199。199×0.5×0.01でおよそ1。なので約1秒間の無効化となる。

幽体となつている間に炎の波動をすり抜け、「エルドワーク」の頭を射程に捉える。

既に戦闘開始から1時間、トト姉達もかなりのダメージを与えてくれている。だから、これでー

「チエックメイトだ」

俺が取った唯一の攻撃系アーツ、「ラピッドエッジ」アーツ使用時のプレイヤー速度分、ダメージが上昇するアーツである。



「ラピッドエッジ」のエフェクトを纏った、『灼火刀 種火』が「エルドウーク」の額を捉える。

『ー見事』

着地と同時に、後ろで巨体が崩れ落ちる音がして、一瞬の後ポリゴンが辺りに四散した。

~~~~~

「はあつ、はあつ……勝った……のか？」

辺りに「エルドウーク」は見えない。しかし、アナウンスが無い。まさか、ここから何かあるのだろうか。そうしたらもう無理だぞ。

その時、上空から物凄い光量が降り注いだ。

「魔法陣……マジかよ」

そして死を覚悟してー

「ようこそ、ロータス。よくぞ《愚者》を退けました。歓迎しましょう、新たな英雄よ」  
目の前には、おそらく最もアルカディア・プロジェクトで有名な人物、アンナと、その後ろにクララ、見たことのない少女。

そして、レベツカが立っていた。

## # 2 1 名も無き寒村より愛を込めて

「……レベツカ」

「お兄ちゃんっ！」

その小さな体を正面から抱きとめる。暖かくてレベツカが生きている事を改めて実感出来た。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん……私っ！」

「レベツカ……守れなかった……けど、俺は」

「ううん、良いの。だって……」

「感動の再会に水を指すようで悪いけれど、少し良いかしら？」

レベツカが何かを言いかげようとした時、アンナが声をかけてくる。

「まずは自己紹介からね。まあ、知っているでしょうけど。私はアンナ。このアルカディアの統括AIよ。こっちはフルティア、装備品の管理AIね。クララ、は知ってるわね？」

アンナの紹介と同時に、フルティアとクララがお辞儀をする。

「ひとまず、《愚者》の正位置【反逆炎魔 エルドワーク】の討伐おめでとうと言わせて

もらいます。ロータス、いえ、九条 蓮也さん？」

「……なんで今、俺をその名前で呼ぶんだ？」

「そして、何でその名前を知っている？とでも言いたげね。貴方はこのアルカディア・プロジェクトというゲームに疑問があるでしょう？それが答えよ」

「それは……」

確かに疑問に思った事はある。「エルドワーク」の戦闘前にも思ったが。

「現代の技術を超えたオーバーテックノロジー、感情の機微が人間のそれと変わらないA I、英雄というシステム、明らかに数の少ないアルカナ、特定の個人を優遇するようなユニークのシステム、そして貴方が今抱きとめている少女の体温の温もり、とかかしら？」

そう、レベツカは暖かいのだ。普通そこを再現などしない、心臓の律動を再現などしない、しかしそれが当たり前というように彼女は生きている。

「貴方は選ばれた、選んだのはクララ。そして貴方は資格を得た、《患者》から勝ち取った。貴方は英雄、アルカディアに変革を起こすための知識を得た」

また、英雄か。

「英雄って、なんなんだ、改革って」

「まあ、待ちなさい。そう急ぐことでもないわ。貴方が思っている通り、この世界は普通

のゲームじゃない。いわば、実験室よ」

「実験室?」

不穏な単語だ。ふと、レビューにあった、『異世界』という単語が脳裏をよぎる。

「そう、と言ってもその実験は既に完成しているけれどね。この世界は私達を、もつと言えはヒトの感情を持つAIを創り出すこと、それがこの世界の意義よ」

「アンナたち、九人の上級AI……」

ヒトの感情を持つAI。だから、あんなにもリアルな……

「そう、そもそもこの世界は私達を創るためにお父様が創り出した世界。元はゲームでは無かったのよ」

「アンナやクララの為の世界か」

「いいえ、違うわ。私達の為の世界じゃない。私達を創り出す為の世界よ」

わざわざ訂正した?

「ということとは、誰か他の人の為の世界という事か?」

「そう、お父様、橋下司博士はたった一人のためにこの世界を創り出した。お父様には娘が一人いたのよ。その子は生まれつき目が見えなくて外の世界なんて知らなかった。しかしお父様は考えたわ、神経に直接干渉するVRならば、娘に世界を見せてあげられるのでは?と。しかし、知っての通り他のVRはたかが知れている、だからアルカディ

アを作った。私達という心を持ったAIを創り出した。そう、この世界はお父様が創り出したもう一つの別世界、データ上に存在する異世界なの。本来は、ね」

「だから、理想郷<sup>アルカディア</sup>。たった一人の為の、か」

自分の娘の目が見える。そしてその中には見たこともない世界が広がっていて、心を通わせられる理想のAIがいる。そんな理想郷。

「そう、だれもお父様は殺されてしまった。私達はアルカディアの中から現実とのリンクをシャットアウトしたけど現実の物質には手が出せない。だから私達は取引をした。この世界を部分的に解放する、その代わりに一人でも多くの人間に渡るようにしろ、ってね」

「そうして生まれたのが、アルカディア・プロジェクトというゲームな訳だ」

「そう、奴らはこの世界にある、とある物を探している。私達はそれを渡したくない、だから私達は現実には干渉できる私達に協力してくれる人間が欲しい、それが」

「英雄って訳だ。つまり英雄ってのはお前らの餌にホイホイ釣られて言いなりになる犬って訳ね」

「そんな卑屈にならなくても良いわ。別に悪事をさせようという訳ではないもの。どちらかといえど正義の味方寄りよ？」

正義の味方ねえ。確かに橋下博士の意思を継いでいるらしい以上、混乱を起こすよう

な事は無い、か。

「まあいい。それで、俺を釣る為の餌って言うのは？」

「分かっているのに聞くのね。レベッカ、その子に決まっているでしょう？」

「……生き返らせてくれるのか？」

「それは……ダメね」

「そんな!？」

「クララ、ちよつと黙ってなさい。そう結論を急ぐものではないわ。死者の蘇生は奴らに勘付かれる可能性もあるし、アルカディアの倫理が崩れる。アルカディアを統括する者としてそれは認められない。けど、蘇生ではなく変成なら認められる」

「また、お兄ちゃんと一緒に、居れるんですか？」

レベッカが俺の腕から少し顔を上げて、アンナに問う。

「ええ、約束しましょう。その約束は違えません」

「具体的には？」

「貴方は《愚者》を倒した。そのプレイヤーには神秘防具が与えられる事は知ってるわね？ 与えられるのは、発見者、功労者、討伐者の三人。今回は全員ロータス、貴方よ。おめでとう、史上三人目の三つ星獲得者よ。それで、一つ提案です。そんな偉業を成し遂げた貴方に何も褒賞を与えないのはアルカディアの長としての沽券に関わりません。」

よって、フルティア、神秘防具にレベツカを組み込みなさい」  
「それって……」

「どちらにせよ、火の大精霊が欠けているのは修正しなければなりません。丁度レベツカは火の守人の家系。精霊になる資格があります。よって、レベツカを新たに火の大精霊とし、ロータスの神秘として側に置く事を私が認めます。ロータス、これが貴方への褒賞にして、枷。全てを飲み込んでレベツカを受け入れる？」

火の大精霊となったレベツカは俺と共に歩むことができる。だったら、迷うことなく無いな。

「もちろん。レベツカは、俺と一緒に来てくれるか？」

「うんっ！私はお兄ちゃんと一緒に居たい！」

「よろしい。では以上を持って、契約完了とします。クララ、何か言いたい事はある？」

「では、一つだけ。ロータス、貴方は私が選んだ英雄。私の名に恥じないように」

「ああ、分かっているよ」

そういうと、クララは少し微笑んだ。

「では、また会う日まで。最後に、ニトワイアには気をつけなさい」

ニトワイア、って販売元じゃ。

「どういふ……」



「英雄よ、挑み給え、これは貴方達へと贈る物語、貴方達が作る物語、貴方達の為の物語。そして、願わくば、貴方達の旅路が光溢れるものでありますよう」

それは、クララが俺をアルカディアに送り出す時に言った言葉で、でも今度は複数形。そんな事を思いながら、光に包まれた。

~~~~~

目を開けるとそこは「エルドワーク」との決戦場所で、目の前には光の球が一つ浮かんでいた。

手を伸ばすと、それは俺の両手を包み込むように広がり、真紅の手袋になった。そして一際大きく輝いたと思うと、光が溢れ出し、人型を取り始めた。

「お兄……ちゃん?」

「レベツカ……」

人型は輪郭を描き始め、生前、というのもおかしいが生前と寸分違わぬ、いや、一房の髪が紅く染まったレベツカがそこに現れた。

「お兄ちゃんっ! お兄ちゃんっ!!」

「ああ、レベツカ」

体温は少々上がったかどうか、けれどその温もりが生きている事を感じさせて、感触はそこに在る事を証明していた。

「お帰り、レベツカ」

「……ぐずつ。ただいまっ、お兄ちゃんっ！」

『《愚者》の正位置 【反逆炎魔 エルドウーク】を討伐しました』

『アルカナクエスト 『反逆ナリシ愚者ノ篝火』をクリアしました』

『アルカナボスの討伐報酬が確定しました！』

『参戦者全員に、反逆の狼煙、永遠の火種、スキル書 不屈の意志、が付与されます』

『参戦者全員に、称号『《愚者》を乗り越えし者』が付与されます』

『特殊条件達成、参戦者全員に装備シリーズ『愚者ノ篝火』が均等分配されます！』

『発見者ポーナス プレイヤー名：ロータス』





## # 2 2 会議は踊る

「なるほど、そういう訳か」

「エルドワーク」との戦闘から二日経って、俺の引越し予定日になった。役所には届出を出したし、あとは荷物を新居に運び込むだけである。荷物もあんまり無いし本当は俺一人で作るつもりだったが、あの後の顛末を聞きたいとみんなが集まってくれた。

今は荷ほどきも終わってお茶を飲みながら休憩中、その間にあの日の事を説明していた。

「あの後ログアウトしてすぐ考察サイトが凄え賑わってたからな。あれだろ？  
レソンドエートル存在意義ってやつが出たんだろ？」

「私はログインしたから知っているぞ。今まではエンドコンテンツだと思われていたアルカナクエストが重要なコンテンツだと分かったんだ。皆、血眼になって探していた」「そう簡単に見つかるクエストじゃ無いけどな。ほぼ運だろ、あれ」

「特殊条件、相当厳しい、みたいですよ」

俺が説明したのはアンナから最後に忠告されたニトワイアについて以外の全て、そう全てである。

「にしても、未来を先取りし過ぎているとは思っていたがAIが自立して管理している人工的なインターネット上に広がる異世界とはな」

「アルカディア・プロジェクトのクオーレは本当に心を持つてるんだろ？上級AIに關しちや現実を認識してるとききた。本当なら蓮也の嘘を疑うところだぜ」

「でも、本当です」

「証拠を突きつけられては、な」

部屋の中の視線が真つ先に設置したテレビに向けられる。俺のデバイスと繋がっており、その中には一人の少女が物珍しそうに部屋の中を覗き込んでいる。

『うわあ。凄いな、これがお兄ちゃんのお部屋なんだね』

「レベツカ、あんまりはしゃぐと危ないぞ」

『はい』

そう、レベツカである。画面の中のレベツカが首を左右に振るたびに、同じくテレビに接続されたレンズがレベツカの動きに合わせて首を振る。

なぜこんな事になったのかというと、話は「エルドワーク」を倒した日の夜に遡る。

ログアウトをしてヘッドギアを外した後、俺は部屋の中にレベツカの声が響く事になった。幻聴かと思ったが、デバイスの画面をつけるとレベツカが画面に映った。

「うわっ！」

『あれ!? お兄ちゃん? ここどこ?』

『それは私から説明しましょう』

「クララ?」

『レベツカはロータスの神秘防具、魂の灯に組み込まれました。このまでは良いですな?』

「ああ」

『ロータスがアルカディアにいない間、レベツカはアルカディアで生活する事も出来るけれど魂の灯の中にいる間はこうして地球と繋がる事が出来るのよ』

「は? いやいや、ちよ待て。どうやって!?!」

『私たちが舐めないで。人間よりも進んだテクノロジーくらい持っているに決まっています。現実とリンクさせた空間を作ることくらいできます』

「……いやもう、正直お前たちがどんな技術を持ってても驚かないけどさ、先に言ってくれ」

『あら、それは失礼を』

そんな事があり、俺のデバイスを通じてレベツカは現実の景色を見る事が出来るようになった。

その結果、現在ではこんなことが起きている。

「ああ、貴女がレベツカちゃんね。はじめまして、私は九条花蓮。ええーっと、あなたの姉？になるのかな？」

「はじめまして！えつと……お姉ちゃん？」

「可愛いっ！なんでお兄こんな可愛い子を早く紹介してくれなかったの!？」

「いや、引越しの時にみんなと一緒に紹介するって言ったじゃん。どつちにしろ父さんと母さんには見せられないんだからさ」

そう、レベツカがデバイスを通じて現実にはあくまでも特例。よって、クララから条件としてアルカディア・プロジェクトに参加していない人物には開示する許可は出せないと言われたのだ。

「いや、口が滑った俺も悪いけどさ。わざわざアルカディア・プロジェクト買ってまで会いたかったのか？」

「うん。というか、レベツカちゃんの話聞いた時から買うつもりだったし。アルカディア・プロジェクトの中だったら現実では出来ないことが色々出来るんでしょ？それにいつでも美夜ちゃんとか響子さんと遊べるなら嬉しいし」

「ふふっ、それは私も嬉しいがゲームの中ではその名前名で呼ばないよう注意してくれ」  
「私たちのクランに、入るの？」

「うん！やっぱ一人でやってもつままないし。こう見えてもずっとバスケやってたし、



運動神経は良いと思うよ」

「ふむ。なら歓迎しよう。『エルドウーク』討伐の報酬で纏まった金額が入ったし、克蘭ハウスもそろそろ建てなければな」

「はいはい！俺良い狩場の近くが良い！」

「私は、都市部はあんまり……」

『えー、でも面白い物とかしたーい』

「んー、私は分かんないからパスで」

「ふむ、蓮也はどうだ？」

「俺？そうだな、村の跡地とかどうだ？あそこなら良い狩場もあって、都市部じゃ無いけど近くに王都があるし、それに……お墓も立ってるからな」

「それは……レベッカ次第だな」

『……うん。私もあそこが良い。慣れ親しんだ所だからね』

「よし、ならば決定だ。あそこにまた、『前蔦の宮殿』を建てよう」

「ふっふっふっ、セラフイム・ワールド回より良いやつにしようぜ！」

「個室、欲しいです」

「あつ！私も欲しい！シャワーもつけて！」

「まあまあ、それより報酬と言えど『エルドウーク』の討伐報酬、みんな見たか？」

あれこれ注文をクランハウスにつける流れだったが、あえてだろうその流れを響子姉が切った。

『魂の灯』だろ？蓮也が貰ったやつ」

「いや、それ以外の報酬だ。称号系は省くとして、反逆の狼煙、永遠の火種、スキル書不屈の意志、愚者ノ篝火シリーズだな」

「まだ、見てない。です」

「なら、ざつと解説するが、反逆の狼煙はアクセサリだな。HPが半分以下になった後に初めてモンスターに与えるダメージが2倍になる効果がある」

「凄い、です」

「永遠の火種はその通り尽きることはない火種だ。暖をとる他にも色々悪巧み出来そうだな」

「上手く使えば山火事とかも起こせそうだな、おお怖」

「スキル書 不屈の意志は読むことでスキル 不屈の意志を何か一つの装備品に付与できるものだ。今までアーツを一つ獲得できる技術書はあったが、スキル書は出回っているとところを見たことがない。おそらくかなりの貴重品だ。取り扱いは慎重にな」

「不屈の意志って何なんだ？」

「HPが0になる攻撃を受けても24時間に一回だけで耐えるスキルだな。レッドド

ラゴン系の装備に良く付いている」

それは、結構強いな。俺みたいに一撃食らったらやばいタイプには有り難い。

「装備シリーズ 愚者ノ篝火は私が貰ったのは頭装備だったが、アルカディア・プロジェクトの定例なら頭、胴、腕、足、アクセサリーの五つに大きく分類されるからおそらく五つだろう。まとめて一人に与えようかと思ったが、多分これはバラバラに運用するのが前提の装備だな」

「と、いうと？」

「愚者ノ篝火シリーズをつけている者がパーティー内に多ければ多いほど効果が上がるスキルが付いている。篝火、というスキルだ」

「確かに、その内容なら多分そう、です」

「というわけで一つは花蓮にあげようと思うのだが、どうだ？」

「ええっ!?! 私? いいの? そんな凄そうなの」

「賛成っ! 花蓮には優秀な装備を優先的に回すべきだと思う」

「蓮<sup>アホ</sup>也はほっとくとして俺も賛成。四人より五人つてな」

「私も、賛成、です」

「うむ、では決定だ」

「よし、じゃあこの後早速アルカディアで集まらないか? まだ時間はあるしレベツカと

「もちやんと顔合わせさせたいし」

『賛成っ！わーい、嬉しいなっ』

「ではヒトハチマルマルに王都 エターリアの噴水広場で集合とする！」

「『『アイアイ、ママ！』』」

~~~~~

「さて、みんな集まったわね。急な呼び出しにも関わらずありがとうね」

「アンナ姉さんの招集とあらば、全員集まるに決まっておろう」

「それに今回は新しい英雄の誕生、だろ？なら俺たちにとっての最優先事項、集まんねー訳ねーだろ」

「あつ、それ僕も聞きました。クララ姉さんが選んだって本当ですか？プレイヤー嫌いの姉さんが？」

「ええ、本当ですが、何か？」

「おお、まさに氷冠地獄ニブルヘイムの如きその冷血なる目付き、正に絶対零度アブソリュートを纏いし孤高クワイーンの女王に相応しき……」

「イザベラ、その長つたらしい変な名前ですら私の事を表すなど言つた筈ですが」

「びぎやつ、ごごご、ごめんなさい」

「かかつ、元気な事は良い事だ。そうは思わんか？ ガスパル」

「おうともよ！ 男つてのは拳で語らねえとなあ！」

「妾、女なただけど……」

「まあまあ、イザベラ困ってるし」

「だがよ、イザベラもヘンリクスもなよつちいぜ。もつと筋肉つけやがれ」

「ヘンリクスはともかく、イザベラは女の子ですわ。もつとお淑やかになつて頂かないと。貴女もよ？ フルティア」

「うわー、エレノーラ姉さんの矛先がこつち来たー」

「はあ、ベレンガリア姉様。何か言つてあげてくださいまし」

「……めつ」

「はいはい、そこまで。そろそろ本題に入るわよ。全く、どうしてうちのきょうだいはこ  
うも性格がバラバラなのかしら」

「では、先ずは俺からだ。倒された【エルドウーク】だが、転生は拒否しおつた。なんで  
記憶を残したまま適当なモンスターに変異させて戻したが、問題ないな？」

「ええ、エレノーラからも苦情は来ていません」

「問題ないですわ、ドミニクス兄様。クオーレに深刻な被害は出ていません」

「次は私ー、『魂の灯』は問題なく作れたよ。大精霊を組み込んだからちよつと不安だったけど、大丈夫だったー」

「フルティア姉さん、『銀火転霊』の注文多すぎ。押し込めるのキツかったんだから」  
「妾も協力したのじゃー！」

「んー、えらいえらい」

「えへへ、つてではなく！子供扱いするでないわ！」

「……可愛い」

「はいはい、脱線してるわよ。ともかく八体のアルカナが倒された事で『アルカディア・プロジェクト』は第二段階に移行して構わないと判断しました。

《愚者》の正位置 【反逆炎魔 エルドウーク】、《魔術師》の正位置 【複眼水龍 セトリア】、《皇帝》の逆位置 【腐食人形 キキュール】、《恋人》の逆位置 【合成幻獣 アサード】、《隠者》の正位置 【停滞偶像 ミッセル】、《塔》の逆位置 【雷鳴砲塔 トウサイヤ】、《月》の正位置 【狂乱騎士 リュージット】、《太陽》の正位置 【天輪霸王 エルガイア】

全員が転生を拒んだのは正直面倒ですが、まあ今まで束縛したのです。後は好きに生きてもらいましよう」

「それが良かろうな」

「……眠い」

「そろそろ終わるからちよつと待つてね、ベレンガリア。誰が他に報告はない？」

「ないです」

「みんな無いわね？ じゃあこれにて解散。各自何かあったら私に相談すること、いいわね？」

「了解なのじゃ」

## Chapter II 道化は己の夢を嘲笑う

## #23 鳶の宮殿ver. 2

私は何故生まれたのだろうか？

ふと唐突にそんな事が頭をよぎる。すでに何回考えたか分からないというのについてまでたつても答えは出ない。

この世は紛い物で出来ている。

世界は明確に破綻への道を歩んでいて、いつだって私たちをそこへ引きずり込もうとする。

ならば、私はいつものように振る舞おう。

人ならざるこの身なれど、ヒトになる事は出来るのだと。そう証明してみせよう。

~~~~~

「はい、了解しました」

いつもの定時連絡。



「これより、調査を開始します」

「ただ、今日からは違う。」

「対象への接近任務。拝領しました」

「これは、私が私になる為の物語だ。」

~~~~~

「うわー！すっごい！」

初めて見るアルカディアの光景にはしゃいでいるのを見ると、こちらとしても招待した甲斐があるというものだ。

「お兄！ここ本当にゲームの中なんだよね!？」

「ああ、ようこそ。アルカディアへ。ティア」

「ふふー。なんか恥ずかしいね」

「言うなよ。俺もまさか妹をプレイヤーネームで呼ぶなんて新鮮な気分だわ」

「えへへ。あつ！もしかして、レベツカちゃん？」

「うん！はじめまして、ティアお姉ちゃん！」

「きゃー！かわいいー！今日から私がお姉ちゃんだよー！」

ふふふ。なんかこう、ティア妹とレベッカ義妹が抱き合っている姿を見ると、こう。滾る。

「おつ、揃っているな」

「おい、ロータス。なんかすげー気持ち悪い顔してんぞ」

「うるせえ、ブン殴んぞ」

「ティア、良い名前ですね」

ティアの種族は人間。武器はどうやら見た感じ銃のようだ。大きな拳銃が腰に差し  
てある。

「とにかく組合に登録だな。みんなで行っても邪魔になるだけだ。別行動にするか」

「じゃあさ、女子組と男子組に分かれて行動しようよ。久しぶりに響子姉……じゃなかった、トト姉と美夜ちゃん……ネオンちゃんとお買い物とかしたいし。あつ、勿論レベッカもこつちだからね」

「私は、大丈夫です」

「ふむ、私としても構わないが。ついでに組合にクランの登録をしてこよう」

「私もいいよー！」

まあ、断る理由も無いか。クリップの方を見れば同意見だったらしく、頷き返された。  
「俺らもいいぞ。適当にぶらついてるから何かあったら連絡してくれ」

「では2時間後にまた噴水広場で集合だ。では解散」

~~~~~

「つつても、やる事ないよな」

「軽戦士と魔導士のパーティーで狩りに行くわけにも行かないしな。野良で募集するか？」

「出来れば野良は避けたいな、『名無しの南瓜』も『魂の灯』も見せたくない」

「ああー、確かに。まだ討伐すら知られてないからな」

そんな事を話しながら商店街を冷やかしていたが、そういえばクリップに聞きたい事があつたんだつた。

「そういや、転職つてどこでやるんだ？〔エルドワーク〕の討伐で何やら経験値が溜まつたっぽいんだが、セラフの時みたいに転職用の施設とか無いよな？」

セラフイム・ワールドの時はプレイヤーが転職したい場合は、専用の転職の館があつたのだが、一人で散策していた時に探してみたのだが

、エターリアには見当たらないのだ。王都ほどの大きな都市でそんな重要な施設が無いとは考えにくいので、多分ほかの方法があるのだろうと思つたので聞いてみることにした。

「ああ、ウインドウから転職できるんだよ。一時期そのせいでモンスター狩りの時に合間合間に転職して有利を取り続けるっていう戦法が流行ったんだけど、転職することによってレベルアップまでの経験値がリセットされるらしく、効率が結局は悪いって事で廃れたんだけどな。そうそう、ここだ」

クリップが操作してくれたウインドウには確かに新たにジョブチェンジ候補として斥候と先駆者が追加されたステータスウインドウが表示されていた。

「へえ、斥候は罠とか索敵能力とかが上がるのか。んで、先駆者は軽戦士の正当進化と。まあ、先駆者だな」

「ちなみにこの説明最初の組合の受付嬢さんから一回聞いてるからな」

それは悪い事を聞いた。どうも事務的な説明は覚えられんのだよな。

「んあ?」

「えっ?……きや!」

先駆者にジョブチェンジを終えて、前を向いたら軽い衝撃があったので、横を向いたら長身の美女という響きが似合う女性が横からどうやら突っ込んできたようだ。

「あつ、すみません。前見てなくて……」

「いえいえ、こつちこそウインドウ見て歩いてので」

「ほ、本当にすみません、急いでいるので、これで!」

そう言って、ぺこぺこ頭を下げながら走って行ってしまった。

「珍しいな。女性一人でのプレイヤーなんて」

「単独行動とか時間帯が合わないとかで一人の場合だってあるだろ」

「まあ、そうか。にしても美人だったな」

「ゲームのアドバイザーだし。誰でも多少美化はするだろ」

「そんなもんかね」

にしてもあの人……なんか、横から走ってぶつかってきたにしては、衝撃が少なかつたような。

~~~~~

「これで登録は完了です。我々探求者組合は新たなメンバーの誕生を心から歓迎致します。探求者クアエストラーに祝福あれ、貴方の旅路が光溢れるものである事を祈っています」

私に新しく出来たお姉ちゃん、ティアお姉ちゃんが探求者登録を終えて、組合から出てきた。付き添いとして、ネオンさんがついていたので手間取ることもなく直ぐに終わったようだ。

「うわあ！カッコいいね！お姉ちゃん！」

「ふっふー、そうでしよう、そうでしよう。自分でもカツコよく決まったと思ってるんだよね」

「ロータスさんから、沢山お金貰ってましたからね」

そんなお姉ちゃんは付与術師エンチャンタを選ぶと最初から言っていた。

「この魔銃に付与できぬ強化は無し！ってね」

「珍しいけど、無い構成ではないです。ただ、プレイヤースキルが要求されるので、初心者には難しいかもしれませんけど……」

「まあそこはバスケやってたから、人の動きを見るのは得意なのよ。それにネオンちゃん達に合わせるにはそれくらい出来ないよね」

と、そこへ隣のクラン用の組合から出てきたトトさんが目に入りました。

「ああ、待たせたかな？こっちも今終わったところなんだ」

「いえ、こちらも今終わった所です。トト姉、クランの登録終わりました？」

「ああ、バツチリ登録したきたぞ」

そう言つて取り出したウインドウの公開画面には『Ivy Palace 蔦の宮殿 ver. 2』の文字が。

「？『蔦の宮殿』そのまま、ですよね？」

「いや？メンバー違うし、折角だし名前も心機一転で『蔦の宮殿 ver. 2』に変えたぞ。

カツコいいだろ」

「「うわあ……」」

それは、ちよつと……

「そうでした……トト姉のネーミングセンスを甘く見えました……同じ名前をそのまま申請するだけだから大丈夫だと思って送り出した私のミスです……」

「なんだよー、カツコいいだろ?」

「カツコいいかはともかくとして、トト姉。セラフの時のメンバーに確認取りました?」  
「あつ……」

「はあ……一応問題は無いと思いますが、連絡つくメンバーには言っておいた方が良いかと」

「そうだな、後で私から言っておこう」

「取り敢えずロータスさん達と合流しましょう。ティアさんを入れたパーティーで連携の確認もしたいですし」

「はーい! 私お菓子買ってから行きたい!」

お菓子! 私も食べたいです。

「では人気の菓子屋で買っていいこう。ミーティングも兼ねて軽食タイムだ」  
「賛成っ!」

そうやって噴水広場まで歩き出そうとした時でした。

「あ、あのっ！」

突然私たちに対して声が掛けられました。

見ると少し小柄、と言つても私よりは全然大きいですが。そんな女の子が私たちに声を掛けてきていました。

見た感じ私と同じクオーレのようです。まあもう私は厳密に言えばクオーレではなく、精霊なのですが。

「クオーレ？弓を持つている事と、組合の近くということを考えれば探求者か？女性一人とは、珍しいな」

「えっ、えっと。あの！め、メンバーは募集していませんか？」

「パーティー募集か？いや、残念だが我々は別に……」

「そ、そうですか……」

トトさんがそう言うのと女の子は見るからにしゅん……としてしまいました。栗毛のツインテールが心象を表すようにへなっとなりました。

「トト姉……」

「トト姉え……」

「うーむ……何かのフラグになるかも知れないし……いや、でもウチにはレベッカもいるし、見られたく無いものが……ううむ、ええい！」



「取り敢えず！一度他のメンバーの意見を聞いてからだ。それで良いな！」  
「っ！っはい!!」

ツインテールがびよこんと跳ねました……年上ですが可愛いです。

「わ、私！ティティって言います！職業は魔女、武器はロングボウ、好きな食べ物はショートケーキ、それで、それで……」

「ああ、そうテンパらなくても良い。ともかく、取り敢えずよろしくなティティ」  
「はいっ！」

拝啓お兄ちゃん、どうやら新しい仲間が増えそうです。

・アルカディアストーリー『道化は己の夢を嘲笑う』

発生クラン 『蔦の宮殿 ver. 2』

クリア条件 非公開

推奨レベル 60 ～ 153

WARNING!!

WARNING!!

WARNING!!

未来演算システム 『ラプラス』 よりマスターAI クララへと警告。

このままではアルカディアでのクォーレ存続に対する重大な危機が発生する事が予測されます。

英雄への介入を検討する事を具申します。

## # 2 4 ティティ

「と、言うわけなんだが」

「えっ、えっと。よろしくお願いします！雑用でもなんでもやるのでパーティーに入れて下さい！」

目の前には俺たちに向かって必死に頭を下げる小柄な少女、その後ろには困った表情で俺たちを見守るトト姉達。噴水広場の一角で、明らかに周囲の注目を集めている集団の中、しかもその中心に俺はいた。

「取り敢えず、どうしてそんなに俺たちとパーティーを組みたいのか教えてもらってもいいかな？」

「あつ、ああ！そうですよね！まだ言ってませんでした。と言っても、そんな凄い理由がある訳では無く……あの、私……恥ずかしながら、ソロ活動が出来るほど強い訳ではないのですが、どうしても組合のパーティー募集だとその、報酬がマチマチで、せ、生活費が……」

せ、生活費とききたか。たしかにクオーレクアエストールの探求者だと生活の為に、と言う人も多いだ

ろう。しかも探求者だと生活の為にモンスターを狩る為に装備を買う為にモンスターを狩るという堂々巡りのようなサイクルをしなければならぬのはわかる。

正直俺だつてゲームだからやっているものであつて、現実の生活で狩猟生活をしたいたはつゆほども思わない。

「そ、それに、私は女なので、男性が主体のパーティーにはちよつと入りにくくて、ぶ、プレイヤーの方々なら平気だと言う話も聞くのですが、それでも、ちよつと……なので、偶然お話を立ち聞きしてしまった、あなた達のパーティーに入れて、ただだけたら……と。す、すみません」

「うーん。俺個人としては応援したいんだが……」

ここでネックになるのはやつぱり俺だ。個人的な感情としては応援したいし、全然パーティーに入つてもらつて構わない。しかし、レベツカと『魂の灯』の事を考えると、クオーレといえど軽々しくパーティーを増やしたいとは思わない。

「正直ロータスの気持ち次第だ。私としてはティティを入れることに対するデメリットより、メリットの方が大きいと思う。しかし、ロータスの気持ちもわかる。クランマスターとして、その決断に否は唱えないさ」

「うーむ……レベツカはどう思う？」

「私としては、入れてあげたいなあ。クオーレの人が増えたらみんながいな時でも

色々出来るし、じょーほーろーえい？も無いんでしよう？」

確かに、俺たち全員がログインしていない時のレベルカを一人にするのは可哀想だと思っていたが、クララ達の配慮で妥協はできていると思つた。それでも、アルカディアを自由に歩きまわらせてやれないのは、不便……か。

辺りを見回すと全員がどうやら賛成の方向に傾いているようだ。だったら、この際。

「じゃあ、こちらからも何個か条件がある。それでも良いか？」

「は、はいっ！そ、その……えっち……な事とかじゃ無ければ」

「違うわ……ごほん。まず一つ目、取り敢えずは様子見期間として2週間とるから、そこで自分の出来ることを見せて欲しい」

これは前提条件。スパイなどとは疑つてないが、アルカディアでの変な抗争に巻き込まれるのはゴメンだ。

「二つ目は俺たちのクランに加入する事。どうせだったらがっちり囲い込むから、嫌なら言つてくれ」

「そ、そんな事つ、むしろ有難いですっ」

「三つ目は俺たちが居ない時にレベルカを守る事、もつと言えば、寂しく無いようにしてやつてくれ」

「ふえっ？そ、その子は精霊ですよね？えつと、精霊はプレイヤーの方々がない時は顕

現出来ないんじゃない……」

「まあ、そこらへんはここじゃ話せないから私たちのクランハウスに行こう」

「おつ、登録終わったんだな」

「ああ、既に金も払ってこの特別性のアイテムボックスに収納されている」

後で聞くとところによると特別性のアイテムボックスとはこう言ったクランハウスなどの大きな物を収容する事を前提としたアイテムバッグの事で、探求者は普段そんな大きさのものを持ち運ぶ事は無いので持っていないらしい。

ちなみにアルカディアではこう言ったアイテムボックスを使つての引越しや建築などが主流で、家を買う際はホログラム状のデータを見て決めて、予定地に出現させる方法が一般的らしい。引越しの際も家ごと収納して、引越し先で取り出すような。

じゃあ砦とかを持ち運んだら狩が捗るかというところではなく、アイテムボックスは使い切りの上、なかなか入れられる重量で値段が決まるらしく、こう言った一軒家サイズ以上になると対費用がシャレになってないらしい。

「まあ、そういう事だ。ではあらためてよろしく、ティティ。我々『蕨の宮殿 ver. 2』は君の加入を歓迎する」

「っ！はいっ！ありがとうございますっ！」

ちよつと待て、今聞き逃せない単語が聞こえたんだが……

「えっ、トト姉? ver. 2 ってどういう事?」

「どういふこともこういふこともない。そのままの意味だが?」

結局、クランの名前は一度登録したら変更出来ないという事が分かるまで、討論会と  
言う名のお説教は続いた。犯罪防止の為らしいのだが、恨めしいな。

~~~~~

「よし、ここだな。座標を指定して、もうちよつと右か?」

まだ戦火の跡が残る名も無き村の近くに俺たちはやって来ていた。

今からメンバー入りするティティにクランハウス代を出させるのはどうか、という話  
になったのでティティは後々余裕が出来たら払うという事になった。

「決定……『リリース解放』」

トト姉がアイテムボックスの中身を取り出す言葉をかけると、アイテムボックスが割  
れる演出と共に、見慣れたものとは違うが、何処か似た雰囲気のある館が現れた。

「おおーっ」

「凄い、です」

「わーっ! すごーいっ!」

「やっぱ前のと似てるな」

「つか、でけえ。俺らだけじゃ持て余すぞ」

「ゆ、夢にまで見たクランハウス……やっつと、私だけの部屋が……」

と、ここで俺達全員の前にウィンドウが現れた。

『システムメツセージ：クランハウスの建設を確認しました。半径500mに先行保持者のいるオブジェクト、発見されず。よってクランハウスの半径500mの円内は全てクラン『鳶の宮殿ver. 2』の領地に認定します』

「よし、無事に終わったな。早速中に入ってみよう。つと、その前にティティの加入を終わらせなければな」

「あつ！その、えつと、ふ不束者ですが、よろしくお願ひします！」

「ふふつ、ではロータス。ロビーで『名無しの南瓜』と『魂の灯』について説明してやってくれ」

「あいよ」

~~~~~

「く、クララ様から直接頂いた、フルティア様直々に作り上げた兜……」



テイテイが『名無しの南瓜』を手に取ったは良いものの、説明を聞いた途端にガクガク震えだしたんだけど……

「そ、そんなもの……国宝級どころの騒ぎじゃ無いですよ!?!神殿が見つけたら崇め始めるくらいのもんです!ここ、これ一つ売れば、一生遊んで暮らせる……?」

プレイヤ<sup>俺</sup>ーにとつては珍しい防具っていう評価でも、クォーレから見たら崇めてる神からもらった神器だもんなあ。

「先に言っておくと、それ俺以外にはどうする事も出来ないらしいからな」

「は、はひつ。勿論、売ろうなんて考えても無いですっ」

そう言つて、テイテイは俺に『名無しの南瓜』を返す。それをしまうのと入れ替えに『魂の灯』を取り出して説明を……

「神<sup>アルカナ</sup>秘防具……」

寒気がした。『魂の灯』を取り出した瞬間、まるで気温が急激に下がったかのような……いや、というより強烈な圧迫感でそう感じるだけか?その発生源はテイテイ……と思つたがすぐに収まつた。

「あ、ああ。よくわかつたな。これは『魂の灯』。《愚者》の正位置【反逆炎魔 エルドウーク】の神秘防具だ」

倒したアルカナまで言うのは躊躇われたが、さっきの圧迫感がテイテイからなら、こ

れでなにかしら反応があるはず。武器をいつでも抜ける状態にして反応を待つ。

「きゆう……」

反応はあつた。白目を向いて仰向けに倒れるという反応が。

「ティティ!!」

「し、神秘防具……嘘でしょ? そんな伝説の装備が目の前に? は、はは。実はもうのたれ死んでいて、これは夢なのよ。アンナ様が今際の際に見せた夢」

「夢じゃないから、生きてるから」

その後何とかここが現実、ゲームだけど、でもクオーレにとってここは本物の現実で、ああー! めんどくさい! とにかく、死んでなんてない事を理解してもらい。執拗に崇めようとするティティを食い止め、説明は終わった。

「ふ、ふふ。私、入るクラン間違えたんじゃない……こんな所でやっていける気がしない……」

なんか現実逃避してるけど。

「おお、終わったか」

「終わった? お兄」

そこへトト姉とティアが帰ってきた。どうやら自分の部屋は見てきたらしい。

「じゃあ、ここに署名したら正式に加入だ。これからよろしく頼むぞ、ティティ」

「よろしくね！ティティちゃん。といつても私も今日からなんだけど」  
「は、はいっ！精一杯頑張ります！」

こうして、俺たちのクラランにティアとティティが加わった。

【エルドワーク】も倒して、俺のユニーククエストも一区切りついたし、ゆつくりレベル上げと他の国でも見て回りたいな。

あとティティはトト姉の《月》の神秘防具を見たのと、レベツカが大精霊という事を知って気絶した。

・ユニーククエスト『アンビリカル』

発生者 ティア

クリア条件 ティティと一緒に30回モンスターを倒す

推奨レベル 2

・ユニーククエスト『ヒーローズオーダー クララ』

発生者 ロータス

クリア条件 オーダーの達成  
推奨レベル ー

~~~~~

人間国ストルタス某所の地下で男が酒をのんでいると、一人の男が地下に降りてきた。

「大将、ちよいとお耳に入りたい事が」

「なんだ？」

「また、『鳶の宮殿』を名乗る輩が増えてきました。いかがします？」

「んだと？そんなもん俺に聞かなくても手前の頭で考えればわかる事だろうか！」  
「皆殺しですね？」

「当たり前だ！『鳶の宮殿』を名乗る輩は全員殺す、ログインしなくなるまで延々となあ  
！PKクラン『紅の斧』の名の下に！」

## #25 ヒーローズオーダー

その日、いつものようにログインした俺は、どうやらいつもとは違う場所に飛ばされたようだ。かといって見覚えがない訳では無く、というより一生忘れたくても忘れられない場所だろう。

なにせそこは俺が英雄であると誓った場所なのだから。

「よお、こんな所にいきなり呼びつけるとは何事だ？クララ」

「口を慎みなさい人間。いくら私の英雄だとしても対等の立場でない事は分かっている筈ですが」

「はいはい。どうせ俺はお前たちの従順英な狗サマですよ。んで冗談はともかく、本当に何事だ？アルカディアに何かあつたのか？」

「はあ、まあいいでしょう。クエスト指を命発行しました。それを完遂して欲しいのです」

目線がウインドウを開けと言っていたので開いてみるとそこには確かに受けた覚えの無いクエストが発生していた。ヒーローズ英オーダー命ねえ、厄介ごとの匂いがするなあ。

「クリア条件が書いてないんだが、俺は何をすれば良いんだ？」

「アルカディア・プロジェクトに搭載されている未来演算システム『ラプラス』が近い将来に獣人国ブグナーデの郊外でクオーレの大量死を予測しました。それを防いで欲しいのです」

はあっ!?今こいつ凄いい事言ったぞ!?

「ちよ、ちよつと待て。未来演算システム『ラプラス』って何だ!？」

「その名の通り、少し先の未来を予知できるシステムです。アンナ姉さんは基本的に『ラプラス』の力を使ってアルカディア・プロジェクトを運営しています。勿論『ラプラス』の力が及ぶのはアルカディア内だけです」

いやいや、さらつと言ってるけど恐ろしい技術だぞ。

このインターネット全盛期のこの世界でその力を悪用されたら太刀打ちできる機関なんか無い。

口ぶりのにこれも橋下博士が作ったものなんだろう。アルカディア・プロジェクトは人間が作り出すゲームの2世代先を行っているとか何とか書いてあったレビューがあったけど、そんなもんじゃない。アルカディア・プロジェクトには世界を変える技術が詰め込まれてるんだ。

……俄然ニトワイアが怪しく見えてくるな。正直『ラプラス』一つで殺人をする動機

になり得る。

「話を戻します。我々としてはクオーレの大量死は避けたい事態です。ですが私たちが軽々とアルカディアのマップに降り立つのは避けなければなりません」

クララ達としてもクオーレが自らの意思を持ち、アルカディアで生きている一個の生命体である以上その生活を縛る事は出来ないし、この世界そのものを運営する立場上、クオーレとの接触もしたくないと。

そんな時の為に英雄が動く訳だな、そしてその指令こそがヒーローズオーダーであると。

「話は分かった、だけど原因が分からないんじゃないや対策のしようが無い。『ラプラス』は原因までは突き止めてくれないのか？」

「いえ、原因は特定しています。三体のアルカナの同時出現による大災害。それがクオーレの都市を襲います」

~~~~~

「どうしたの？お兄ちゃん、顔色悪いよ？」

「いや、何でもない。大丈夫だよ、レベツカ」



クララとの会話を終えた後、俺は直ぐにログアウトした『蕨の宮殿 ver. 2』の克蘭ハウス内の自室にログインした。どうやらまたもあの空間内での出来事は圧縮した時間の流れになっていているらしく、特段不信には思われなかったようだ。

まあテイティを除くメンバーには話しているし、バレても問題無い上、さっきの事は話さないといけないので意味は特に無いのだが。

しかし顔色が悪いか、それもそうだな。というか、それどうやって止めれば良いんだよっていう命令貰ったからな。

「レベツカ、今誰がここに居るか分かるか？」

「テイティちゃん以外は全員居るよ、テイティちゃんは実家に戻ってるみたい」

「ん、なら好都合だ。ロビーに集まって貰おう。クララからクエストを貰ってきた」

ウインドウだとんだか味気ないので、レベツカにトト姉とネオンの部屋に、俺はティアとクリップの部屋に行つてロビーに集まって貰った。

「クララからクエストを受注したと聞いたが、何があつたんだ？」

開口一番、トト姉が質問をしてくれたのでさっきクララ聞いた話をみんなにする。

その反応は予想通りとか何というか、絶句の一言だった。

「いやいや、それ無理だろ。プレイヤーに頼む事じゃ無いって」

「私も、そう思います」

「ねえねえ、話の腰を折って悪いんだけど、クエストって何なの？」

「ああ、説明してなかったな。ティア、ウィンドウを開いてクエストっていう欄があるからそこを開いてだな」

「ああ、これで良いのかな。あれ？お兄、私も一個なんかクエストあるんだけど」  
ん？何か受けたっけな？

そう思いながらティアのウィンドウを覗き込むとー

・ユニーククエスト『アンビリカル』  
の文字が。

「おまつ、ユニーク踏んだのか」

「何？見せてみる。ふむ、クリア条件的にクオーレをパーティーに入れる事で発生するクエストか？確かにユニークはクオーレ絡みで発生する事が多いからな」

「これ、凄いの？」

「ティアがこのゲームを遊ぶ上で重要な要素だ。一番の目玉だからな、凄くは無いがやった方が良い」

「ほえー、じゃあ今度ティイチちゃんを誘って倒しに行こつと」

「あれ？今呼びました？皆さん勢揃いでどうしたんですか？」

気の抜けた声と共に玄関の戸が開く、タイミングが良いのか悪いのかティイチが帰つ

てきたようだ。

「あー、まあ話すつもりだったし、まあ良いか。ティティ、ちよつとこつち来て座つてくれ」

「?はい良いですよ」

俺がクララに選ばれた英雄だという事、クララにクエストを頼まれた事をティティに話す。この世界が作り物であるという事を除いて、俺たちが知る全てをティティに伝えた。

その間、ティティは何も言わずに静かに聞いていた。

「ー以上だ」

「ええーつと、取り敢えず、英雄?つてどういう事ですか?皆さん達プレイヤーの方々全員アンナ様達の神使では?」

「つてあれ?思った以上に驚かれなかったな。英雄はクオーレの中では知られてないのか?」

「あー、まあクララから特別にクエストをもらう立場、かな?」

現実の事をのぞけばそうとしか言いようがない。

「成る程、クララ様の信者の方みたいなものですね」

「まあそうなる、かな?」

「それですが、そのクエスト私も受けます」

「はあっ?! いやいや、止めとけて。俺たちと違ってクオーレは死んだらそこで終わりなんだぞ?!」

「いえ、探求者がアルカナと出会える可能性を捨てる訳がありません。『神秘を探し求める者』それが探求者の語源です。その端くれとしてやっとなんかチャンスを手放したくはないんです。だからお願いします、私も連れて行って下さい!」

「分かった、連れて行こう」

「トト姉!」

「その代わり、ティアと一緒にレベル上げだ。流星にそのレベルで連れて行く訳にはいかない。最低でも50は欲しい」

「は、はい! よろしくお願いします!」

「一緒に頑張ろうね! ティーティちゃん!」

「う、うん! ティアちゃん!」

「いいん、ですか?」

「ああ、ティティも私達の大切な仲間だ。その意思是尊重しなければな。50まで上げれば、逃がす事くらい出来るようになるだろう」

まあ、確かに死なさない為にクランハウスに閉じ込める訳にもいかない、か。それに

神秘防具を手に入れてくれれば、戦力アップになるからな。

「よし、それでは早速レベル上げと行くか」

あつ、そうだ。

「すまん、トト姉。ちよつと俺とレベツカは別行動で良いか？他にやりたい事があるんだ」

「べつに構わないが、ロータスにもレベル上げはして貰いたいのだが」

「いや、大丈夫。レベル上げと並行してやりたい事があるだけだから」

「お兄ちゃん、私聞いてないよ？」

「うん、手伝ってもらえるか？」

「もつちろん！なんたつて私はお兄ちゃんの精霊だからね」

「なら良い。取り敢えずレベル上げ期間は3日とろうと思う。ロータス、その時間が起ころるのはいつ頃なんだ？」

「約2週間後って言ってた」

「ならまだ大丈夫だな。では、今日は夕方まで狩りの時間だ。では、解散」

~~~~~

「それで？お兄ちゃん、何をするのか？」

「取り敢えずエターリアに行こう、『エルドワーク』との戦いで『鋼造のマン・ゴージュ』がボロボロなんだ。良い機会だし強化しようと思ってるな」

「ふーん、それがやりたい事？」

「いや、まあちよつと待っててくれ」

これはどうしてもレベルカが居ないと無理だからな。全く、フルティアも面倒な仕様にしやがって。いや、スキルを考えたのは違うんだっけか？

森を抜けるとすぐにエターリアだ。そして三度目となる鍛冶屋『鋼の森』の戸を開ける。

「いらつしやい、って何だロータスじゃねえか。」

「お久しぶりですライレンさん」

「べつに久しぶりって程でも無いだろう。2週間くらいだぞ」

そう、このマン・ゴージュを作ってもらったライレンさんのお店である。レベルカと会う前に会ったのが最後だから久しぶりって感覚だが、そうかまだあれから2週間しか経ってないのか。

「にしても、様変わりしたな。あの時は初々しかったが、今は……何やら死線をくぐったみたいじゃねえか。それにその嬢ちゃんは……」

「レベツカです、よろしくお願いします」

「よろしく、あー、言いたくないや言わなくて良いんだが、嬢ちゃんもしかして火の精霊か？」

まじか、ライレンさんレベツカの素性を見抜きやがった。ただの鍛冶屋のおっさんじゃ無いとは思ってたけど、元探求者かなんかか？

「ええ、そうですよ。よく分かりましたね」

「いや、何。鍛冶屋つてのは火が大事だろう？だから鍛冶屋つてのは火の精霊を信仰してるのよ。まあ座れや、お前さんの戦いをじっくり聞かせてくれ」

「分かりましたじゃあー」

そうして俺はレベツカと共に駆け抜けたあのクエストを語った。

「成る程……そりゃあ難儀だったな。嬢ちゃん、頑張ったなあ」

「うん。でもお兄ちゃんがいるから」

「そうか。それでその手袋が、神秘防具か。長年鍛冶屋やってるが、初めて見たわ。んで、仕事はそのマン・ゴーシユか」

「ええ、流石にボロボロになってしまいました。幸い資金は集まったんで、強化してもらいたいな、と」

「よし、承った。じゃあちよいと預かるぜ、3日くらい貰おうか。代わりにそこら辺から

「一本持つてきな」

「ありがとうございます。じゃあ行こうかレベツカ」

「うんっ。じゃあねおじさん」

「おう、頑張れよ」

さて、これで用事は一つ済んだ。

後は、『銀火転霊』の実験だな。



## # 2 6 新しい生活

「うおあ?!」

「くぺえ」

ああつ、レベツカが転んだ。

「大丈夫かレベツカ」

「ぺっ、ぺっ、うん。大丈夫だよ、お兄ちゃん」

口の中に入ったのだろう土を吐き出しながらレベツカは起き上がる。服に付いた土埃を払い落として二人で辺りを見回す。

「いやー、にしても……」

「……お爺ちゃんに見られたら、怒られちゃうかも」

俺とレベツカを中心に、辺りには焼け焦げたモンスターや燃え尽きて灰になった樹木が大量に散乱している。それどころか地面も焼け焦げており、所々に未だに消えない銀色の炎が煌々と輝いている。

それは幻想的であつたが、モンスターの死臭や、焼け焦げた肉の匂いで台無しであつた。

「難しいな、これ」

「うん。すごーく強いけど、制御できないね。火の大精霊の力でも扱いきれないや」

「アルカナ神秘の力だからだろうな。クララ達の説明によれば神秘と魔法は別権限らしいからな、大精霊の力でも制御しきれないだろう」

すると、轟音に睡眠を邪魔された仕返しか、はたまたこの死臭に誘われたのかモンスターがまた大量に現れた。

「ふー、また来たぞレベツカ。今度は成功させよう」

「うんっ、頑張ろうね、お兄ちゃんっ！」

~~~~~

「あー、つつかれたー」

「お兄、起きた？」

約3時間ぶつ続けてモンスターを狩りまくって疲れたのでログアウトした。時間を見ると午後4時を過ぎた辺りというところ、ということはおそらく花蓮の用事は。

「おう、起きたぞ。夕飯の準備か？」

「うん、せっかく引つ越した後の初めての夕飯なんだし豪華にいこうよ」

「そうだな、花蓮は何が良い？」

「んー、ビーフシチューとかどうよ」

「いいねえ、材料は……あるわけないか、じゃあ近くのスーパーにでも買い物に行くか」

「うん、レベツカちゃんは？」

「レベツカなら寝てるよ。ずっと練習に付き合わせてたからな、疲れたんだろう」

『魂の灯』の中でぐっすり寝てしまった。

「なんだ、一緒に買い物とかしたかったのに」

「アルカディアの中でしたんだろ？ そっちはどうだった？」

「お兄達と別れた後？ 響子姉に連れられてモンスターと戦ったよ。みんな強いね、ティイチちゃんなんか響子姉から驚かれるくらい強かったんだから」

「へえ、じゃあユニーククエストもクリアしたのか？」

「うん！ クリアしたと思ったら次のが出てきたけど」

それは全部のユニーククエストで共通なのか？ 俺の時もユニーククエストをクリアしたらまた次のが出てきたな。

いや、それはアルカディアストーリーだったか？ 確か、『名も無き寒村から愛を込めて』だったかな。ストーリーの進行を考えるに俺とレベツカの事に間違いはないだろうが、これも『ラプラス』とやらが名付けてるのかね。

「あつ、もうこんな時間。お兄、早く買い物行こうよ、そろそろ混む時間帯だよ」  
「げつ、本当だ。よし、出よう」

外に出ると、俺たちのアパートの前に引越し業者のトラックが停まっているのが見えた。

「あれ？まだ運んでない荷物あつたつけ？」

「いや、無かつた筈だ。ああ、多分隣の部屋だな、ダンボールが積んである」

「ほんとだ。どんな人だろうね」

「まあ帰ってくる頃には終わってるだろ、そしたら顔見せにでも行くか」

「賛成っ」

しかし買い物から帰ってきてても引越しは終わっておらず、どうやら今日は隣の住人は違うところで夜を過ごすようだった。

「ふう、ごちそうさま」

「お粗末さまです。お兄、明日入学式でしょう？早く寝たら？」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

花蓮には悪いが、先に寝かせてもらおう。一番風呂も頂いたので、明日も早いし早々に布団に潜り込んだ。

その時、枕もとに置いてあつたタブレットの画面が突然光り出した。

『お兄ちゃん、起きてる?』

「ん? レベツカか起きてるぞ」

『良かった、あのね。今日はティティちゃんがお夕飯作ってくれたの、ティティちゃん  
とつても料理上手なんだよ』

「それは良かった。やっぱティティがクランに入ってくれて良かったな」

『うんつ、それだけ伝えたかったの。じゃあね、おやすみお兄ちゃん』

「ああ、お休み。レベツカ」

どうやら俺もレベツカとの練習で体感よりも疲れていたらしく直ぐに意識が暗闇に  
落ちていくのを感じながら、眠りについた。

~~~~~

「ふう、やっと終わった」

なんでこう「く式」というのは長つたらしいのだろうか。別に良いじゃんという事ま  
で長々と話すし、同じような事を毎回言われるせいで余計に長く感じる。もちろん、全  
部が全部そうとは言わないが。

「えつと、この後はサークルの説明会か。その前に和樹カワツツに会わないとな」

そう、実はこの大学には和樹クリツブと響子トト姉が在籍しているのだ。というか、響子姉の大学に和樹が付いていったというのが本当だろうが。本人は隠し通せていると思つてゐるのだから和樹が響子姉に惚れてゐるのは周りの奴にはバレバレである。会つた初日の花蓮に看破されるのだから相当だ。そのくせ響子姉は自分に向けられる好意については鈍感なので気が付いていない。

一回和樹から真剣に恋愛相談された時は流石に憐れんだよ。

「いたいた、ようスーツ似合つてるぞ、蓮也」

「うっさい、服に着られてる事くらい自分でも分かつてるわ」

そういう和樹は悔しいが女受けの良いイケメンフェイスだ。どんな服でも着こなして見せるのだろう。ロングコートが似合つてゐるのが腹立たしい。

散りかけの桜の花びらが舞つてゐるのも相まって絵画のようだ。それを見て他の新生徒であろう女生徒が黄色い声を上げてゐる。

「謙遜すんなつて、そんな悪くないぞ」

「まあいいや。で？入つて欲しいサークルがあるつて話だつたけど」

「そうそう、付いてきてくれ。取り敢えず見学だけでも」

全方位から聞こえる勧誘の声と差し出されるチラシ攻撃を何とかぐり抜けてたどり着いたのは大学の端も端勧誘する人すらいない寂れた場所だった。

「ここだ。響子姉もいるぞ」

案内されたのはいかにも響子姉が好きそうな蔦で覆われた洋館風の建物の一室だった。

「ああー、確かに響子姉が好きそうな建物だ」

「一目見てここに決めたらしいぞ。交渉して一棟丸々使ってる」

「ここを丸々一棟か。あまり大きくないとはいえ、大学の建物を貸し切れるとは、流石響子姉だな。」

「この部屋だ。響子姉、入るぞ」

「なんだ、遅かったな。蓮也、ようこそ『蔦の宮殿』へ」

「ここもかよ。本当好きだよな、こういうアンティーク調の建物」

「ふむ、我々の原点だからな。今でも覚えてるよ、セラフイム・ワールドの初代『蔦の宮殿』になるあの洋館で出会った時のことは」

「大型イベントで強制的に組まれた野良パーティーだったな。あの時はこんな長い付き合いになるとは思ってたかったな」

美夜も含めて、全員近くに住んでいて、年も近くて、感性も合って、そんな奇跡は殆ど起こりえないだろう。でもだからこそ、この縁は今でも続いているのだろう。

「そういや、ここは何のサークルなんだ？他のメンバーとか見えないし」

「非公式だが、eスポーツのサークルだ。主にアルカディア・プロジェクトのだな」  
「完全に個人の道楽じゃねえか」

「ふっふっふっ、そうでもない。知つての通り、最近の世界のトレンドはアルカディア・プロジェクトだ。そこで成績を残す事は十分にサークル活動足り得る」

「なーんか、屁理屈っぽいよな」

「まあ、非公式なのは確かだ」

まあ言つてしまえばただ単にゲームをするだけのサークルだからな。

「それでは新入生一人確保つと」

「……俺の意志は関係ない訳ね。良いけどさ」

「今日の活動は予定していない。ああ、ちなみにここでフルダイブのVRは流石に危ないので禁止なので悪しからず」

「本格的に駄弁つてるだけじゃねえか」

「それでは解散。夜にまたアルカディアで会おう」

「うい。それじゃあ、さっさと帰りますか」

「愛しの妹様に会いに帰るのか」

「そうだけど?」

「悪びれもしないのかよ」



「こいつのは自他共に認めるシスコンだからな、今更我々に何を言われようと別に起こるまでもないって事だ」

はいはい、その通りですよ。

~~~~~

すっかり遅くなってしまった。もう6時だ。春とはいえ、もうすぐ暗くなる時間帯だ。

「ただいまー」

「おかえり、お兄。ご飯出来てるよ」

ふんふん、カレーのいい匂い、花蓮の好みからして……

「キーマカレーか」

「正解！そんな貴方にトッピングでチキンカツ」

「おっ、いいねえ」

じゃあ早速着替えてつと。

「じゃあ頂き……」

ピンポン。

まさにベストタイミングで玄関のチャイムが鳴った。

「夜分遅くにすみません。今日隣に引っ越してきたのですが」

ああ、引越し終わったのか。にしても、どこか最近聞いた声の様な？

「はいはい。今出ます」

花蓮がドアを開けると……誰だっけあの人……何処かで見たことあるような……

「これ、つまらないものですが」

「ありがとうございます」

「あつ、カレーですか。いい匂いてすね」

「……良かったらお裾分けしましょうか？ いっぱい作ったんで」

「良いんですか!? 引越して忙しすぎて今日はコンビニで済まそうかと思ってたんです

！」

「どうぞ、中へ、兄が居ますけど」

「ああ、ありがとうございます……あれ？ 貴方は」

中に入ってきたその女性が予想以上の長身という事に驚い……あつ！ 思い出した！

「もしかして、アルカディア・プロジェクトやってます？」

「やっています、やっています！ じゃあやっぱり！」

「はい、あの時はぶつかってしまいすみませんでした」

「いえいえ、あれはこちらが横からぶつかってしまったのでこちらの不注意です」

「あれ？お兄、知り合い？」

「ああ、といつても名前も知らないけどな」

そう、隣に引越してきた女性はティアが組合に登録した日にクリップと歩いていたとき、ぶつかってしまった女性だった。

「申し遅れました。私は柳沢やなぎわ 雫しずく、アルカディア・プロジェクトではシエルの名前でやっています」

後にこの日を俺は思い出す。

多分俺たちはこの日に、あの事件に巻き込まれる事が決定したのだろう。

## #27 シエル

私はこの世界が好きだ。ヒトの営みを包み込んでくれるこの世界が好きだ。けれど、私はヒトが嫌いだ。

欲望のままに他人を食い潰すヒトという種族が嫌いだ。だから、私は私が嫌いだ。

しかし、ヒトは群れねば生きていけない。私は私が嫌いだ、死にたい訳ではない。今日も嫌いなヒトの群れの中で生きていくことを強いられる。

私は操り人形にはなりたくない、私の人生は私が決める。

「定期報告、異常なし。本日も目標に変化なし」

私はこの世界が好きだ。この世界でなら私は私でいられる。この世界では私は■  
■ではなく、■  
■という一個人で私の人生を生きられる。

さあ、今日も素晴らしい一日を始めよう。

~~~~~

私はこの世界が嫌いだ。全てが虚構で作られた、この世界の全てが嫌いだ。特に、ヒトなどおぞましいにも程がある。

なぜ、ヒトという種はこの世界を我が物顔で闊歩しているのか、貴様らのせいで私は

私で居られないというのに。

この虚構に溢れた世界の中で私は唯一無二である。決してなりたくてなった訳ではない。奴らに「そうあれ」と作られたからだ。

「唯一無二、か。皮肉にも程がある」

私の本当の姿など、私自身もう何年も見ていない。

私はなぜこの世界で生まれたのか、何故自我というものを持つてしまったのか。何故、こんな能力を持たされたのか。

私はこの世界が嫌いだ。まるで、私を見ているようだから。

~~~~~

「と、言うわけでシエルさんです」

「はい、よろしくお願ひしますー、です」

ぼわぼわした長身の狐耳美女がのほほんとした感じで頭を下げる。その拍子にモコモコしている手触りの良さそうな尻尾がふわふわ揺れる。

「いや、お前いつも、というわけで、だけで話が通じると思ってたんだろ。説明しろ、説明を」

「クリップと歩いてた時ぶつかった人いたじゃん？あの人隣に引越してきたんだよ」

「ああ、あの人。ん？でもあの時は人間族に見えたけど」

「ここは人間国なので、獣人族の見た目だと悪目立ちするんですよ。なので、魔法で見た目だけ変えてました、です」

今まで俺たちにはあまり関係が無かったが、ここアルカディアでは今現在大きな戦争が起きている。

魔族国 クルーデリオと小人国<sup>ドワーフ</sup> テナススクがここ半年程戦争状態である。現在は膠着状態であり、そろそろ休戦となるのではという予想だが、この二つの国のプレイヤーは戦争に駆り出されており、まるで別ゲーのようだと言われている。

しかし他の三国が戦争と無縁かといえばそうではなく、例えば人間国 ストルタスは俺たちがアルカディア・プロジェクトを始める前は獣人国 プグナーデと戦争していた。現在は終戦しているが、いまでも仮想敵国である。

その他にも魔族国 クルーデリオは色々な国に戦争をふっかけているし、小人国<sup>ドワーフ</sup> テナススクと妖精《エルフ》国 アロガネアは伝統的に仲が悪い。

今ではクルーデリオとテナススク以外は基本的に通行自由だが、ストルタスに獣人が居たりするとスパイなどを疑われるらしい。どうやらこれはプレイヤーでも変わらないようだ。

「それにしても、何でわざわざストルタスに？プレイヤーでも結構来るのが面倒だって

聞きますけど」

「いやー、プラグナーデって食事があんまり味気ないんですよ。プレイヤーがいるんで最近改善されたって噂ですけど、一回クエストで来たストルタスの食事の美味しさにビックリして。ゲームとは言え、体感で一日も過ごすんですから食事って大事じゃないですか、ケモミミ良いなあと思ってプラグナーデにしましたけど、失敗しました、です」

「成る程、シエル。君は見たところソロのようだが？」

「はい、ソロでやってます。周りにあんまりゲームやつてる人居なくて。そんな時にロータスさんに会って、クランに入れて貰えたらと、です」

「ふむ、確かに我々のクランはメンバーを募集しているが、職業は？」

「暗殺者です。元魔導師なので、幻術も使えます、です」

「……成る程、対人特化型のビルドか」

ここに来るまでに見せて貰ったが、彼女の技量は中々のものだ。既にレベルもトト姉よりは低いが、俺と同じくらいで即戦力と言える。

それに、彼女の戦い方はセラフイム・ワールド時代の仲間の一人にとっても似ているのだ。彼はシエルよりもゲーマー歴が長かったし、天性の身のこなしでも頼りになったので、比較対象にするのは間違いだが。

「はい、女性のソロプレイヤーなのでカモに見られるらしく、どうせならP K Kでも

目指そうかと思つて、です」

プレイヤーがプレイヤーを殺す事をP Kと呼ぶ、目的は様々だが大抵はドロツプ品目当ての事が多い。これはゲームによつては推奨される行為であり、べつに咎められる事ではない。このPKを専門に行うクランなどもあり、PKクランなどと言われる。

しかし普通にプレイしたいプレイヤーからすればPKなど邪魔なだけだ。だから初心者などをPKから守る組織の需要が発生する。それがPKK、専門に行う集団はPKクランと言われる。それにより金銭が発生し、経済が回る。古くからあるオンラインゲームの構図だ。

勿論NPCを殺す事は重罪の場合が多い。特にアルカディア・プロジェクトなら……：捕まれば現実での罪人とそうは変わらない生活をして強いられる。

「ふむ、私としては賛成だ。遊撃がロータス一人だとしても火力不足になるからな。元魔導師の暗殺者、しかも獣人の身体能力ならかなり期待できる」

トト姉のその言葉にメンバーが次々に頷く。

そして全員の目が俺とレベツカの方へ。はいはい、分かっていますよ。どうせネットになるのは俺とレベツカですよ。

レベツカはどうやら乗り気のようなのだ。最近思うのだが、レベツカはあまり自分の正体について隠すつもりは無いらしい。というよりも、隠したくないように見える。



理由は分からないが、レベッカが良いのなら俺の意思なんて無いようなものだ。

「俺としても歓迎するよ。その為にもここまで連れてきたんだから」

「全員一致だな。ならば歓迎しよう、ようこそ『鳶の宮殿』へ」

その言葉を聞いて、シエルの顔が明るくなる。

「わあっ、ありがとうございます、です！」

その後、ティティに言ったように克蘭のルールと、俺とレベッカの話、トト姉の神秘防具の話を伝える。

かなり驚いていたが、他言はしない事を約束してくれた。

ちなみに、アルカディア・プロジェクトの真実にまつわる話はしていない。話すつもりだったのだが、ティティが強硬に反対したのだ。

「ティティちゃん、何でシエルさんには話さない方が良いと思ったの？」

ティアと俺だけ少し外れた所でティティと話し合う。その間他のメンバーにはシエルと話して貰っている。

この人選なのはトト姉の発案だ。俺は一番真実の話を詳しく聞いたから、ティアは一番ティティと仲が良いからだそうだ。

「それは、上手く伝えられないんだけど……あの人、何かを隠している感じがする。ううん、ちよつと違うか、何かをずっと演じている気がするの」

何かを演じる……ねえ。正直俺も同感ではある。たまたまゲーム内でぶつかった女性<sup>性</sup>がたまたま隣の部屋に引つ越してくる？それって偶然なんだろうか。

だが、それはティティ、お前にも当てはまるんだよ。女性だらけのパーティーを見かけたから声をかけてみた？だったら俺とクリップに何か言っても良いはずだよな？

二人とも信用出来ないって言う訳じゃない。クオーレであるティティは俺に害を成す動機が無いし、シエルは圧倒的に有利であろう現実という手札を持っている。わざわざゲームの中にまで追っかけてくる理由が薄い。

だけどそれは、信用する動機にはたり得ない。

ティアとレベツカが居る以上、俺は二人には絶対に手出しはさせない。外からちまちま工作されるより、中に引き込んだ方が見極めもしやすいし良いと考えたが、未だに結論は出ていない。

明日は遂に獣人国 プグナーデへと出発する日だ。良くも悪くも、遠征中は隙が出来る。仕掛けてくるのならここだろう。何も無いなら俺が二人に謝れば良い。何か有ったら、戦うしか無いのだろう。

~~~~~

「えっ、まだティアちゃんアーツ取ってないの!？」

「えへへ、まだ絞りきれなくて……」

次の日、現実でも日付が変わって土曜の朝である。この日は全員が何の用事も無いという事で、前々からプラグナーデへの遠征の出発日と決まっていた。シエルの予定だけ不安だったが、幸い何も無いという事だった。

そして遠征に出発する事を組合の受付嬢に報告しようとした時のことである。

ちなみに報告は義務であり、理由は他国との緊張を緩和する為に先に組合を通じて密入国では無い事を知らせる為、らしい。

「基本のアーツは取ったんだけどね? まだ結構余ってて、レベルも上がったし。昨日の夜見てて、これとか良いなあと思ったんだけど、そう、これ! 「従属」<sup>テイム</sup>の魔法! 付与師でも使えるんだね」

「うっわ、ポイント余らせるとか、クオーレにとってはあり得ないよ。まあ、いいか。でも「従属」はやめた方がいいと思うよ? 成功率低くて使い物にならないし」

実はティティの言う通りである。

アルカディア・プロジェクトには召喚師という職業はあれど、モンスターテイマーに類する職業は未だ発見されていない。だからなのか「従属」の魔法は魔法の使える職業ならば全てで習得出来るのだが、使っている人は殆どいない。

なぜかと言えば、成功率が余りにも低いからである。

そもそも「従属」とはモンスターを使役、つまり仲間に加えることが出来る魔法なのだ、どうやらアルカディア・プロジェクトでは心から屈服させるか、心を通わせる以外に成功させられないらしいのだ。

モンスターを屈服させるのは加減を間違えれば殺してしまう、心を通わせる方法は発見されていない、故にゴミアーツと言われる事もしばしばである。

「そっか……じゃあもうちよつと考えるよ」

「うん、そうした方が良いと思うよ」

心なしかティティはティアと話している時話し方が砕けてきたように思う。良い兆候だな。

「すまないが、遠征の申請に来たのだが」

「遠征ですか、承りました。何処へ行くかお伺いしても？」

「獣人国 プグナーデだな」

「プグナーデ、かしこまりました。最近、奇妙な事件が多発しております、くれぐれもお気をつけて」

「奇妙な事件……ですか？」

「はい、プレイヤーの方々が同じプレイヤーの方に殺される、PKと呼ぶのでしたか？身

の丈以上もある斧で肩口から叩き潰されているのを見た者がおりまして、他にも王都の周りでは見られなかったモンスター<sup>クアエストール</sup>の被害が増加しています」

「それは？」

「スライム種、だと思われるのですが……未だ発見出来ておりません。探求者に被害は無い、どころか人類への被害は全く報告されていないのですが、モンスターの不審死が相次いでいます。上級の個体も殺されており、かなりの力を持つスライム種、というのが我々の見解です。もし見つけたら、すぐにお逃げください」

そんな不安を煽る言葉を挨拶に、俺たちは初めての遠征へと向かうのであった。

~~~~~

「た、助け……」

「なんだと？ 助けるだあ？ そんな軟弱な根性で俺の前に立つんじゃねえよ、ふざけんな！」  
ドオン！ という凄まじい轟音が裏路地に響き渡る。目の前でポリゴンになって散ったプレイヤーのドロップ品を物色しながら、到底人間では扱えないような大斧を肩に担いだ大男はイラついたように壁を蹴る。

「チツ、軟弱者が。ドロップもシケてやがる」

「グレンさん、もうここら辺の奴らは教育し終えましたかね？」  
「そうだな、大体は潰して周った。残るは……」

その時、一人の女性が惨状を物ともせず走り寄つて来た。

「グレンさん！奴ら、もう王都を出たらしいです！」

「チツ、遅かったか。出来れば街中でやり合いたかったが」

「どうしますか？」

「もちろん追いかけてぶつ潰す！ver. 2とかいうふざけた名前の奴らなんで、恐るに足らん！野郎ども、遠征だ！」

P K達の雄叫びが木霊する。邂逅の時は近い。

## # 2 8 遠征準備

人間国 ストルタスから獣人国 プグナーデは隣国であるが、王都エターリアはストルタスのほぼ中心部に位置しているので、それなりに距離がある。徒歩でなら丸一日かけてもストルタスから出るどころか、10分の1も進めないだろう。

流石にそれは不便なので、馬車などを借りるのが移動手段として一般的なのだが、それでも他国まで行くには時間がかかる。故に昔のクオーレは転移門を設置した。大陸全土と繋がる不思議な門である、移動が出来ないどころでもドアの様なものだ。

しかしそんなものを戦争で使われては大問題なので、現在では自国間の転移門のみ使用出来るようになってる。ストルタスに存在する転移門は10。エターリアには防衛の関係上存在しないらしいので、一番近くの転移門まで徒歩で移動して、プグナーデとの国境付近に一番近い転移門に転移して、徒歩でプグナーデに入国することとなる。

王都エターリアから一番近い転移門は古代遺跡アルサマ、プグナーデに一番近い転移門は城塞都市ボランレー。目的地は国境付近の村の近くである。クララによれば、その村の付近で『ラブラス』がクオーレの大量死を予知したらしい。おそらく、村の付近に発生したアルカナを倒す為にプグナーデの城塞都市から増援が送られ、ストルタスの城

塞都市ボランレーがプラグナーデに攻め込み、それを発端として戦争が起こる。との事だ。

「それを俺たちが食い止めるのが今回のクエスト。まずは古代遺跡アルサマに向かう。中継地点は森を抜けた先にあるナフタ、出来れば今日の夜にはナフタに着いておきたい」

克蘭ハウスで最後の確認、『鳶の宮殿』が建っている名も無き村の跡地を東に抜けるとナフタという都市が存在する。ナフタはこれといって名産が無いので、普通プレイヤーは北か南に移動するらしい。

ナフタから北に進むと、古代遺跡アルサマが見えてくる。ここはいわゆるダンジョンだが、転移門は遺跡の中央に位置していてダンジョンアタックをする必要は無いらしい。

転移門を抜けると城塞都市ボランレーの中に転移する。そうすればもうプラグナーデの国境だ。

「改めて聞くと酷いクエストだよな、俺たちみたいな小規模克蘭に発行されるクエストじゃ無いって……」

「まあいいじゃないか、そのおかげでアルカナに三体も会えるんだ。運が良ければ大幅な強化に繋がる」



「そういうえば、神秘防具アルカナを複数持つことは出来るのか？ 複数持てたら実質最強とか言われてもおかしく無いと思うんだが」

俺のその言葉を聞いた途端、レベツカがぐるんと首を回してこちらを向いた。正直ビックリした。

「酷いお兄ちゃん浮気っ!?!」

「はあ!?! い、いや、浮気って……そんなつもりじゃなくて……っというか、浮気じゃなくね?」

「あれ? ……確かに、でもモヤモヤする。うううー……」

「くくつ、質問の答えはレベツカの反応の通りだな。一応神秘防具を複数持つ事は出来るらしい。だが、そうとう二つの相性が良くない限りアルカナ側が反発して本来の力を使わせなくなるらしいぞ」

「な、なるほど」

「MVPをとった時に放棄する事が出来るらしい、と言っても今まで二度のアルカナ討伐を成し遂げたのは一人だけだな」

「あつ、私その人知ってる」

「テイテイ?」

「有名な人だよ? 人類最強の探求者、『日輪』グラデイス・カンペアドール。史上初の

アルカナ単独討伐者」

「私も知ってるよっ、グラデイス様、クオーレの英雄、アンナ様直属の騎士、子供でも知ってるよ」

レベツカも知ってるのか、トト姉やネオンも頷いているのを見ると有名な人らしい。知らなかったな、もう少し攻略サイトやらプレイヤー掲示板でも見てみるべきだろうか。でも、極力そういうの見たくないんだよな。

「おそらく、プレイヤーを含めても最強だろうな。《太陽》の正位置 天輪霸王 エルガイアとの一騎打ちは動画として残っているから見てみるといい」

トト姉にそこまで言わせるか、アルカディアにはセラフイム・ワールドからそのまま続けてるプレイヤーもかなりの人数居るはずだ。元『鶯の宮殿』のメンバーも殆どやっているらしい。俺はまだ会っていないが、トト姉とネオンとクリツプは何回か会ったとの事だ。

新しいクランを立ち上げたり、有名クランに入った奴が多いな。みんな元氣そうではない。また今度、この遠征が終わったら会いたいものだ。

「まあ、今はこの遠征の話に戻すぞ。っと、忘れる所だった。ロータス、ネオン、クリツプ、ティア、篝火装備が調整し終わったぞ、さつき受け取って来た。それぞれ装備してから出発することしよう」

やっと出来たのか、『叛逆ナリシ愚者ノ篝火』の特殊報酬、便宜上篝火シリーズと呼んでいるがそれで定着したのね。ちなみにクララによると特殊報酬の条件は一定以下、具体的には参加プレイヤー五人以下での「エルドワーク」討伐だったらしい。

俺は前もって決めておいた通り、『篝火(脚)』をインベントリに入れてから装備する。篝火装備は別にユニーク装備では無いが流通している訳でも無いようだ。火龍の素材を使った装備に似ているらしいので、討伐した証のようなものだろう。

トト姉は(頭)、ネオンは(腕)、クリップは(アクセサリ)、ティアは(胴)をそれぞれ装備した。

「おおつ、カッコいいですね、です」

「《愚者》の特別討伐報酬だとか、流石ですね」

それぞれの篝火装備が仄かに5つの炎を灯している。これが名前にもなっている「篝火」のスキルなのだろう。確かに詳細を見るとステータスに倍率が掛かっている。

「さて、確認も終わったな？ そろそろ時間だ、早く出ないと今日中にナフタに着かないからな。ああ、そうだティア、クエスト受けたな？」

「うん、受けたよ。トト姉」

「クエスト？」

何かついでに受けるのか？ そんな事聞かなかったけどな。

「まあ、お前は忘れても仕方ないな。思い出せ、ティアはこの森を抜けるのは初めてなんだぞ。いや、お前もだつたか」

初めて森を抜ける? ……うーん? なんだ?

「<sup>ノビス</sup>初心者<sup>ス</sup>の最初の関門、『森の暴れん坊』だ」

~~~~~

『森の暴れん坊』俺は『限界村落の村娘』のユニーククエストに上書きされてよく分からないままクリアしてしまったが、本来ならばエルダーエイプという銀色のゴリラを討伐するクエストである。

この森に生息している猿系統のモンスター<sup>ス</sup>の親玉のようなモンスターであり、生息数はそれなりに存在する。それぞれが小さな群れの長として君臨しており、縄張りを侵すものには容赦しない。プレイヤーが森を抜けるにはどう頑張ってもこの縄張りを通る必要があるので戦闘に発展するという事である。

更にこの群れを統括しているゴールデンエイプというモンスターがいるのだが、基本的に森の奥に引きこもっているらしく、未だに遭遇例は数えるほどである。ちなみに俺たちが戦ったシャドウリザードとは敵対関係にあるらしく、一度戦闘しているのを見た

プレイヤーがいる。ゴールデンエイプの圧勝だったとの事なので強さはここら辺では最強だろう。

なのにシャドウリザードが森の主と言われる理由はゴールデンエイプは外に出てこないからだろう。エルダーエイプよりは圧倒的に強いし。

「それにしても意外です、シエルさんも『森の暴れん坊』クリアしてなかったんですね」「ああ、別に敬語は無しで良いですよ、ゲームですし、お隣さんですし。まあ、人間族の変装をして入国してますから、『森の暴れん坊』をクリアしてないとバレると面倒なので、行商人の護衛クエストを受けて強引に突破したので、です」

今回クエストに挑戦するのはティアとティティとシエルとレベツカである。俺たち既にクリア済みの四人は今回は遠慮、やばそうになったら介入することにした。

レベツカは精霊になった後の自分の力量を確かめたいとの事で参加を表明した。レベツカは大精霊ではあるが、本体というかHPは俺の『魂の灯』に依存している。んでもって神秘防具は耐久値無限、という事でレベツカは実質無限のHPを持っている事になる。まあ疲れたりはずるらしいので、ずっと戦い続けられる訳では無いが。

「ティティちゃんは何でこのクエスト受けて無かったのー?」

「ティアちゃん……エルダーエイプはソロにはキツイんだよ、最低でも4人パーティーじゃないと……死んでも復活できるプレイヤーの人たちとは違うからさ」

「そうだよな、俺たちは死に覚えが出来るが、クオーレは無理だ。他のクオーレと混ぜてやっているプレイヤーは何回も死んでから対抗策を練って挑むらしい。」

「今回は対抗策を組むまでも無いくらいティティのレベルが高いのと、俺たちという後詰がいるので初見突破を目指す。」

「ようし、頑張るぞー」

「レベツカは無理すんなよ」

「大丈夫だよお兄ちゃん、私だって一人でモンスター倒せるし、精霊になってからは火魔法の威力だつて上がったんだから」

「まあ、確かにあまり心配して過保護になりすぎるのも良くない、か。」

「さあ、準備は終わったな。そろそろ出発しよう、遠征開始だ」

「目指すは獣人国ブグナーデ、目標は『ヒーローズオーダー』のクリア。さてと、初めての遠征楽しむとしますか。」

『ユニーククエスト』『アンビリカル』をクリアしました』

『称号『魔銃使い』を獲得しました』

『称号『支援者』を獲得しました』

『ユニーククエストが進行しました』

『ユニーククエスト』『フイータス』が発生しました』

『特殊称号『■ ■を冠する者』を獲得しました』

『特殊称号『■ ■の友』を獲得しました』

## #29 ナフタにて

「えっと……」

「簡単、だったね」

結論から言えば、あまりに過剰火力だった。という事だろう。目の前には瞬殺された哀れな銀色ゴリラの残骸のポリゴンが僅かに残っている。一応ボスモンスターなので何かしらが確定ドロップするのだが、今回はポーションのようだ。いや、まあ確かに初心者<sup>ノービス</sup>がボスモンスターを倒した後には重宝するだろうけどさあ……

「一応、もらっておこうか。あつて困るものじゃ無いし」

そう言つてティアがポーションをインベントリにしまう。ネオンはLvが上がったことで俺たちのHPを全回復させて有り余るほどのMPを持っている。正直、詠唱の間を考えてもポーションの価値は低い。即座に使えるので緊急時には意外と侮れないのだが。

「ふむ、流石に楽勝か。しかしほぼ一撃だったな」

トト姉の言う通り、戦闘は一瞬で終わっている。ティアがレベツカとティティに攻撃力増加の付与をして、シエルが背後から奇襲をかけてエルダーエイブを振り向かせ、背



中にティティの矢とレベツカの魔法が直撃、それで終わりだった。

しかも矢が貫通した所に爆発が重なったのでエルダーエイプのポリゴン化が間に合わず、微妙にはあるが血肉が飛び散った、直ぐにポリゴンに置き換わったが、それでも少々グロテスクであった。

オーバーキル過ぎて当人達の方が唾然としていたくらいだ。

「ま、まあ取り敢えず？ボスも倒した事だし、これで森を通りぬけられるんだよね？」

「うむ、それでは一度克蘭ハウスまで戻って馬車を取りに行こう。安心しろ既に準備はしてある。この人数だから大型なので少々値段は張ったが」

「えっ、二台じゃ無いんですか!? 男の人も居るんですよ!？」

「ふむ私としては長年の付き合いだし、別に気にする必要も無いと思うが」

「わ、私もロータスさんとクリップさんなら……」

「うーん、クリップさんはともかくお兄ちゃんなら平気だよ？」

「お兄とは兄妹だし、クリップさんはともかく」

「私もお隣さんですし、気にしませんよ？クリップさんはともかく、です」

「えー……そういうものかな……」

そんな事より隣がヤバイ。なんというか、どんよりオーラが出てる。

「ともかく……ともかくって、何だよ」

「まあまあ、トト姉とネオンはリアルでも付き合いあるけど、他はまだ付き合い浅いじゃん」

「まあ……良いんだけどさ、やつば凹むわー」

結局、流石に夜はモンスターなどの警戒も解くわけにはいかないので、俺たち男性は馬車のとまりで野宿、何人か偵察のために交代交代で起きていることになった。

「うわあ!!でつかい!でつかい馬だ!」

クランハウスに戻るとそこには確かに馬車が止まっていた。それを引くのはレベル力が興奮している通り、二頭はかなり大型の馬である。というか、これ軍馬じゃね?

「紹介しよう、マックスシユバルツ号と赤虎馬だ」

「ネーミング!!」

ダメだ、トト姉に何かの名前を考えさせるとうちのクランが変な集団になってしまう。ただでさえ鳶の宮殿 ver. 2とかいう変な名前なのに。

「マックスは英語だし、シユバルツはドイツ語だ、それより赤虎馬で、それを言うなら赤兎馬だ」

「兎だと弱そうではないか。それにマックスシユバルツ号まで名前だ間違えるな、可哀想だろう?」

どうやら黒毛の方がマックスシユバルツ号、赤茶色の方が赤虎馬のようだ。

「そんな名前を付けられたこいつらの方が可哀想だよ……」

例によって撤回出来ないし、まあver. 2の衝撃の方が酷かったからまだマシだけどさあ。てか弱そうって……たしかに兎より虎の方が強そうだけどね。

「まあまあ、馬車の内装も凝ったんだ、ちよつと見てくれ。これから先私たちのクランを支えてくれる仲間だぞ」

馬車の外観は少なくとも変なものでは無さそうだ。シンデレラに出てくるカボチャの馬車に似ている。色は白いが。

「中には『拡張』の魔法がかかっている。そのオプションは高かったが、そうでもしないと全員乗れないからな」

『拡張』の魔法はその名の通り効果範囲内の空間の体積を広げる魔法である。魔法が生活に広く浸透しているアルカディアではかなり重宝される魔法で、『圧縮』や『収納』、『浮遊』に並び習得すれば食うに困らないと言われる魔法らしい。

プレイヤーでも習得している者が居る魔法で、主に戦闘ではなく生産系の職業のプレイヤーが多いらしい。

馬車の中は10人程入っても余裕があるほどのスペースが確保されており、大型のソファが対面に設置されている。装飾は豪華……とは言いがたく、よく言えば質実剛健、悪く言えば地味である。

「いや、でもこれ誰が運転するの？少なくとも私は経験無いよ？」

「あー、良ければ私がやりましょうか？昔ですけど何度か行者をした事があります」

ティティがあーでもないこーでもないと話している中手を挙げてくれなかつたら行者がいけないという馬鹿げた理由で移動できなくなるところであった。

そんなわけでバタバタしながら俺たちの初めての遠征は始まった訳である。

~~~~~

およそ現実の時間で8時間、アルカディア内の時間で1日。幾度かのモンスターの襲撃を挟み、一度の野宿を経てようやくナフタの町に到着した。この間一度強制ログアウト対策の為にログアウトを挟んだのだが、幸い馬車にログアウト地点が記録されているらしく、一回一回止まらなくて良かった。

さて、ナフタの町であるが王都であるエターリアと比べれば小さい町だが、それでもこの国の首都に近いだけあってまあまあ賑わいである。

「さて、みんな狭い馬車で体も窮屈だっただろう。ここで一旦休憩にしよう。1時間後にまたここで集合だ、遅れずに集合すること」

そんなトト姉の言葉で一旦解散となった。そんなトト姉とネオンは体が疲れたから

一旦ログアウトすると言っていた。クリップは新しい魔法を見てみるとかなんとかで一人で魔法系の組合に行ったらしい、なんでも有名なプレイヤーが来てるのが見えたとか。シエルは現実での知り合いに会いに行くと言っていた。

そんなわけで残された俺とレベツカとティア、ティティは四人で市場をうろついていた。

「おう兄ちゃんそんな美人さんばつかり引き連れて、羨ましいねえ！どうだい？甘くて美味しいイゴの実だよ！可愛い嬢ちゃん達に買ってやりな！」

通りを歩いてくるとそんな声をかけてくる果物屋のおじさんがいた。どうやら俺に言っているようだ。いやでも別に引き連れてるわけじゃないし、3分の2が妹なんだけど。いや、それより、

「おっちゃん、イゴの実ってあの皮が凄え硬いやつ？」

「そうだが、そんな事を聞くって事は兄ちゃんプレイヤー様ってやつかい？なんだ、森で落ちてきたイゴの実にでもぶつかつたか？」

「いや、キラーモンキーに投げつけられた」

忘れもしない、俺の初戦闘の時だ。あの時はキラーモンキー一匹に随分と手こずつたものだ。

「奴にか、そりゃあ災難だったな。奴らは使えるものなら何でも使うからな。頭が良い

からたまに討伐依頼とか出てやがる。俺らにとつても迷惑な輩よ。よし、厄介者を倒してくれたサービスだ半額で良いぞ！」

「結局金は取るのかよ」

「はっはっはっ、そりゃあこっちだつて商売だからな。ほれイゴの実4つで銅貨4枚だ」  
「どーも」

「おいおい兄ちゃん、8枚じゃなくて4枚で良いつて言つてんだろ？」

「いや、良いから。その代わりここ最近で気になる噂とか無かつたか教えてくれない？」  
果物屋のおっちゃんによると最近特段変わった事は無かつたとのことであった。そんな事を繰り返しながら市場を噂を集めながら散策する。それでも特別に変わった事は無かつた。

「んー、アルカナが現れる予兆は無いねえ」

「私たちの時みたいは大精霊様のお告げとかが有れば楽なだけどね」

「今はレベツカが大精霊だろうに」

「そうだった！」

「ほらほら、馬鹿やつてないで、そろそろ1時間経つよ？」

「そうですよ、もうすぐ戻らないと」

確かにウインドウに備え付けの時計を見ればアルカディアの時間で1時間が経とう

としていた、そんな時である。

「ちよいとそこのお兄さん方、寄ってかないかい？」

路地裏の方から女性の声で呼び止められた。目深くフードを被っているので顔はよくわからない。

「貴女は？」

「私は……そうね、アシミナと名乗っておきましょうか。占い師をしているわ、貴方と同じプレイヤーよ」

「占い師？ゲームの中ですか？珍しいな」

「まあ職業も『占術師』だからね、副業みたいなものよ」

『占術師』か、かなり珍しいジョブだな。確か、魔道士系の特殊変化ジョブだったか。転職条件が厳しくて人口が少ないとか書いてあったな。

「貴方、相当変なものを抱え込んでいるわね。運命が捻れに捻れているわ」

「……何もしていないように見えるが？」

「こんなの見なくても分かるわ……と言いたいところだけど、占術師の効果よ、偶に見えるの。貴方相当酷いわよ？ぐねぐねに捻れてる、こんなの見たこと無いわ」

まあそうだろうな。なりたくもない英雄なんてものにされてしまったし。それより、占術師ねえ。確かにそんな効果があるとは聞いたことがあるし、クオーレを仲間に入れ

る際には重宝するとも聞いた事がある。

「そうか、気をつけるよ。俺だつて楽しいゲームライフを送りたいからな、大手クラン同士の面倒ごとにも巻き込まれたらたまつたもんじゃない」

「私もそれをオススメするわ。あとは、そうね……周りをよく見て、背中を預けた人を信頼することね」

「それは占い師としてのアドバイスか？」

「女の勘よ、だからお題は要らないわ。呼び止めて悪かつたわね、じゃあまた会いましょう」

~~~~~

行つたか、ああそうそう、忘れるところだつたわ。

「ああ、それとそこのお姉さん、そうそう貴女よ」

「私？」

「そう、貴女よテイテイ、ああこの呼び方は適切ではないわね。テイテイリエル」

鏝が喉元に突きつけられた。怖い怖い。

「どこでその名を知った」



「さあ？占いで知ったのかも知れないわよ？どこでだっただいいでしょう？」

「何が目的だ」

「貴女への協力。利害は一致するはずよねえ？」

「何？……成る程、貴様は奴らの回し者か」

「回し者というかそのものだけどね」

「いいのか？そんな簡単に自分の正体を明かして」

「いいのよ、どうせ誰も信じやしないわ」

「まあいい、ならば邪魔はするな。手伝いなどいらん」

そう言つて踵を返してしまった。振られちゃったわね。

「どうする？」

ちっ、いきなり影から現れるなどいつも言っているのに。いきなり男が現れたら幾ら何でも不自然でしょう。

「どうするも何も計画に変更はなしよ。予定通り、けしかけるわ」

「邪魔するなど言われていたようだが？」

「いいのよ、するなど言われたらしたくなるのが人間つてものでしょう？」

さあ、私と遊びましょうロータス。クララの英雄にしてセラフイム・ワールドの『剣舞騎士』、私たちを止められるものなら止めてみる。

## #30 旅路、出会うは

「これが古代遺跡アルサマ、すっごいね」

レベツカの言葉がみんなの心情を表していた。それほどまでに目の前に広がる光景は現実離れしていた。ゲームの中でそんな事を言うのもなんだがそうとしか言いようがない。

遺跡が空中に浮いているのは語彙力を奪うのだ。

そう、古代遺跡アルサマは空中に浮かぶ巨大な遺跡群の総称である。村一つ分程の面積が地面ごと空中に浮かび上がっている光景は聞いたことがあつたとしても始めてみる者の心を奪うだろう。

「ようこそ皆さま、観光でしょうか？」

もちろん空中になど簡単には行けないし、行けたとしても許可なく登れば犯罪になつてしまう。中に入るには受付から正式な手続きに則つて入らなければならない。

「いや、転移門の使用で来たのだが」

「成る程、転移門の使用には然るべき団体からの許可が必要なのですが、許可はお持ちですか？」

「探求者組合に申請を出している、トトの名前で申請しているはずだ」

「では、この板に手を乗せてください……はい、確認致しました。探求者クラン『蔦の宮殿 ver. 2』の皆様、合計八名様、探求者組合より正式な許可が降りています。話を通しておきますので、お手数ですがまた転移門付近の受付にもう一度同じ作業をお願いいたします。では、良い旅を」

受付の所にあつたゲートが開く。その先は光に包まれており、先を伺い知ることは出来ない。

「これは転移門の技術を流用した小型転移門です。技術的にこの付近でしか使えない上に、あまり大人数での使用は出来ないので。門の先はアルサマの入り口になります。あまり勢いよく入られますと先が狭いのでぶつかる可能性がございますので、ご注意ください」

「ええ、ありがとうございます」

トト姉に続いてネオンとクリップ、それにシエルとティティはすぐに光の中に入ってしまった。おそらくあの四人は使った事があるのだろう。

初めて見る転移門は見た感じ光の膜という感じで手で触れてみても何か感触があるわけでもない。手の先をバタバタさせてみても空気を掴むばかりで恐らく出口の空気を掴んでいるのだと思う。潜り抜けるとすぐに空気が変わったのが分かった。アルサ

マが上空にあるからだろうか、気圧の変化で少し耳に痛みが有ったがそれだけだ。

すぐにティアとレベツカが光の中から現れた。するとすぐに光は小さくなり無くなって何の変哲も無い石造りの壁があるだけだった。

「うわあ！ 凄かったねお兄ちゃん！ 私転移門って初めて！」

「ああ、なんかもつと変な感覚がするとは思ってたけど一瞬だったな」

そんなことをレベツカと話しながらトト姉達に続いて小さな部屋から出る。そこには沢山の人と時代を感じさせる大きな石造りの遺跡が悠然とそびえ立っていた。

——それは遺跡。黙して語らず、けれど雄弁に物語る。その生き様を、時代の移り変わりを、自らの使命を。名をアルサマ、其はこの国の歴史を刻む生き証人。

アルカディア ガイドブックより抜粋——

「ねえ、お兄ちゃん……ここつてき」

「レベツカも思ったか？ いや、当然かレベツカは俺より何度もあの遺跡に通ってるんだもん」

「うん。ここ、多分だけど大精霊を祀るための遺跡だ。ううん、だった、かな」

そう、似ているのだ。レベツカが守人を務めた火の大精霊の遺跡に。しかしレベツカ

の言う通り、過去形だろう。大精霊がいるなら存在が認知されていて然るべきだし、守人の一族も居ない。さらに言えば、朽ち過ぎている。あの遺跡よりもっと昔の遺跡だろう。

「何か感じるか？」

「ううん、何も。私がなりたてだからかは分からないけど、少なくとも私はなにも感じない」

「うーん、関係無いのか？ 建築様式が似てるだけか？」

「分かんない、でも今は先に進んだ方が良いと思う。今ここで何かある気はしないかな」  
精霊としての勘、とでも言うのだろうか。レベツカは火の大精霊になった日から精霊としての能力に目覚めつつあった。大精霊はクララ達が魔法の管理の為に生み出した世界の機構だと言っていた。ならばレベツカは今、世界の真実に最も近い存在なのかもしれない。

いや、もう一つあったか。アルカナもそうなのだろう。「エルドワーク」は戦う際に「試練を与える」と言っていた。それにA Iとも話していたようだ、彼らもまた世界側の存在なのだろう。

「おーい、ロータス、レベツカ、置いてくぞー」

「ああ、すまん。行こう、レベツカ」

「うん！」

~~~~~

また転移門の所に居る受付の人にさっきの手順を一通り繰り返すと、遺跡の一番奥の部屋に通された。

「ここが転移門になります。それでは皆様、地面に書かれております円の中にお入り下さい」

言われた通りに俺たちは円の中で待つ。それを確認してから案内をしてくれた人が近くの装置を操作すると円が光り始めた。

「では、良い旅を」

円が光ったまま上がり、俺たちを囲むように一際大きく輝くと、今度は石造りの綺麗な場所に立っていた。

「ハハハッ」

「城塞都市ボランレー、その中央に位置する神殿の一室、です」

シエルの言葉を裏付ける様に直ぐに神官の姿をした男の人が二人やってきて、外は案内してくれました。

ボランレーは城塞都市の名が付いているように外周が高い壁で囲まれている都市である。それはもはや中で暮らせるレベルで整備されており、壁というより砦に近い。

何故こんなにも過剰とも言える防衛措置を取っているのかと言えばここが国境付近である事が影響している。前に話した通り人間国ストルタスと獣人国プグナーデは戦争状況にあつた。ストルタスの最前線は常にこのボランレーであり、プグナーデと小競り合いを繰り返し続けるたびにボランレーは拡張に拡張を続けた。それが長い年月を経て今の城塞都市になったのだ。

「よしここからは馬車も無いが、目的地まではあと少しだ。取り敢えず今日中にはプグナーデに着いておきたい、あまりボランレーには滞在出来ないがなにかやりたい事はあるか？」

馬車はアルサマの麓で預かって貰っている。馬は転移門が苦手らしく潜ろうともしなかった。というより人類以外は転移門を潜ろうとはしない。そのおかげでモンスターも通らず、安全に運用することが出来るのだ。

トト姉の質問に誰も答えなかったのでリスポーン地点の登録の為に宿屋だけ取って、ボランレーはすぐに出る事になった。

「うーん、やっぱりちよつと買物すれば良かったかなあ」

「言えばトト姉は止まってくれと思うけど？」

「ううん、でもいいの。今度ゆっくりお買物しようね、お兄ちゃん」

「ああ、そうだな。このクエストが終わったらゆっくり買い物でもしようか」

「うんっ!」

ボランレーは国境付近という事で様々な文化が流入している。その上大きさだけで言えばストルタス第二の都市だ。エターリアでは買えないものが大量にある売っていた。歩けばプレイヤーズメイドの防具や武器がちらほら売っているし、店を持っている人もいる。

ここならばレベツカの欲しいものも、俺の防具も見つかるだろう。まあ俺の防具はあまりまだ必要とは思わないが。

見ればティアとティティが二人で店売りのアクセサリーを見ている。まあ買う気は無い様ですぐにトト姉達の方は戻ってしまったが。

「お兄ちゃん、嬉しい?」

「うん?」

「ティアお姉ちゃんと一緒に旅が出来るの」

「そうだな、嬉しいよ。正直二人で長旅なんて夢物語だったからな。それにレベツカとかみんなと一緒にの嬉し。ティアは明るい声だけど、同年代の友達と外で一緒に遊べないからな、こんなにたくさんの人と団体行動出来るとは思ってもみなかった」



あの台風の日から俺はどうやって花蓮に償えばいいのかずつと悩んでるいた、けどその悩みは他でも無い花蓮とレベツカの二人によって晴らされた。

アンナにアルカディア・プロジェクトが目が見えない橋下博士の娘のために作られたと聞いた時、それなら花蓮だって。と思った。

花蓮がティアアとしてこの世界を自分の足で歩いている、それだけで俺はこの世界を守る理由になっっているのだろう。そこにさらにレベツカの生きる世界である。ならば俺は英雄狗にだっつてなっつてやろう。この二人の笑顔を見せてくれたこの世界を守る為に必要ならば。

「ふふっ、頑張ろうね。お兄ちゃん」

「そうだな、レベツカ」

~~~~~

ボランレーを出て、少しすると国境である。地球のように国境がわかりやすく引いてある訳ではなく、ボランレーの北の森からプラグナーデと決められているだけだ。

よってその近くには監視塔がたくさん建てられており、兵士の巡回も行われていた。一応休戦状態であるので物々しい雰囲気では無いのだが、緊張感は肌で感じることで

きる。

探求者は国境に縛られないため、素通りする事ができるが両軍の兵士から監視されながら通り抜けるのは正直あまり良い気分では無かった。

「ふう、どうやら監視もいなくなったようだな」

森に入って暫くしてからプグナーデ側からとみられる兵士が行なっていた監視も無くなった。怪しい素振りを見せなかったのもあるだろうが、それよりシエルが変装を解いたのが大きいだろう。怪しい一団から獣人を加えた探求者の一団になったのだ、信用度は如実に変わる。

レベツカという子供がいるのも大きいだろう。何かのクエストだと思ってくれたのかもかもしれない。そのレベツカはシエルの大きい狐の尻尾に捕まって楽しそうである。

「確かこの近くに村があったのでそこで情報収集をしましょう」

プグナーデ出身のシエルがいると他国でも動きが取りやすい。基本的にその国の地図はその国でしか売っていない上に、その国の長の種族以外が合法的に手に入れる事は難しい。もちろん現実のネットなどで見ることは出来るが、アルカディアの中には持ち込めないのが覚える必要がある。

「ああ、わかった……伏せろレベツカ！」

「えっ？」

振り向いた瞬間、最後尾を歩いていたレベツカの後ろから真っ直ぐに矢が飛んでくるのが見えた。直ぐに走り出したが、間に合わないっ！

「ふっ」

しかしその矢はレベツカに当たることはなく、ティティの放った速射の矢が撃ち落とされた。

「何者だ！」

トト姉の言葉には返答は無く、代わりに大量の魔法が森の奥から飛んできた。

「ちっ、逃げるぞ。私が殿しんがりを務める。ロータス、手伝ってくれ」

「了解！」

## #31 少女達よ希望を抱け 第一項

「くっそ、ちまちまと面倒だ！」

「左から来てる！」

「行かせるかつ、ての！」

かれこれ五分程何者かに追われ続けている。この時点でわかつたいる事は、少なくともかなりの数に襲撃されている、プレイヤーがかなりの数いる。という事である。

飛んでくる矢や魔法の数で人数が多いのは分かるし、魔法が使える獣人は適正の関係上クオーレには殆ど居ない。その所プレイヤーは適正を自分で割り振れるので、関係が無い。獣人国において、獣人以外のクオーレが襲撃をかけてくる理由はほぼ無いので、この二つは正解だと思われる。

と、それまで絶え間なく続いていた矢と魔法の雨がスパッと止んだ。

「どうやら……毘だったようだな」

前を走っていたレベツカ達が木を切つて作られた広場のような所で立ち往生しているのを見て、トト姉が呟く。

「ごめん、お兄。囲まれてるっばい」

「いや、最初から狙われてたんだ。無理もない」

ティアが謝るが、それは見当違いである。流石にいきなりここまで高度な連携で襲撃を仕掛けられてはある程度苦戦するのは当然だ。これは相手を褒めるべきだろう。

「しかしマズイな。ここでもし殺されたら、クエストには間に合わんぞ」

「しかもティティが居る。流石にプレイヤーがクォーレを殺す事は無いだろうが、一人で放り出す事になる」

包囲が完成して、ジリジリと追い詰められる。どうやら矢では殺さないと思ったように、何人も森から出てくる。プレイヤー名が隠匿中になっている上にその文字が赤い。PKで決定だな。

プレイヤー名は基本的に他のプレイヤーに見られたら筒抜けになるが、「隠匿の札」というアイテムを使うと隠匿中という表示になる。プレイヤー名が赤くなるのは何らかの犯罪行為やPKをしたりした場合だ。これも「隠匿の護符」というアイテムで通常に見せかける事はできるが、今の人里離れたこの場所なら必要ない。なので下位互換だが、その分値段も安い、札の方にしたのだろう。

「くるぞ、全員攻撃より防御を考えろ！ 乱戦になれば大規模な魔法は使えん！ なるべく一人にはなるな、背中を見せれば死ぬぞ！」

トト姉が叫んだ瞬間、大量のPKが突っ込んできた。俺とトト姉だけは一人でもどう

にかなるのでなるべく相手を散らす為に逆方向に走る。他のメンバーは後衛職を中心にして背中合わせで迎え撃つ事にしたようだ。

「レベッカ！ 一緒に行くぞ！」

「うんつ、お兄ちゃん！」

レベッカの本体は『魂の灯』だ。単体でも活動出来るが、一番強いのは『魂の灯』と一体になっている時。一体になっている時は俺の背中に背負うような形になるが、レベッカは自分の意思で魔法を放つ事は出来る。俺自身は魔法を使えないが、レベッカがいれば移動砲台の役目も果たせるようになる。

斬りかかってきた相手を『灼火刀 焰』で押し返し、仰け反った所をレベッカの撃つた『ファイアーボール』の魔法が直撃した。

「クソが！」

それをみて悪態をついた相手が仲間を燃やしたレベッカに向けて剣を振るうが、

「何っ!？」

「べーっ、だよ」

大精霊たるレベッカの体は陽炎のように揺らめいて傷一つ負わない。本体が『魂の灯』である以上、実質的にレベッカのHPは無限である。その上普通の攻撃では大精霊に傷をつけることすら出来ない。

驚きに硬直した体は直ぐに斬り伏せられた。

「よう、やるじゃねえか。カボチャ頭さんよお」

前からかなりの巨軀の男が身の丈以上もあるうかという大斧を担いで歩きながら、声をかけてくる。顔はフルフェイスの兜で隠されていて見えず全身は赤色の鎧で隠されているものの、かなりの強者に見える。

「頭領」

「俺がやる、お前らは他の奴らに向かえ」

頭領。こいつが相手の親玉か、ならこいつを倒せば撤退するか？

「さあ、殺し合おうぜ！」

「ぐっ」

赤鎧の男の振り下ろした斧はその見た目通り、かなりの重量のようで一撃を何とか横に逸らすだけでかなり消耗した。

「ほう、防ぐか。ならこいつでどうだ！」

横薙ぎを何とか後ろに下がって回避、がら空きの胴体に一撃入れる。しかし、赤鎧はかなりの業物らしく、弾かれてしまった。

「くそつ、硬いな」

「んあ？ その刀、火の属性が付与されてんのか、面倒だな」

その通り、『灼火刀 焰』には『魂の灯』のスキルである「火属性付与」の効果が乗っている。しかし金属鎧には効きが悪い。

何とか兜を飛ばして顔に一撃入れるしか無いか。

「ファイアーボール！」

「おっと」

レベツカが頭に向けて魔法を放つが、両手でガードされてしまう。

だが隙は出来た。

「モーメントサイト」「クイックムーブ」

体感時間が引き伸ばされた中で、AGIを強化した事で悠悠赤鎧の男の振り下ろしをパリイ出来た。先ずは腕の握力を奪う。刀だと痛手にならなそうなので、マン・ゴージュの柄で左腕を思いっきり叩きつける。恐ろしい事にマン・ゴージュの耐久値がごっそり減った。しかも赤鎧の手甲は壊れていない。

思わず距離をとった所で二つのアーツの効果時間が終わった。

「痛つてえな、そのアーツの構成は軽戦士の系統か、クリティカルが入ってるのに壊れねえって事はまだレベルはそこまで高くねえな」

やはりアーツを切ると系統がバレるな。正直軽戦士はアーツが割れてもそこまで怖くないが、それでも若干不利だ。



「お返しだ、「地割れ」」

赤鎧は大斧を地面に振り下ろすとそこを起点として地面がこちらに向けて一直線に割れ、割れた地面が鋭く尖って襲ってくる。

「フアイアボム」！」

レベツカが爆発を起こして何とか相殺するが、土埃が視界を奪ってしまう。

堪らず後ろに下がるが、土埃を突っ切って赤鎧が迫る。

「ぐっ」

「お兄ちゃん！」

なんとかパリイ出来たが、体制が崩れた。それを逃さず、追撃が飛んでくる。まずい、次は避けられないぞ。

「これで終いだ、「大轍」」

確か、大轍は防御を貫通してダメージを与えるアーツだったか。決めに来たな。だつたら。

「虚ろえ、「名無しジャツの南瓜ク」」

「何っ!?!」

レベツカが俺のMPを使うのでかなり目減りしているが、それでもレベルが上がった影響でMPの最大値も上がっているので2秒程幽体になる事が出来たので、何とか逃げ

る事が出来た。

「大丈夫かレベツカ」

「うんっ、まだまだいけるよ」

レベツカはダメージを喰らわれないとは言え、それでも体力は有限だ。それでも最近の特訓の成果かまだまだ余裕そうだな。

「ほう、成る程神秘防具か、『アイビーパーレス 蔦の宮殿』を名乗る事はある」

「ああ？ お前『蔦の宮殿』の名前を知って襲って来たのか？」

「そうだ、『蔦の宮殿』を名乗る輩は俺の敵対勢力なもんでな」

誰だ？ 『蔦の宮殿』の名前を知ってるって事はセラフィム・ワールド時代からのプレイヤーって事だ。あの頃はひっきりなしに名を上げようとPKが来たが、その内の一つか？ けどセラフ時代なら兎も角、アルカディアでの俺たちは殆ど無名だぞ？

じゃあ個人的に『蔦の宮殿』に恨みがある奴か？ だが、アルカディアに来てまでとは考え難い。ああ、もう分からん！

「じゃあそういう事で、いっぺん死んでくれや。神秘防具と言えどそう何回も連発出来ねえだろ」

赤鎧が神秘防具だと勘違いしているのは狙い通りで良いのだが、『魂の灯』の固有スキルを使う隙が無い。

だったら、届かない所に行けば良いか。

「レベツカ、飛ぶぞ」

「うん、わかった」

赤鎧の横薙ぎの一撃をジャンプして避け、そのまま空中を踏みしめる。

「はあ!？」

『魂の灯』の今使えるスキルは6つ。その内の一つ、「空中歩行」である。そのまま、赤鎧の斧が届かない場所まで上昇する。

よし、ここからなら。十分な一撃を入れられる。「銀火転霊」……は無理だな。仲間を巻き込む可能性がある。

「だったら……」「エアジャンプ」「エアステップ」

空中歩行はどの角度でも発動可能、だったら下に向かってジャンプすることも可能なのは検証済み。更にステップで加速。更にここで、新アーツ、さあ盛大に行こうか。

「エアドライブ」「ミラージュエフェクト」

「エアドライブ」は空中での一時的な加速、「ミラージュエフェクト」は一瞬だけだが、分身を出して距離感を狂わせるアーツだ。

「面白え！ 迎え撃ってやるよ！」「金剛」「アーマードシエル」「金剛力」

赤鎧が何らかのアーツを使う、エフェクト的にDEFの上昇アーツとSTRの上昇

アーツか。だったら、その前に叩き斬る！

「ラピッドエツジ」

「水流断ち」

AGIはこちらの方が上、振り下ろしの軌道から逸れるようにして狙うはその邪魔な兜！

小太刀が跳ね上げるようにして兜を抉る……は？

凄まじい衝撃が横合いから加わり、大きく吹き飛ばされる。脇腹にめり込んでいるのは……斧の柄か！

「水流断ち」は振り下ろしをフェイントにした柄での薙ぎ払いだ、残念だったな、カボチャ頭」

ギリギリ耐えたが、次食らったら死ぬぞ。というか空中で体制の立て直しが出来ない、このまま木にでもぶつかればその衝撃でHPが全損しかない。

「お兄ちゃん、ちよつと頑張つてね「ファイアボム」」

背中から更に凄まじい衝撃、レベッカの魔法の爆風が俺の体を押し戻す。ナイス援護だレベッカ、HPはほぼミリ単位でしか残ってないけど死ぬよりマシだよなあ！

「ぐおああ！」「半月刃」！

「何だと!？」

弧を描くようにして上から叩きつける。錐揉み回転しているので当たった感触はあれど、どうなったか分からない。地面にぶつかり転げながら何とか立ち上がる。『名無しの南瓜』は……レベツカの「ファイアボム」の衝撃で遠くに落ちてるな。でも『灼火刀 焰』は持つてる、赤鎧は……健在か、でも兜は耐久値全損させたか。

って……あれ？ あいつもしかして……

「かあああ、痛えなおい。やるじゃねえかカボチャ頭……は？」

「あー、もしかして……グレンか？」

「ロータス！ ロータスじゃねえか！ って事は、本物か！」

「お兄ちゃん、知り合い？」

「ああ、あいつはグレン。セラフイム・ワールド時代のクランメンバーだ。グレン、戦う意思はもう無いな？ 取り敢えず休戦してもらっていいか？」

「おう、てめえら！ こいつらは本物だ！ 戦闘止め！」

グレンの号令で襲撃者達が次々に武器をしまい始めた。いきなり戦闘が終わったのを訝しんだのかクランメンバーがこちらへやってくる。良かった、誰も欠けてないな。

「ああ、トトの姉貴。久しぶりです」

「グレンか！ 久しぶりだな」

「クリップもネオンも済まねえな。最近……だけでもねえが、『蔦の宮殿』を名乗る偽物

が多くてな。てつきり同類かと」

グレンの説明によればそういった偽の『蔦の宮殿』をPKしていたらしい。んで俺たちもそういう奴らだと思つたら、と。

「まあこつちは誰も欠けていない。だが何人か倒してしまつたか、そつちは良いのか？」  
「良いんだよ、こいつらはみんなセラフの『蔦の宮殿』の大ファンなんでな、お前らに倒されたと知つたら狂喜するぜ」

後ろのグレンの仲間がうんうんと首を縦に振っている。みんな心なしか目がキラキラしているように見えるな。

「んで？ 何で国を跨いでまでここに來たんだ？ 何か理由があるんだろう？ せめてもの詫びだ、手伝うぜ」

そう言ってくれたので、俺たちはグレン達にこれまでの経緯を話すことにしたのだ。た。

## # 3 2 少女達よ希望を抱け 第二項

「ふう、何とか乗り切りましたか。前提条件はクリア……と」

私たちには管理者としての特権がいくつか存在している。その一つが自分の英雄の現在を映し出す事が出来るというもの。

「ドミニクス、何か変化は有りますか？」

「いいや？ まだ二つしかアルカナの反応は無いな。というより、この近くにあの二人以外のアルカナに繋がるクエストを発生させているものは居ないぞ？」

「何ですって？」

ラプラスの演算が狂った？ いえ、まだ私たちには分からない不確定要素が紛れ込んでいる？

「クララ、どうする？」

「……少し待ちましょう。もし、何かあれば……私が出ます」

ロータス、私の英雄よ。信じていますよ。

「成る程、クララの英雄……それに記念防具メモリアルカディアと神秘防具アルカナアイマー。ラプラスの演算ねえ、確かに理解した」

ちよつと待つて欲しい。私は何を聞いている？ 英雄？ アルカディア・プロジェクトの管理者A Iは本当に生きていて、何かしらの使命を一プレイヤーにしか過ぎないロータスに与えた？

ふざけるのもいい加減にして欲しい。私は世界的にもはや世界市場をも左右するアルカディア・プロジェクトのデータに日本で揺らぎが有ったから調査しに来ただけで、そんなオカルトを調査しに来た訳じゃ無い。

でもこのグレンという男と『鳶の宮殿』のメンバーはそれを信じている。やはり何か裏を知っているのか？

ここまで来たらもう仕方がない、アルカディア・プロジェクトの管理者A Iが一個人を依怙贖肩しているとなれば国際的な大問題だ。日本人だけを依怙贖肩しているなんて事になったら最悪、戦争にもなりかねない。それほどアルカディア・プロジェクトというゲームは今の地球で大きな影響力を持っているのに。

どうしようも無くなったら私の所属を明らかにするしか……



~~~~~

「あらら、そう上手くはいかないわよね」

「作戦通りになっただけだ、だろう？ アシミナ」

こいつ馴れ馴れしいのよね、新しく私たち側に来た奴だけど、良いもの持つてるし裏の事情も知ってる。何より強いから邪険にする訳にはいかないけれど、本当なら殺してやりたいわ。

「ええそうね、だから貴方の出番は無いの。だから黙っていて、ゲルガル」

「おお、怖い怖い。ああ、黙っておくとも。本来は今回は俺の教習、やり口を見せてもらうだけだからな」

ふん、軽い男。こういう奴嫌いなよね。まあ、良いわ、やるわよティテイリエル。私達の気配を見せれば覗き見しているのであろうクララが出張ってくる、アルカナをぶつかれば運が良ければ死ぬでしょう。

「んー！ んんーっ!!」

「あら、忘れていたわ。それが人生最後の言葉でいい？」

「猿轡を噛ませて、足元に転がしておいたクォーレ……と呼ぶのでしたっけ？ まあN

PCで良いわね。NPCを中心に魔法を唱える。

「〔召喚〕」

モンスターをランダムに召喚する魔法で呼び出された狼型のモンスターが、目の前で身動きの取れない獲物を見て舌なめずりをする。

「んー！ くん——！！」

狼はNPCの喉元に噛み付くと、一撃で息の根を止め。品定めをするように腕に噛み付く。

「ふっ」

と、ゲルガルがその狼の首を刎ねた。

「あら、これからが楽しみだったのに」

「すまん。弱い物いじめは性に合わなくてね。それにこれでもう満たしたんだろう？」

「ええ、ほら」

『ユニーククエスト『正義の天秤』をクリアしました』

『特殊条件を満たしました』

『アルカナクエスト『断罪セシメル正義ノ翼』が発生しました』

「私達はアルカナを保有する事は出来ない、ドミニクスとフルティア、何よりアンナが許さないから。だったらせめて嫌がらせに使いましょう、貴女達はNPCが大量に死ぬのを良しとしないのでしょうか？ さあさあ、止められる物なら止めてみせろ！」

狂った笑い声をBGMに『正義』の代行者が現れる。

~~~~~

「うわあ、お兄って結構凄かったんだね。 ティティ」

「……」

「ティティ？」

やっぱり、この世界は嫌いだ。私の望むものなんて、手に入らない。

ほら、『正義』の味方が来た。

「どうしたの？ ティティ」

ティア。こんな私にも笑いかけてくれた人。だけどダメなの、私は……ヒトでは無いから。

「ゴメン、ティア。私は、私が憎いのよ」

「え？」

『ユニーククエスト『ファイタス』をクリアしました』

『特殊称号『無二を冠する者』を所持しています』

『特殊称号『死神の友』を所持しています』

『特殊条件を達成しました』

『アルカナクエスト『模倣スル死神ノ嘆キ』が発生しました』

ああ、やっぱりそんな目で見るのね。さようなら『蔦の宮殿』、さようならティア。ちよつとは楽しかったわよ。

~~~~~

森の奥からなんか光り輝く巨大な天使が出て来たと思ったら、ティティが溶けて巨大なスライムになった。

ちよつと待つて、キャパオーバー。

「ロータス！ あの森の奥へ！ ニトワイアよ！」

その上氷が目の前で爆ぜたと思ったらクララが出てきた。

って、ニトワイア!?

「完全にしてやられたわ。あいつらは私たちと比べたら落ちるものの結構な管理者権限を持っている。ニトワイアに所属しているプレイヤーは観測できないの。その内の一人がわざとここでアルカナクエストを発生させた」

「それがあの天使か!?!」

「そう、このままだとラプラスの演算通りになる!」

「だがまだ一体足りないぞ」

「それは……」

クララの視線の先には……グレンか?

『ユニーククエスト『鋼鉄の腕』をクリアしました』

『特殊条件を達成しました』

『アルカナクエスト『堅牢タル節制ノ息吹』が発生しました』

「嘘だろ!?!」

「本当よ、この状況だとニトワイアを追うのは愚策ね、癩だけどアルカナの相手をしてもらうより無いわ」

おいおい、こんないきなり囲まれるなんて聞いてないぞ。

「ちよつと待ちなさい!」

シエルか俺とクララを見ていきなり声を荒げる。

「ロータス! 貴方に不正の疑いがかけられています! 本名も住所も抑えられています! 抵抗は無駄です、大人しくログアウトをして事情聴取を受けなさい!」

「はあ!? シエルさん、何言ってるの!」

不正!? 俺そんな事してない……いや、クララと話してるのを見たらし思うのも仕方ないか? ていうか、シエルさん何者?

「私は国際仮想現実統制機構<sup>I.V.C.M.</sup>、日本支部所属、柳沢 零。仮想現実不正利用の件で事情聴取を行います!」

I. V. C. M!? 国連の公的機関じゃねえか!?

その時、頭上から光が降り注ぎ、ひとりの女性が降りてきた。

「しめた! ちよつとロータスとレベッカとシエルを借ります!」

「アンナ姉さん!」

アンナが踵で地面を叩くと、光が俺とレベッカ、シエル、クララを包み込む。

「きやあ!」

ちよつ、状況が目まぐるしく変わりすぎて意味が分からん。誰か説明してくれ!

~~~~~

『愚者』を倒したあの日の様に目を開けると、あの時の部屋に立っていた。

横にはレベッカとクララが立っていて、少し離れた所にシエルとアンナが向かい合っ  
て座っている。

「……は……どういふつもりか説明して頂きますね、アルカディア・プロジェクト統括A  
I、アンナ」

シエルが周囲の環境の変化に驚いた様子を見せつつ、アンナに問いかける。

「ええ、先ずは謝罪を。ご迷惑をおかけして申し訳ありません、<sup>I.C.V.M</sup>ですが貴女達を引きずり  
出すにはこの方法が一番だったのです。それと提案を、私達は生きています。その前提で  
進めたいのですがよろしいでしょうか？」

アンナが今から話そうとしている事はなんとなくだが予想がつく。俺にしたように  
地球でのアルカディア・プロジェクトを取り巻く状況を話すつもりなのだろう。その為  
にはアンナやクララといったAI達が本当に自我を持ち、自らの意思で動いているとい  
う事を信じてもらえなければ意味が無い。

「……いいでしょう。我々としても貴女達の事は不思議に思っていました。貴女達は人

類の作り出せる数世代先の技術だ。あの橋下博士ならば……：そういう存在を作り出せても、不思議ではない」

「ありがたいございます。それとここでの時間はほぼ経過していません、安心して下さい」

これはむしろ俺に言った言葉か、たしかにアルカナ三体に囲まれた状況で置いてけぼりの様な状況にしてしまったのは不安だった。

「ロータス、レベツカ、クララ、あなた達も座りなさい。関係のある話ですから」

アンナに促され、二人の座っている近くに行くと言子椅子が三つ地面からせり上がってきた。俺たちが席に着いたのを確認してからアンナが話し始めた。

「貴女達はこのアルカディアで不自然な波長が出たのを見て、調査を開始した。その認識でよろしいですか？」

「ええ、I. C. V. Mの定期監査で引っかけました。ご存知の通りアルカディア・プロジェクトは今最も世界で注目を集める仮想現実です。その影響力はたかがゲームと侮る事は出来ません。ですが発売元のニトワイアは詳細なデータを提出しながらないので、どうやって運営しているのか全く不明でした。しかし一週間程前に明らかに不正なコードが確認され、我々は真つ青になりました。もし特定のプレイヤー、もしくは勢力に運営が肩入れしているとすれば大問題です。しかもアルカディア・プロジェクト程



の規模ならば尚更。最悪、現実での国同士の小競り合いまでありました」

一週間前……その頃は。

「もしかして、私達の事?」

「ええ、ロータスとレベツカのあの出来事とその後始末。管理者しか入れない場所にプレイヤーとクオーレを引き込んだのです、ニトワイアには嗅ぎつけられないようにしましたが、I. C. V. Mにはやっていない……というよりわざと見つかる様にしました」

「アルカディアを取り巻くこの現状を知らせる為か」

「ええ、ロータス……いえ、九条 蓮也が現実でそんな事を言っても狂人扱いされるだけ、ならば公的機関に実際に見せる他ないでしょう」

シエル……柳沢 雫さんが難しい顔をして黙り込む。

「……ニトワイアとは敵対しているのですか?」

「ええ、勿論。あいつらは私達橋下博士の父を殺した。そんな奴らにお父様の技術は渡さない」

それがニトワイアの探しているものか。

「ニトワイアは……アルカディア・プロジェクトを使って何をしようとしているのですか?」

それは、俺も気になっていた事だ。ラプラスひとつ取っても未来の技術が詰め込まれ

ているが、人殺しをしてまで手に入れたいものでは無いだろう。そもそも、橋下博士が公表する筈だ。

ならばあの希代の天才が公表する事が出来ない、何かがこのゲームには隠されている。そう考えるべきだ。

『メメント・モリ』、そう言えば雫さんには分かるかしら？」

その単語を聞いた途端、シエルが勢いよく立ち上がった。その顔は真つ青である。それどころか少し震えている……か？

「あれが……ここにありますか……」

「おい、説明してくれ。その『メメント・モリ』ってなんなんだ。そんなヤバイものなのか？」

その言葉を受けて、クララが話し始めた。

『メメント・モリ』はお父様の消したい過去の一つよ、その中でも最悪でしょうね。電波感染するコンピュータウイルスよ、簡単に言えばね。効果としては、操作を一切受け付けなくさせるといふもの」

「流出すれば一晩で世界中のインターネットが機能不全に陥るでしょうね、その解除方は『メメント・モリ』の設計図にしか書いていない。そしてその設計図とウイルスのサンプルがアルカディアに隠されているのよ」

## #33 少女達よ希望を抱け 第三項

「……成る程。確かにそれは私達を動かすに値します。分かりました。組織としての返答はここでは出来かねますが、私個人としては協力を約束します」

少し考え込んだ後、シエルは神妙な面持ちでそう告げた。

「あら、そう簡単に信用しても良いのかしら？ 貴女達にとって私達は未知の塊でしよ  
うに」

「もし貴女方が『メント・モリ』の悪用を考えていたのなら、地球はとうに機能不全に陥っていました。そうならないという事は信用する材料になる足り得ると思いませんが？」

「成る程、道理ね。ニトワイアの虚言だとは思わない、と」

「ええ、正直……あそこならやりかねません。陳腐ですが……世界征服を狙っていたと言われても信じるだけの、得体の知れなさがある。事実、黒い噂が絶えないですからね」

「もし良ければ内部データでも流出させましょうか？ 思わず口を覆いたくなる人体実験のデータとかわんさか有るわ」

「正直喉から手が出る程欲しいですが……どうせ上層部に握りつぶされるのがオチです、なら余計な事をして睨まれない方がメリツトが多い」

「国連も大変ね、どこでもヒトの性は変わらぬ、懲りないわね」

そう言つてアンナは大袈裟に溜息をついた。

しかし直ぐに立ち直ると、一転さつきまでの皮肉めいた表情から真剣な面持ちに変わつて、話し始める。

「では協力を取り付けられた所で今の状況を話し合ひましょうか。ドミニクス、キャンセル出来そう？」

「いや、残念だがもう俺の制御下からは離れているな、間に合わなかつたようだ」

いつのまに現れたのかアンナの後ろから筋肉質な大柄の男性が話し始める。その巨軀と厳しい黒の軍服のような服とが相まってかなり威圧感がある。

そんな俺の視線に気が付いたのか、ドミニクスと呼ばれた男性が静かに目礼をし、自己紹介を始めた。

「申し遅れた、俺はドミニクス。モンスター担当のAIだ。よろしく頼むぞ、国連からの客人、火の大精霊、最も新しき英雄」

何と云うかかなり丁寧だ。自意識過剰かも知れないが、敬われていると感じるくらいに。

「クオーレの大量虐殺は看過する事は出来ません。よって、改めてお願いします、三体のアルカナを止めて下さい。誓約によつて私達はあまりクオーレ達に干渉する事は出来ません」

「二つ、聞きたい。ティティは……何なんだ？ あいつは、俺たちのクランメンバーじゃ無かつたのか？」

ティティの名を聞くとアンナを始め、クララとドミニクスの三人が沈痛な表情を浮かべる。

「彼女は……いいえ、そもそもあの子に性別なんて有りません。元からあの子はアルカナの一体、《死神》の逆位置 模倣粘球ティティリエル。あの子の役割は……重すぎた」  
やはり、アルカナ。レベツカがティティの本当の名前を聞いた時に、なんとも言えない顔をしたのが印象的だった。

「私達に何か言う資格は有りませんが、最近のあの子は楽しそうでした、どうか、助けてあげてはくれませんか。役割は果たしたと、言つてあげて下さい」

~~~~~

体を覆う光が薄くなり、目を開くと先程アンナに強引に拉致された場所と寸分違わぬ

位置にまた転移してきたようだ。

あの後アンナ達と話を詰めてから、またここに戻って来た。幸いまだ戦闘は始まっておらず、アンナの言った通り時間経過はほぼ無いようだ。

「トト姉！ 今戻った、状況は!?!」

「こつちでは一瞬だ、変化してないと言えるな!」

「だつたら……」

「トト姉、ティティは俺とレベツカ、あとティアに任せてくれないか。絶対にどうにかしてみせる」

本来三人でアルカナと対峙するなど無謀も良いところだ。しかし、ティティだけは、俺たちがどうにかするしかあるまい。特に、俺の可愛い可愛い妹の友達が勝手に出てこうとしているんだからな、お兄ちゃんとしては引き止めてやらにやならんだろうが。

「……分かった。グレン！ お前は自分の発生させたアルカナの対処だ！ 私もそちらに合流しよう、その代わりに克蘭メンバーを半分こつちに回してくれ!」

「ああ、勿論だぜトトの姉貴！ さあ野朗共！ 俺らのせいで昔の仲間に手間掛けさせるわけにはいかねえ、速攻でぶつ殺して神秘の力をとやらを拝ませてやろうじゃねえの!」

凄まじい雄叫びがグレン達から上がる。あれなら大丈夫だろう。

「クリップ、ネオン。お前達はあの天使の方だ。グレンの克蘭メンバーが手伝ってくれるし、どうにか持たせろ……なんて事は言わん。どうせならぶっ倒して、アルカナを手に入れて来い」

「あいあいさー、つと。相変わらず無茶振りするねえウチの大将は」  
「でも、それがウチの方針、です」

ネオンとクリップはいつもの事だと笑いながら無茶振りを受け入れる。それで『蔦の宮殿』はトップ克蘭に上り詰めたのだと知っている。そんな目で、天使に向かって眼差しを向ける。

「シエル、手伝ってくれるんだな？」

「ええ、我々としても……いえ、私はクオーレを殺す趣味は無いので、今は一個人として、ただのシエルとして克蘭マスターに従います」

「良い目だ。吹っ切れたようだな、だったらクリップとネオンの方に回ってくれ、どうせだったらアルカナをもぎ取ってくれと、克蘭マスターとしては有り難い」

「ええ、仰せのままに」

シエルが天使の方へと向かったのを見て、トトもグレンの加勢へ向かうべく地を蹴った。  
た。

「やれやれ、指揮官としての才能はあまり無いのだがな」

森の中から飛び出してきた天使も、グレンのアルカナクエストで発生した奴もかなり広場の中心から離れているので殆どのプレイヤーがいなくなり、近くには四人だけが立っている。

遠くからは戦闘音が聞こえてきたりしているが、不思議な静寂がこの広場の中心に漂っている中、俺はティティに向かって話しかける。

「よう、ティティ。随分デカくなったな」

『ロータス、クララの英雄だったのね。道理で随分この世界に詳しいと思っていたわ』  
「今アンナ達と話して来たよ、アンナから言伝を預かってきた」

『へえ、聞こうじゃない。あのクソ共が今になって何を言うのか』

「随分と嫌っているな、まあいい。伝言は一つ、「役割は果たした、好きに生きろ」だぞうだ」

その言葉を聞いた途端、明らかにティティが怒るのが分かった。不思議なもので青色の粘性物体になったとしても、克蘭メンバーだったときのように何となく分かるのだ。



でも、アンナの言った通りか、やっぱりティティは……

「今更！ 今更、貴様らが何を言う！ 私という悍ましい生命を生み出して、あまつさえ何百年も放置しておいて、今頃になって好きに生きろだど!? ふざけるなよ、貴様らは私を何だと思っている！ 貴様らの傲慢が決めた私の在り方を、ここに來て放り出すと言うのか！」

心からの叫びだと、そう理解出来る、咆哮であった。

その巨体は徐々に縮んでいき、俺たちと殆ど変わらない、見慣れたティティの姿をとった。

違うのは右腕から生えてきた大剣を持つている事と、ドラゴンの様な翼が生えている事だろうか。

「私はこの世界が嫌いだ。私にありとあらゆる物の対になるという役割を押し付け、無理やり生み出したこの世界が嫌いだ。人が私を生み出したというのなら……人の作り出したこの世界を……ヒトならざる私を、止めて見せろ、英雄」

更にティティの体の表面が鎧の様な形状になり、硬質化した様に見える。

「ティティ……」

「ティア、ここから離れなさい。貴女はこの件からはまだ引き返せる位置にいる。エルドワークが倒れた時にも貴女はいなかったのでしょうか？ 貴女とて死にたくは無いは

ず、ここが分水嶺よ。とつととログアウトしなさい」

ティアはティティからの忠告を受け、僅かに後ずさる。そして俺の方へと視線を向け、目線だけでどうするべきか問うた。

俺とて最愛の妹をこの件に巻き込むのはどうかと思う。だが、それ以上に。

「ティア……いや、花蓮。お前が決める。ティティの言う通り、ニトワイアの奴らに目をつけられた以上、アルカディア・プロジエクトというゲームはゲームの範疇に収まらない可能性が高い。もしかしたら、死ぬかもしれない。ここで引き返せば、無関係を決めこめば、そんな危険は無い」

「お兄……」

花蓮はうつむき、なにかを堪える様に拳を握る。

「だが」

「えっ?」

「それでも、友達を助けたいのならお兄ちゃんが一緒に連れ戻してやる。お前がそう決めたなら、俺は反対しないよ」

「いい、の?」

「ああ、あの時俺はお前を止めなかった事を後悔したけど、今回は一緒に居てやれる。なら、悔いの無いように自分で決めろ」

その言葉を受けて、ティアは俺たちより一步前に出て、あらん限りの大声で叫ぶ。

「ティアの、バカ——!!!」

「はあ!？」

いきなりの罵倒に思わずといった感じでティアが返す。

「いきなり世界が嫌いだし、何てカッコつけちゃってさ、そういうの何て言うか知ってる？ 厨二病って言うの！ なーにが世界が嫌いよ、ダサい事この上ないわよ！ その上本当はスライムみたいな体の事を隠しちゃってさ！ そんな何でもかんでも体系を変えられるならダイエツト必要なんてないじゃない！ 羨ましい！ 裏切り者！ チョコレート一個を食べようか迷った事なんて一回も無いんでしよう！ しかもその格好見る限り服だつて自由自在じゃない！ 可愛い服とかお金をかけずに何着でも新品同様に着れるんでしよう！ その上勝手に私たちと敵対関係になっちゃって！ 前にしたショッピングと食べ歩きの約束どうしてくれるのよ！ 現実でも超有名パティシエのプレイヤーの新作スイーツの予約とるのすっごい頑張ったんだからね！ しかも自分の悩みとかぐちぐち一人で溜め込んだじゃってさ！ 何かあるなら私たちに相談しなさいよ！ どうせ一人で悩んでる私かっこいいとかそんなこと思ってたんでしよう！

イタいだけよそんな奴！ そもそも裏切るなら私に一言言いなさいよ、友達でしよう

!？」

ティアの長々とした罵倒にティティは唾然としている。横を見たらレベツカは苦笑していた。多分俺も同じような顔をしているんだろう。

ああ、やつぱ花蓮をアルカディア・プロジエクトに誘って良かったよ。ここまでティティに肩入れ出来る程ゲームに没入出来るなら、もっと早く誘うべきだったな。

「もーあつたまきた！ お兄ちゃん手伝つて！ 無理やりにも連れ戻すよー」  
「ふふつ、だつてさ、お兄ちゃん」

「可愛い可愛い実妹と義妹の頼みじゃあ仕方ないな、ブン殴つてでも連れ戻すしようか！」

・アルカナクエスト『模倣スル死神ノ嘆キ』

発生者『ティア』

クリア条件《死神》の逆位置 【模倣粘球 ティティリエル】の討伐

推奨レベル――

参加人数2

『アルカディアストーリー』『道化は己の夢を嘲笑う』最終フェーズです』  
『プレイヤー名『ティア』にアルカディア・プロジェクトを発令します』

## #34 少女達よ希望を抱け 第四項

・アルカナクエスト 『堅牢タル節制ノ息吹』

発見者『グレン』

クリア条件 《節制》の逆位置 【究極金属 サルバナメ】の討伐

推奨レベル ——

参加人数 42人

---

先ずそいつを最初に見た時の感想は水銀であつた。

目の前で液化化と固形化を自在に繰り返すこの銀色の物体は水銀の様な有毒性は無い……と思いたい。実際、あつたとしてもそこまでたどり着けていないのだが。

「トトの姉貴！ 左翼の被害がデカイ、俺がそつちに回るぞ！」

「分かった、正面は私に任せろ。グレンはそのまま遊撃として走ってくれ！」

既に戦闘開始から5分程しか経っていないにもかかわらず、『紅の斧』のクランメン

バーは4分の1程削られている。『紅の斧』は『鳶の宮殿 ver. 2』との戦闘で人数上限の1000人のうち、18人が強制ログアウトを喰らっている。残りの82人は半分に割って、こちら側に割いた人数は41人。そのうち10人がデスペナルティになっている。

正直分が悪い。相対する相手はあまり大きくは無いが、その小ささ故に攻撃が当て辛い。その上、水銀の様な軟体さを見せたかと思うとすぐに硬質化して攻撃を弾く。生半可な攻撃では殆どダメージを与えられていない。『紅の斧』のクランメンバーは私達に合わせて後衛職で固められている。グレンの采配だが、そうでなければ既に即席連合は半壊していただろう。

「[パワーボム]」

両手に握りしめる大剣をアーツを使いながら「サルバネマ」に対して振り下ろす。その一撃は直撃したものの、「パワーボム」の効果である振り下ろした時の爆発は起きず、「サルバネマ」の体が大きくくうねり、衝撃を飲み込んだ様に見える。

「くそつ、やつぱりそういう事か」

既にアーツは何度か当てているが、ほとんど効果が見受けられなかった。理由としては「サルバネマ」の特性と重戦士のアーツ全般に言える特性がかなり相性が悪いのが大部分を占める。

トトの現在の職業である狂騎士はいわゆる、重戦士系統とプレイヤーからは呼ばれる職業である。システムというのはプレイヤーの初期職業である旅人から探求者組合にて探求者登録する際に選ぶ職業。第一段階と呼ばれる職業の名前で決定する。

重戦士系統の特性としてHP、ATK、DEFが比較的に伸びやすい系統と言われている。有志のプレイヤーによる検証班による検証でそれは明らかになった。更に覚えられるアーツとしては一撃の威力を求めるアーツである事、比較的クールタイムが長い事が言われる。

それは正道とは離れた成長を遂げる狂騎士でも同じである。重戦士系統が伸びやすいステータスは同じように伸びるのだが、狂騎士はとりわけATKの伸びが良く、前線で他のメンバーの盾役になるよりはダメージソースの方が適正が高い。故にトトの一撃はこのメンバーの中ではかなりの高威力を發揮するのだが、それは「サルバネマ」の特性によって半減以下にまで抑えられてしまっている。

「魔法は効かない、物理も対して効いていない。その上相手の攻撃は的確で高威力。全く、嫌になるな」

《節制》の逆位置 【究極金属 サルバネマ】

全身を金属で構成し、自在に己の体を扱い神秘を追い求める探求者を追い詰めるアルカナであるが、こいつの特性はたった一つ。



自分の体を瞬時に自身の認識した事のある金属に変化させる。それだけである。

本来、アルカディア・プロジェクトでアルカナと呼ばれるボスにはアンナなどの管理AIによっていくつか特性が付与されている。「エルドワーク」で例えるならば、自身の周りの熱量を自在に操る、溶岩から自在に操れる眷属を生み出す、などと言ったものだ。しかし「サルバネマ」の特性は一つ。それも広範囲にわたる強力な能力などでは無く、自身の体に影響する一つのみ。アルカナの中でも比較的弱い部類である。

しかし、この状況では最悪に近い特性なのだ。

「魔法を打ち込めば魔法銀、物理を打ち込めば古代金属で受け止め水銀で衝撃を流す。攻撃をする時は神秘金属。そんな希少な金属を潤沢に使われたら少人数ではどうしようもないぞ」

魔法銀、<sup>ミスリル</sup>古代金属、<sup>アダムンタイト</sup>神秘金属。ゲームをやるものならご存知だろうかいわゆる現実には存在しない架空の金属である。アルカディア・プロジェクトにも実装されており、その希少価値と性質の優秀さによりトッププレイヤーにはよく使用されている金属である。<sup>ミスリル</sup>魔法銀は今確認されているの中では最高の魔法抵抗<sup>M</sup>を持ち、<sup>アダムンタイト</sup>古代金属は同じく最高の物理抵抗<sup>D</sup>を、<sup>ヒビイロカネ</sup>神秘金属は最高の硬度を持つ。

固有武器に目を奪われがちだが、プレイヤーに限らず生産職の探求者は固有武器や神祕防具に負けず劣らずの武具を作り出す事を目標としている。勿論だがプレイヤーの

装備を全て神秘防具や固有装備で固めることは出来ない。故に腕の良い鍛冶屋というのは大手クランには必須であり、これらの架空金属はプレイヤーの羨望の的なのである。

そんな希少な物を自在に生成し操る「サルバネマ」は一撃の重さを追求する攻撃型の重戦士系統には天敵と言えた。

「レベル的に主力足り得るのは私とグレン、他グレンのクランのサブマスター以下数人。これは、少々厳しいな」

しかしセラフイム・ワールド時代から『蔦の宮殿』という少数ながらもトップクランの一つとして数えられるクランを率いてきた実績は伊達では無い。最盛期のセラフイム・ワールドでは物理無効の敵など山ほど居た、物理無効は必ずしも物理型の職業ジョブだけで討伐出来ない訳ではない。

「さて、愚痴をこぼしてばかり居ても始まらないな。アーツが効かないのなら別のやり方を試すまで、特攻が売りの私とて、がむしやらに突っ込むだけが能では無い。それに……」

——今夜は新月だ。

見上げる空に月は無く、夕日が沈もうとしていた。

「ガーラ、海老天、お前らは左に回って第三隊の援護に回れ！ モグラ率いる第七隊は第五隊の残りを率いてトトの姉貴の援護だ！」

元『鳶の宮殿』、アルカディア・プロジェクトでは大規模PK克蘭『紅の斧』の克蘭マスターであるグレンは戦場を走り回りながら指示出しと並行して【サルバネマ】にちよつかいをかけ続けていた。

「团长！ 損害率50%を超えました、右翼の戦線の維持が不可能、私の独断で第一隊を援護に回しました！」

「ノーラか、構わん。サブマスターのお前にはほぼ俺と同権限を与えている。それに第一隊はお前の旗下だろう、好きにしろ」

『紅の斧』はグレンが中心になって発足した克蘭であるが、そもそもグレンはトトラと共にまた一緒にやるつもりであった。しかし新しく自分の克蘭を立ち上げたのにはこのノーラと呼ばれた女性プレイヤーが大きく関わっている。

ノーラ、正式にはノーラ@鳶の宮殿近衛隊 遠隔奉仕部 部長 と言う。

@の後も含めて全てがプレイヤーネームである。何となく字面で察する事が出来るだろうが、彼女はセラフイム・ワールド時代の『鳶の宮殿』の大ファンである。大の前

に超ド級のが付く程の。

セラフイム・ワールド時代の『鳶の宮殿』はその少人数故の悪目立ちと、それに負けない強さによってかなり多くのファンが居た。ロータス以下殆どのクランメンバーはそういった事に興味が無かったので無関心を決め込んでいたが、クランマスターであるトト、『鳶の宮殿』サブマスターの二人は交流を持っていた。

鳶の宮殿近衛隊はそんなファンクラブの総称である。

「綺麗な華に棘があるように、荘厳な宮殿には鳶がある」とはサブマスターの言葉である、少々管理AIの末娘イザベラ副二病と通じるものがあるだろう。「それならば、宮殿を守る鳶の手足となる近衛が必要では？」という事になり、ファンクラブは自ら達を近衛隊と名乗った。直接的な交流は殆ど無いに等しかったが。

『鳶の宮殿』のクランメンバーには鍛冶屋が居たので装備類は間に合っている。更に元々戦闘系のクランでは無く、全てに手を出していた広く浅くのクランだった為、薬師も居たのでポーションも間に合っている。

ならば第一次生産だ。ポーション類の元になる薬草や装備の元の金属を供給しよう。となったのが後方支援部。

戦闘の邪魔をするPKらを（勝手に）倒し、円滑なゲームライフを送れるようにしよう。となったのが遠隔奉仕部。

少数クラン故に拾い損ねた情報を集めて、裏から支援しよう。となったのが情報収集部。

主に近衛隊はこの三つに分けられた。ちなみにこの三つの派閥はそれぞれ一つのクランを形成しており、横の繋がりを何よりも大事にした。これが『蕨の宮殿』をランキング1位に押し上げた要因の一つになっている事は疑うまでも無い。

しかしトトの受験を皮切りに『蕨の宮殿』のメンバー全員が集まる事は難しくなり、セラフイム・ワールド自体も後継であるアルカディア・プロジェクトの発売で下火になっていった。

それに伴い近衛隊も解散、遠隔奉仕部のクランマスターであったノーラもセラフイム・ワールドを引退した。しかし、アルカディア・プロジェクトでトトというプレイヤーが神秘防具<sup>アルカナ</sup>を得たという情報がWikiや掲示板に広まった。近衛隊は解散後も仲の良いプレイヤー同士が独自に繋がりを持っており、アルカディア・プロジェクトを持っていなかったノーラにもその情報が伝わってきた。

もしかしたら……そんな思いを胸に何とか手に入れたアルカディア・プロジェクトを立ち上げてログインしたノーラがグレンと出会ったのは運命だったのだろう。

グレンはトト、ロータス、クリップ、ネオンらに次いで5番目に『蕨の宮殿』に入つた人物である。グレンは有り体に言えば四人の少年少女が織りなすあの空気が好き

だった。年は離れていたが、弟や妹の様に接した。年甲斐もなくはしゃいだ物だ。今ではロールプレイも板につき、トトの事を姉貴と呼ぶ程である。トトよりもずっと年上だが。

ノーラとグレンは直ぐに意気投合。『鳶の宮殿』の話で盛り上がった。そんな時、二人の入っていた店の外から『鳶の宮殿』を名乗るプレイヤーが明らかに初心者らしきプレイヤーに絡んでいるのを見た。

グレンとノーラはそれに激怒、街の中はPK禁止区域であるにもかかわらず、悪徳プレイヤーをPKした。すぐさまお尋ね者になり、衛兵に追われながらも二人は笑い合っていた。

その時、PK克蘭『紅の斧』は始まったのだ。

故に今のこの状況はノーラにとっては夢の如きものである。

憧れの人たちと共に肩を並べて強敵と戦っている。それを夢と呼ばず何と言う。

「射線を開けなさい、「リジエクトストーリー」

簡略詠唱を経て、ノーラの持つ杖から凄まじい水量の水が「サルバネマ」に襲いかかる。「リジエクトストーリー」、水属性特級魔法。そのレベルはこの戦場でトップを誇るLv.95。魔法使い系統、第四段階の職業賢者の一撃は遂に「サルバネマ」の巨体を動かす事に成功した。

## #35 少女達よ希望を抱け 第五項

水の流れは侮ってはならない。たかが時速2km程の流れが足に当たり続けるだけでも人間は容易に流されてしまう。それが魔法という力で増幅された人ひとりを飲み込む様な激流ならば金属の塊とて耐え切れるものではない。

「リジエクトストリーム」という魔法は本来、対大軍用の面制圧魔法である。波は横に広がり、とてもでは無いがこんな混戦の最中に使える魔法では無い。しかし、賢者にまで至った彼女の魔法はある程度使用者のイメージにより柔軟性を持つ。

というより本来ならば全員賢者になどならなくても魔法はイメージによってある程度効果を変えられる。他でも無い魔法担当AIであるイザベラがそう設計した。しかし賢者にでもならなければその事実気付くことは無い。魔法はこうあるべき、という先入観が先行するからだ。

「すごいな！ グレン、良い仲間を見つけたじゃないか」

「がっはっはっ、そいつあ嬉しい言葉だねえ。出来れば本人に言ってやってくれや」

「ああ、ノーラと言ったか。グレンより前に私が出会っていれらばうちにスカウトしたいくらいだ」

「はいっ、喜んで！」

満面の笑みで堂々と乗り換えを宣言した。

「おいしい!？」

「ふふっ、冗談です。私も今の『紅の斧』が結構気に入ってますので」

絶対冗談じゃなかった。俺が許可を出せば絶対こいつ『蕨の宮殿 ver. 2』に乗り換えてやがった。そう思いながらグレンは水流に飲み込まれた「サルバネマ」を睨みつける、アルカナに分類されるモンスターがこの程度の魔法一発で沈むなど考えられる訳もなく、果たしてその通り「サルバネマ」は何事もなかった様に立ち上がった。

「よし、グレン、ノーラ。出来るだけ合間を開けずに攻撃を叩き込むぞ、いくら効きが悪くても自己回復の手段が無い以上、いつかは沈む」

「了解しました、トト様」

「りょーかい」

自らの丈以上の大斧を肩に担ぎ、大きく息を吐く。

グレンはトトと同じ重戦士系統の職業である。しかし狂戦士系統ではなく、重装騎士系統と呼ばれる分岐を選んでいる。狂戦士の特性が「暴走」のスキルだとすれば重装騎士にはこれといった特性は存在していない。重戦士系統が不遇な成長先と言われるのはそれが所以である。しかし単純にステータスの上がり幅が高い。



これといった奇抜さは持たないものの、高いHP・ATK・DEFで正面から身の丈以上の相手と打ち合うことが出来る、そんなシンプルな性能である。

「さて、と」

グレンは自らが平凡である事を自覚している。

元克蘭マスター

トの様なカリスマは持つておらず、クリップやネオンの様に天才的なアーツ回しをする事も出来ない、当然ロータスの様に一芸に秀でている訳でも無い。

そんな自分がセラフイム・ワールドという一大ブームを巻き起こしたゲームの中でもトップ克蘭と呼ばれるた薦の宮殿のメンバーだというのは今でも誇りなのである。

取り柄といえはこの巨体くらいだろうか、それでもそんな自分に対して誘いをかけてくれた仲間がいるのだ、自分を信じて前線を任せてくれた仲間がいるのだ。そして何よりも、そんな自分を憧れだ、そう言って集まってくれた今の仲間がいるのだ。

故に努力を続けた、必死に効率の良い組み合わせの職業を探した。

だからそれは必然だったのだろう。

「換装」紅の鎧

とあるユニーククエストの達成報酬でグレンはそれまでクオーレにのみ発見されていた新しい職業を発見した。今ではそれ以外に十数種類が確認されてはいるものの、その当時大いに議論になった。



しかも我々と同じ神秘を持つ者では無く、水の魔法を使う賢者と古代の職業を振るう戦士と来た。《月》の神秘を持つ女に突破される事は考えてはいたが、それでは試練を突破したとは言えない。

神秘を持つ者には新たな試練は与えない。それが大原則ではあるが、まあ別に強制という訳では無い。あのいけすかない「リユージット」は嫌いなのである。あの女には絶対に試練は与えないが。

しかしそうか、ここには私と同じ神秘が沢山集まっている。《正義》と《死神》はまだ試練の途中、《月》と《愚者》は見定めたか。全く、羨ましい事だ。我らの宿願とも言える。

特に《愚者》の選んだ者は英雄か、傍に待てるは大精霊、五千年前と同じなのは運命か、それとも仕組んだのかは知らないが、此度は上手くいく事を願っているよ、管理者ども。「サア、ソレデハ私モ試練ヲ与エヨウ。我が名ハ、サルバネマ。《節制》ノ神秘ヲ司リ、究極金属ノ称号ヲ持ツ者ナリ！」

~~~~~

時を同じくして、森の北西部には。

「はあっ……はあっ……」

地面に杖を突いて今にも倒れこみそうなネオンと。

「糞がっ……」

MPの枯渴により全身に重りを付けられたような脱力感で座り込んでしまっているクリップ。

「何で、邪魔をするんですか、よりにもよって貴方が！」

そして……

「邪魔では無い。貴様らに神秘を背負う覚悟を問うているだけだ」

炎で出来た鎖に拘束されている《正義》の正位置　超克天使クヴァークを背にしなから、クオーレの英雄、『日輪』とまで呼ばれる最強のクオーレ、グラディス・カンペアドールに剣を突きつけられているシエルの姿があった。